

THE MITSUBISHI FOUNDATION ANNUAL REPORT

2025

三菱財団年次報告書



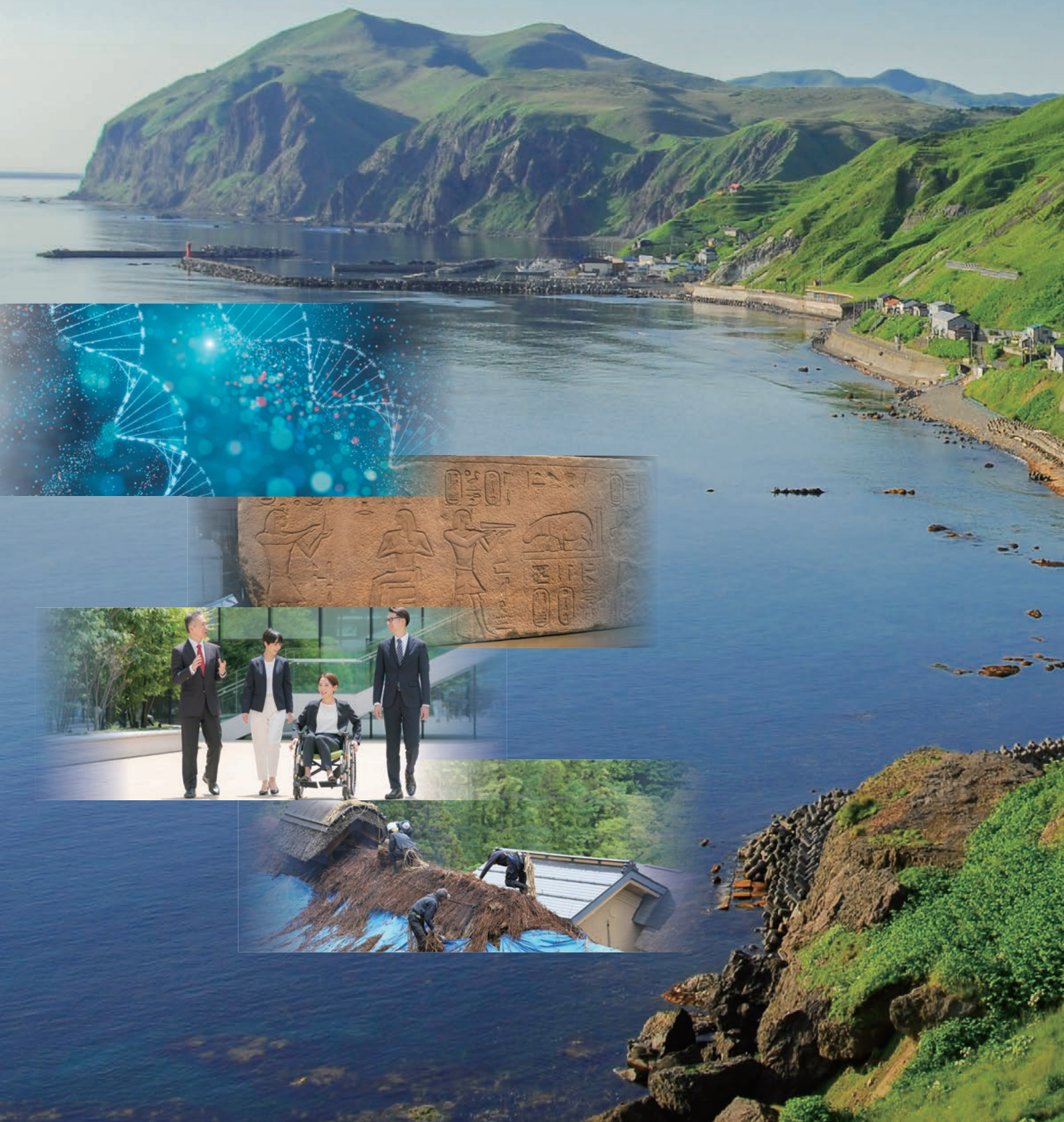
公益財団法人 三菱財団

THE MITSUBISHI FOUNDATION

私たちは、学術研究、社会福祉、文化財等に関する

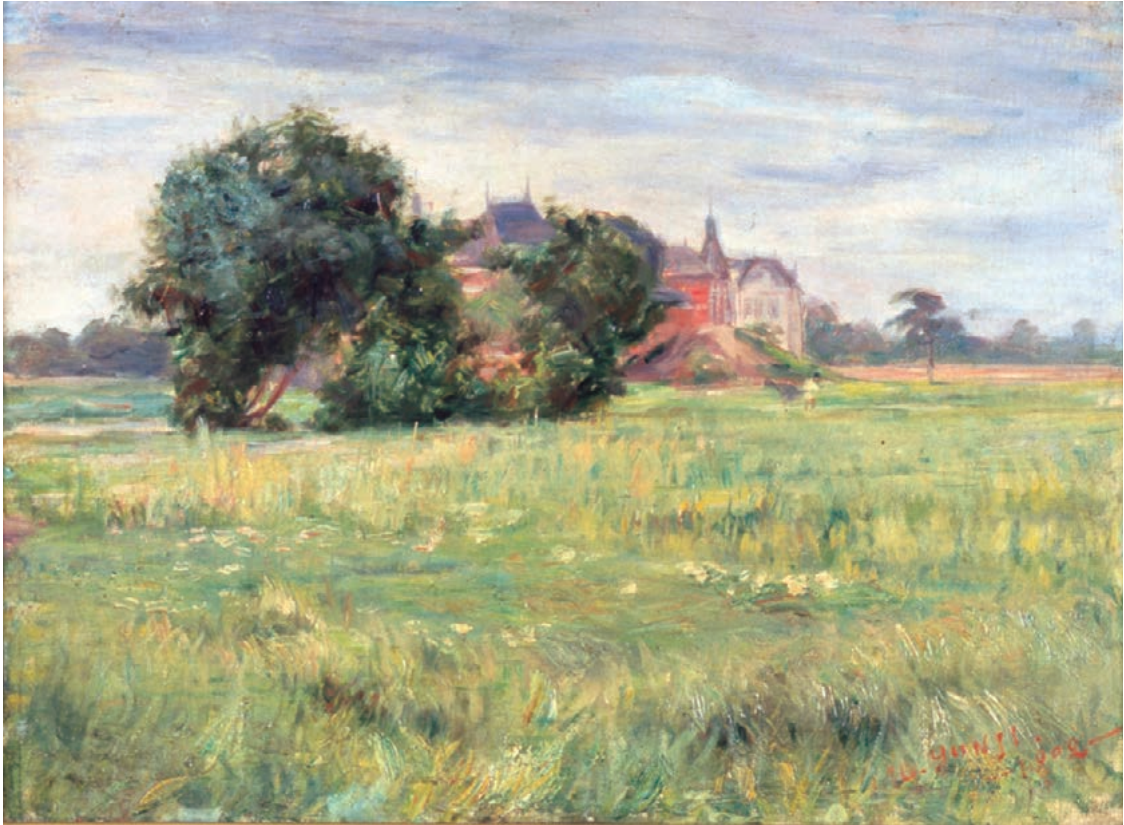
事業等に援助を行なうことで

日本の学術、教育、文化、福祉の向上に貢献しています。



第56回三菱財団年次報告書

ご挨拶	3
未来につながる研究・事業助成	4
助成報告	15
1 自然科学研究助成先一覧	16
2 人文科学研究助成先一覧	44
3 社会福祉事業・研究助成先一覧	57
4 文化財保存修復事業助成先一覧	71
三菱財団社会福祉特別助成 「外国にルーツがある人々への 支援活動応援助成(第6回)」助成先一覧	79
三菱財団のあらまし	83



明治32年頃の丸の内 通称「三菱ヶ原」
画像提供：三菱地所株式会社

ご挨拶

2025年度年次報告書の発刊にあたり、一言ご挨拶申し上げます。

当財団は、三菱創業100周年を記念し、創業以来の社会貢献の精神を形とすべく1969年に設立されました。2010年に公益財団法人に移行し、2019年には設立50周年を迎え、今日まで一貫して研究助成、事業助成を続けてきました。今後も日本社会に貢献していくというその使命を、引き続きしっかり果たしていきたいと考えております。

2025年度は、自然科学（一般助成及び若手助成）、人文科学、社会福祉、文化財保存修復の各分野で通常助成を計画通り実施するとともに、社会福祉分野では、中央共同募金会との共同助成により特別助成（第6回）を実施しました。

2025年度助成実績としましては、通常助成において、自然科学研究助成、人文科学研究助成、社会福祉事業・研究助成、文化財保存修復事業助成合計で1,899件と非常に多数の応募を頂き、厳正かつ慎重な審査・選考の結果、186件・755百万円の助成を行いました。また、社会福祉分野の特別助成（中央共同募金会との共同助成）として、「外国にルーツがある人々への支援活動応援助成（第6回）」を実施し、37件・25百万円（当財団拠出分）の助成を行いました。これらにその他諸事業費助成2件・2百万円を加え、2025年度助成実績は、225件・782百万円となりました。当財団設立以来の助成実績累計では、件数5,343件、助成金額22,426百万円となりました。これまで長年に亘り、多方面の皆様より賜りましたご支援、ご指導に対し、改めて心より厚く御礼申し上げます。

皆さまにおかれましては、引き続き幅広いご支援、ご指導を賜りますようお願い申し上げますとともに、財団の諸活動につきまして、忌憚ないご意見およびご指導を賜りますようお願い申し上げます。

公益財団法人 三菱財団
理事長

三毛 兼 承



未来につながる研究・事業助成

2025年度の助成について

2025年度は、自然科学（一般助成及び若手助成）、人文科学、社会福祉、文化財保存修復の各分野で通常助成を実施するとともに、社会福祉分野では、昨年度に続き、特別助成（第6回）を中央共同募金会との共同助成で実施しました。

内訳としましては、通常助成において、自然科学分野1,291件10,405百万円、人文科学分野323件1,017百万円、社会福祉分野222件802百万円、文化財保存修復分野63件175百万円の応募に対し、自然科学分野84件492百万円（うち若手助成29件116百万円）、人文科学分野37件95百万円、社会福祉分野43件120百万円、文化財保存修復分野22件48百万円、合計186件755百万円の助成を行いました。また、社会福祉分野の特別助成として、中央共同募金会との共同助成により、「外国にルーツがある人々への支援活動応援助成（第6回）」を実施し、84件179百万円の応募に対し37件25百万円（当財団拠出分。中央共同募金会拠出分を合わせた助成総額は69百万円）の助成を行いました。これらにその他諸事業費助成2件2百万円を加え、2025年度の助成実績合計は、225件782百万円となりました。

助成金贈呈式

2025年9月11日、丸の内の東京會館で、助成金受領者と来賓、選考委員、財団役員合わせて約250名が出席し、2025年度助成金贈呈式が開催されました。

贈呈式では、三毛理事長の挨拶、各分野の選考委員長からの審査報告の後、助成金受領者に贈呈書が贈られ、各分野の助成金受領者代表の方々が、謝辞とともに自らの研究・事業内容等を披露されました。



三毛理事長挨拶



贈呈書授与



自然科学 審査報告

自然科学選考委員長
十倉 好紀

自然科学部門 研究助成の選考結果をご報告申し上げます。

本年度の自然科学部門の研究助成の総額は、選考の結果、一般助成、若手助成併せて昨年と比べて10件の増加の84件を採択候補と致しました。採択金額は4億9,200万円にて、昨年と比べ7,200万円の増額となります。応募件数が約200件増加し、1,291件となったことから、従来より競争倍率が高倍率となり厳しい競争環境であったことから、予算の追加手配を頂きました。

本年度の応募総数1,291件の内訳は、一般助成は922件、若手助成は369件となり、一般助成は約2割の増加、若手助成は約1割の増加となりました。競争倍率は、一般助成は16.8倍、若手助成は12.7倍と引き続き高倍率となっており、申請案件の内容としては、高いクオリティを維持しております。

選考にあたっては、応募された研究計画のユニークさや既存概念にとらわれない研究かどうか、研究者のこれまでの研究実績などから当該研究の実現性等も考慮にいれ、また、若手については若手らしいチャレンジングな研究か等の観点も含めて見るように心がけました。

審査手続きにおいては、選考委員会は実開催とオンラインを組み合わせ、面接はオンラインを有効に活用し、効率性を意識しつつも、活発な議論を行った上で、クオリティの高い助成先を選定いたしました。

なお、昨年までは、全採択候補者に対して10分間の面接を行って参りましたが、採択数の増加によりすべての採択候補者と面談することが難しい状況であること、高い競争倍率の中から選んだ採択候補先の研究はクオリティの高いものが多いことから、本年度の選考より、面接は選考委員会が「必要と判断した先」に対して実施しました。面接件数は、一般で14件、若手で9件と計23件です。

この結果、採択候補件数は、一般助成は昨年比2件増加の55件、若手助成は8件増加の29件の計84件となりました。若手助成については、ここ数年20倍を超える競争倍率でしたが、12.7倍まで引き下げることができております。

次に選考された課題を一般助成で医学・生物系1件、理工系1件を、若手助成で医学・生物系1件を、ご紹介申し上げます。

まず初めは、一般助成の生物系から
28番 大阪大学大学院 生命機能研究科
鈴木 基高（すずきもとたか）さんの、

「なぜ意識レベルが樹状突起の特性を変えるのか？
細胞内メカニズムの解明」
です。

脳科学における重要な未解決問題の一つに、意識の神経基盤があります。「私」という固有の存在は脳のどこにあり、どんなメカニズムによって生み出されているのか？ この重要な問いに対し、研究代表者は最近「樹状突起と呼ばれる細胞組織の特性が全身麻酔によって顕著に変化する」という非常に興味深い発見を報告しました。本研究は、この発見から導き出された興味深い仮説、すなわち、2種類の代謝型受容体が意

識レベルのコントロールに深く関与していることを検証する初の試みであり、最新の技術と独創的な実験的アプローチにより、意識と細胞内メカニズムの関係を明らかにすることを目指しております。

次に一般助成の理工系から
51番 東京大学大学院理学系研究科附属ビッグバン宇宙国際研究センター 道村 唯太（みちむら ゆうた）さんの、

「超伝導単一光子検出器を用いたアクシオンダークマター探索の高感度化」
です。

現在では、様々な宇宙観測によって全物質の約80%を占めるダークマターの存在が明らかになっていますが、そのダークマターの正体は依然として謎に包まれています。宇宙論や超弦理論などの研究から、近年アクシオンと呼ばれる新粒子が有力なダークマター候補として注目されています。研究代表者は光リング共振器を用いて、レーザー光の偏光面の回転をすることで、アクシオンを探索する新手法を提案し、世界初となる観測運転を実施しています。この探索の精度向上には、光子計数技術を用いた量子計測により、従来の観測限界を突破することが可能かつ必要となります。本研究では、これまで開発してきた探索装置の感度を飛躍的に向上させることによって、質量10-10 eV 程度以下のアクシオンを世界最高精度で探索する予定です。アクシオンがこの質量の領域に存在して、それがこの高感度化した探索装置によってとらえることができれば、ダークマターの謎を解く大発見となります。

若手助成では、医学・生物系から
1番 大阪大学微生物病研究所 阿部 耕太（あべ こうた）さんの、

「なぜメスはオスより長生きか？ 性特異的な全身老化制御システムの解明」
です。

なぜ老化に性差があり、メスはオスよりも長生きなのか？ これは生物学における長年の謎の一つです。寿命・老化に性差を生み出すメカニズムを解明することは、新たな全身老化制御機構の発見に加え、男女それぞれに適した抗老化手法の開発にもつながると期待されます。しかし、そのメカニズムの理解が遅れてきた原因の一つは、性差の老化研究に適したモデル動物がなかったことでした。研究代表者は、新たな老化モデルである超短命（3ヵ月）の脊椎動物のキリフィッシュを用いて、生殖細胞が寿命・老化の性差を生み出す要因であることを突き止めています。本研究では、生殖細胞と全身老化をつなぐ機構の理解を目指して、生殖細胞が内分泌ホルモンを制御する性特異的な全身老化制御システムを解明することを計画しています。

三菱財団の研究助成は、公募制を貫き、将来に向かって大きく羽ばたく可能性を秘めた研究者を選んできたことでもよく知られております。本年度もこの伝統にそった選考を行うべく努力いたしました。

今回は、一般、若手合せて総額4億9,200万円の自然科学研究助成により、84件の研究を支援できることとなりました。心よりお礼申し上げ、ご報告を終らせて頂きます。



人文科学 審査報告

人文科学選考委員長
岩波 敦子

人文科学部門 研究助成の選考結果をご報告申し上げます。

本年度の人文科学部門の研究助成の総額は、昨年対比で1,000万円増額の9,500万円として頂き、昨年度同様、一般助成の枠内で大型連携研究助成（大型助成）の選考を実施しました。

応募はここ数年堅調に増加傾向にあり、本年度は、大型19件、一般304件の計323件と昨年対比33件の増加と、コロナ禍前の水準まで戻り、2019年度に続いて過去2番目に多い応募件数となりました。

選考にあたっては、これまでの研究成果に裏打ちされた堅実且つ実現可能性の高い研究計画に基づき、共時的・通時的観点から研究対象を精査し、人間の行動規範、デジタルアーカイブなどを通じた文化資源の保全調査、グローバルな視点に基づく社会構造分析など、今年度も多面的な視座から取り組む意欲的な研究課題をバランスよく採択候補とすることができました。

審査にあたっては、選考委員会、面接共に実開催を原則とし、大型は面接を経て1件、一般は36件、昨年対比4件増加の計37件を採択候補としました。女性比率は、個人助成36件のうち15件で41.7%（昨年実績 8件・25%）となりました。女性比率は母数である各分野の女性研究者数と連動しますので慎重な傾向分析を要しますが、性差あるいは年齢を問わず研究者が継続的に息長く研究活動が続けていける環境整備が引き続き課題と考えております。

ここで今回の助成先のなかで、代表的な研究をご紹介します。まず大型助成案件1番中島 隆博（なかじま たかひろ）氏の「地球環境再生と新しい生の形式ーアジアの知から紡ぐ倫理的未來」です。

本研究は、地球温暖化や気候変動、格差、紛争といった地球規模課題の根底に、近代以降の人間中心主義的

なヨーロッパ的世界観があると捉え、それを乗り越える新たな人間観と倫理の構築を目指すものです。本研究課題は、ヨーロッパ外の地域に根ざす固有の概念から再出発し、他の生物や非生物、環境との新たな関係を構築しながら、従来の成長主義に代わる「花開く（flourishing）」社会を構想し、新しい地球倫理を創成し、社会への導入、発信を通じて国際的実現を目指します。

続いては一般助成案件の18番 酒井一輔（さかい かずほ）氏の「女性労働・実質賃金と結婚行動に関する比較史的研究：前工業化期の日本を中心とした歴史実証分析」です。

工業化以前における女性の結婚行動に関しては、歴史人口学分野を中心に研究が蓄積されてきましたが、女性労働との関係に関しては、国内外を通じていまだ定量分析が十分には行われておりません。本研究は、女性の実質賃金の水準や男女格差といった労働条件が、初婚年齢や未婚率などの結婚行動にどのような影響を及ぼしてきたのかという、現在の少子高齢化にも関わる問いに対して、労働環境の改善と構造変容に焦点を当てて実証的データ分析を提示する今日的意義の高い研究課題です。

近年の傾向を見ますと、人文・社会科学研究においても、分野横断的な研究課題の増加が顕著です。研究メンバーの構成から、挑戦的手法を積極的に取り入れ、隣接分野との接合を通じて新たな切り口で課題に取り組む姿勢が認められます。

三菱財団は、日々変容を遂げる現代社会の課題解決を目指して、様々な見地から新たな知見の提示を試みる研究課題に対して、長期的な視野にたつて研究助成を続けてくださっており、そのご尽力に厚く御礼申し上げます。今後もご支援のほどよろしくお願い申し上げます。



社会福祉 審査報告

社会福祉選考委員長
鈴木 俊彦

社会福祉部門の事業及び研究助成の選考結果について御報告申し上げます。

本年度の社会福祉部門の事業及び研究助成の総額は、昨年対比で1,000万円増額の1億2,000万円としていただき、選考を行いました。

応募総数は222件と昨年から約4割増と大幅に増加しました。積極的な情報宣伝活動に加えオンラインでの応募説明会を継続的に実施してきたことで、本財団の社会福祉部門の助成が広く関係方面に認知された結果と考えられます。

申請内容につきましては、応募者の的確な問題意識の下、これまで必ずしも十分な取組がなされてきたとは言えない様々な社会的課題に対する実践的な事業や開拓的な研究など、良質な案件が数多く見られました。

分野別には、例年同様に「地域・在宅支援」、「高齢者」、「児童・青少年」、「身体障害」関連の案件が多く、昨年との対比では、「親子・家族」、「児童・青少年」、「地域・住宅支援」の分野の関連案件が増えました。

審査に当たっては、選考委員会・面接ともにすべて実開催とし、予定どおりに審査を行いました。選考委員会では、書類選考により60件の合格案件を選定した上で6日間かけて面接を行い、43件を採択候補としました。

内訳としては、事業案件が19件、研究案件が24件でした。事業案件・研究案件ともに良質かつ社会的な意義の高い案件が多数ありました。

次に、助成案件のうちから、我が国の社会課題を的確に捉えて対処を図ることを目指す取組を2件御紹介させていただきます。

まず、15番の「企業等から福祉現場への人材供給に関する調査研究事業」です。我が国では少子高齢化と生産年齢人口の人口減少が進む中で、各分野における人材不足への対応が喫緊の課題となっています。特に福祉現場の人材不足は危機的状況にある一方、企業等で定年退職等を迎えた方々の間には、セカンドライフでは福祉現場で社会貢献したいという一定のニーズがあります。本事業は、こうした社会経験が豊富で企業人材として活躍してきた方々に、関係諸機関と連携して福祉職場を紹介する試みであり、直面する社会課題の解決に向けた有意義な取組として効果が期待されるものであります。

次に、27番の「子ども虐待予防のための保護者支援モデルの開発と地域協働デザインの構築」です。人口減少が進む中、子どもを健全に産み育てることは我が国社会の最重要課題の一つとなっていますが、一方で子どもに対する虐待の問題は量的にも質的にも深刻度を増しています。こうした中、本事業は親への支援を主眼として、健全な親子関係を形成するための支援の手法の発展を図るとともに、支援を実施する人材の育成と人材間の横の連携を構築しようとするものであり、地域における児童虐待の防止のための体制づくりにおいて、大きな効果が期待される取組であります。

最後に、本財団の助成は、社会福祉分野で先駆的、意欲的な取組をしている事業者や研究者にとって大きな励みとなっており、我が国の社会福祉の発展に多大な寄与をしているものと考えます。

三菱関連各社の御厚意に改めて御礼を申し上げ、社会福祉部門の事業・研究助成の審査結果の報告とさせていただきます。



文化財保存修復 審査報告

文化財保存修復選考委員長
小松 大秀

文化財保存修復助成事業の助成選考結果についてご報告申し上げます。

本年度の文化財保存修復事業の助成は、選考の結果、昨年と比べて8件の増加の22件を採択候補と致しました。採択金額は4,800万円で、昨年と比べ1,300万円の増額となりますが、応募件数が昨年の24件に対し、2.5倍の63件となったことから、予算の追加手配を頂きました。

応募件数の大幅な増加は、全国の都道府県の教育委員会、全国の美術館・博物館ルート、民間の文化財サポート団体、文化財保存修復学会、東京藝術大学などあらゆるルートに積極的に広報宣伝活動を行った成果と言えます。

分野別には、絵画、彫刻、工芸品から歴史資料、考古資料に至るまで幅広い分野での保存・修復案件の申請があり、都道府県別には、昨年対比倍増となる全国30の地域から応募がありました。ここ数年、応募が伸び悩んでおりましたが、積極的に広報宣伝活動をおこなった成果が出つつあるものと思います。

審査にあたっては、各委員がそれぞれの専門性を活かして全案件を評価し、委員会では高得点のものから、各文化財の保存・修復の意義、必要度等を慎重に審査した結果、応募63件中22件（競争率2.9倍）を採択候補と致しました。応募同様に絵画、彫刻、工芸品、書跡、歴史資料等と幅広く採択することができ、修復するに足る良質の採択先を選定できたものと考えております。

続いて今回の案件のなかで代表的なものを3件ご紹介させていただきます。

その1は、16番の「乾漆造伎楽面酔胡従修復事業」（かんしつぞうぎがくめんすいこじゅう）です。

伎楽は楽器の演奏に合せて行われる仮面舞踏劇で、我が国では7～8世紀にかけて、法要などの際に盛んに行われていました。その伎楽に用いられた仮面は、奈良の法隆寺と東大寺を中心に伝存しており、古いマスクの遺例として世界的にもよく知られています。この酔胡従の面は、江戸時代には東大寺に所在していた

ことが明らかであり、現存作例の少ない奈良時代の伎楽面として貴重な存在です。この際、適切な修理を施し、良好な状態で保存管理されるとともに、幅広く公開されることが望まれます。

その2は、8番の「湖亭春望図修理事業」（こていしゅんぼうず）です。

室町時代の著名な画家、雪舟の絵画スタイルを示す優れた作品です。研究者の間では、この作品の制作時期を、雪舟が明に渡る直前とする説が有力ですが、全体にスッキリと整理された構図や表現には既に晩年の作風に近い趣があり、雪舟の画業形成を研究する上でも大変重要な作品と言えます。旧大名吉川家に伝来し、シカゴ美術館に本図の模本があることから、この作品がたいへんに貴重なものとして扱われていたことがわかります。しかし、子細に観察すると、小さな折れじわに亀裂が発生し、処々に虫喰いがあるなど劣化が認められ、早期に保存処置を施す必要があると考えられます。

その3は、10番の「壺型埴輪修理事業」（つぼがたはにわ）です。

有名な桜井茶臼山古墳出土の埴輪です。正式な発掘調査を経て出土したものではありませんが、往時、地権者によって著名な考古学者である樋口清之氏に寄贈されたものと伝えられており、確かに同古墳から出土したものと考えていいと思われます。壺型埴輪は、死者に捧げる飲食物を象徴する器として作られたものと考えられ、本作品はそのなかでも最初期に属する貴重な遺例となっています。しかしながら、長い時を経るうちに全体に劣化が進んでおり、早急な修復が必要であると考えます。

さて、国が国宝や重要文化財に指定していない文化財に対しては、国や地方自治体の支援が届きにくい状況にありますが、文化的価値が高く、修復の優先度の高い文化財は日本全国にまだまだたくさん存在しています。

三菱財団の文化財保存修復助成は、開始以来7年を迎えますが、国や地方自治体の支援の及ばない文化財の保存修復を支援する本助成は、今後ますます重要になると思われます。三菱関連諸企業のご尽力に厚く御礼申し上げまして審査報告を終わらせて頂きます。



自然科学 受領者代表挨拶

生理学研究所システム脳科学研究領域 教授
佐々木 亮

2025 年度自然科学研究助成の受領者を代表いたしまして、僭越ではございますが、御礼のご挨拶を申し上げます。理事長の三毛兼承様、役員の皆様、選考委員長の十倉好紀先生ならびに選考委員の諸先生方、そして関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

今回の自然科学研究助成では、一般助成受領者 55 名、若手助成受領者 29 名、総勢 84 名が、各研究課題に対する助成を賜ることとなりました。受領者の先生方の研究テーマを拝見いたしましても、既成概念の枠組みを超えた、非常にオリジナリティに富んだ魅力的かつ先進的な研究課題が集結しています。周知の事ではございますが、研究者は、過去の研究で積み重ねられてきた学術的叡智をもとに、独自のアイデアと視点・技術を加え、自らの知的好奇心を働かせながら新たな科学的知見の創出と未来の創造に向けて、日々、邁進しております。そのような歩みを止めない研究者らの自由な発想を尊重し、研究助成分野をあえてトップダウンに閉じず、寛大な門戸を開いていただいている三菱財団のお力添えに、身が引き締まる想いでおります。このことは、ここに集う受領者共通の想いであることを確信しております。世界に発信する研究成果を生み出すことに尽力する私共、研究者を鼓舞し、後押ししてくださる三菱財団の熱いご期待と心強いご支援に、改めまして深謝申し上げます。

今回幸いにも採択いただきました私の課題は、「戦略的な追跡行動を司る多次元空間認知の神経回路動態」と題したものです。ヒトや動物の柔軟な認知機能

を司る脳のメカニズムの解明を目指しています。例えば、ヒトを含む動物は、自身の動きを正しく認識し、同時に動く物体を正確に判断することができます。今回は、この脳神経メカニズムを解明する研究提案を致しました。近年の技術では未だヒトの脳神経活動を行う中に直接観察することができません。そのため、脳神経回路に直接アプローチ可能で、さらにヒトに近い脳回路基盤を有する非ヒト科霊長類のマカクサルを対象とし、追跡行動時の戦略性を定量化するとともに、脳神経活動を同時記録し、今まさにサルが想起していた行動を脳活動から解読する、という研究内容です。行動と同時に脳機能をマルチスケールに解析、統合して理解することで、将来的には、脳機能の回復や拡張などの医工産学応用及び、人工脳構築など革新的技術改革の飛躍的な発展を目標としています。

私は2024年に自然科学研究機構生理学研究所に異動し、自身の新たな研究室を立ち上げ、始動いたしました。研究室の主宰者として研究活動を軌道に乗せようとする重要な局面に際し、本助成金によるご支援が大きな励みになりましたことは、言葉で言い尽くせるものではありません。御恩に報いることができますよう、毎日の研究活動に精進して参りたいと存じます。

最後になりますが、御関係者皆様の益々のご活躍とご発展を祈念いたしまして、自然科学研究助成代表の挨拶とさせていただきます。本日は誠に有難うございました。



人文科学 受領者代表挨拶

東京大学東洋文化研究所 教授
中島 隆博

この度、三菱財団より助成をいただく人文科学研究助成の受領者を代表しまして、御礼のご挨拶を申し上げます。

貴財団におかれましては、三菱グループの理念である「所期奉公」すなわち社会へ貢献する事業として、学術研究や福祉事業に対する援助を通じた、日本社会の学術、教育、文化そして福祉の向上に寄与してられました。このような素晴らしい活動を50年以上継続されてきたことに深く敬意を表するとともに、今年度も、大型連携研究助成1件、一般助成36件、合計37件もの人文科学研究課題に対し、最大限のご支援をいただきましたことに厚く御礼を申し上げます。

本年度助成を賜りました研究課題には、純粋な人文科学のみならず、多様な学問分野からのアプローチにより人間理解を深めることで現代の社会課題にも直接かわる課題が多数含まれております。その中には、現代世界の地域的な諸事情に目配りしたものや、時間軸を長く取って古代や先住民の知恵から学ぶもの、あるいは女性の力が花開くような条件を整えるものなど、多岐にわたる課題が含まれております。

さて、私どもの研究課題「地球環境再生と新しい生の形式—アジアの知から紡ぐ倫理的な未来—」について紹介させていただきます。地球の温暖化は「沸騰」とも言われ、すでに世界各地では異常気象が顕著になってきております。本研究課題は、人類の喫緊の課題である地球温暖化対策のための新しい地球倫理を創成し、社会への導入に取り組むものです。

気候問題と社会問題は複雑に絡み合い、密接に連動しています。社会のあり方をより公正なものにし、生物や環境にもその公正さが及ぶように、世界規模で社会的想像を変革しなければ地球温暖化の緩和は望めません。本研究では、哲学者を中心として、先端科学技術と人文・社会科学研究者が対話し、環境紛争、災害リスク、資源管理といった具体的な事例を通じて、科学技術措置の限界と資本主義に内在する不正を明らかにします。そして、古くて新しい規範として、感情や身体に根差した「礼 (ritual)」の可能性を広げ、今日的な地球課題に取り組む土台となる「新しい普遍概念」を創出します。それは、環境正義に基づく倫理的で持続可能な市場経済、さらには新たな人間生活のあり方を提示するものです。

また、地球上の危機という不都合な真実を自分ごととして認識し、新しい生の形式を実現するアクションにつなげる学習モジュールを開発し、社会に導入します。これにより、従来の人間中心主義的社会から、他者のための倫理に基づく新しい人間社会へのパラダイムシフトの促進実現に邁進する所存です。

最後になりますが、貴財団のご支援により本研究を含む37課題の推進が可能となりましたこと、あらためて御礼申し上げます。そのご期待に応えられるよう、真摯に持続可能社会の構築に貢献できるよう研究に取り組んでまいります。本日は誠にありがとうございます。



社会福祉 受領者代表挨拶

立命館大学衣笠総合研究機構 専門研究員
阿久津 美紀

誠に僭越ではございますが、今年度貴財団より助成を賜ります、社会福祉事業並びに研究助成受領者を代表いたしまして、ご挨拶を申し上げます。福祉の向上に資することを目的に現場における社会福祉に関する事業、活動及び社会福祉に関する科学的調査研究へのご支援として、今年度貴財団より43件の助成をいただきましたことに厚く御礼申し上げます。戦後、社会福祉法が施行され、現在までに子ども、障害者、高齢者など様々な公的支援制度が整ってまいりましたが、依然として支援の隙間は存在致します。今年度採択された多くの事業並びに研究課題につきましても、そのような支援や制度の狭間にある課題解決に向けて貢献していこうとするものであり、そうした社会福祉分野の諸課題に貴財団からご支援をいただけることに感謝申し上げます。

今年度採択いただきました私どもの研究課題は、「社会的養護」という児童虐待や家庭の事情により児童養護施設などの公的な責任の下で養育される子どもに着目した研究です。私は、アーカイブズ学という記録や情報の管理、保存、活用の分野を専門として、社会的養護における情報管理と子どもの知る権利に関する研究をしてまいりました。特にその研究の関心は、施設や自治体の児童相談所が作成する個人情報などを含むケース記録について、当事者である社会的養護の出身者であるケアリーヴァーがどのような支援があれば、記録や情報にアクセスができ、利用できるのかということにあります。ケアリーヴァーの中には、幼いとき

に乳児院や児童養護施設で養育され、自分の親は誰であり、自分は何者であるのか、なぜ施設で生活しているのか等、自身の過去を知らずに育った方もおり、こうした状況の中で、社会的養護の記録は自身の知らない部分を教えてくれる、拠り所となる存在です。一方で、現在乳児院や児童養護施設など社会的養護に育った者にとって、自身のことを知りたいと望みながらも情報にアクセスできない現実もあります。また、もし自分の情報が開示されたとしても、これまで知らなかった事実を一度に知ることは、子どもにとっても大きな心理的影響を及ぼします。

私どもは、児童養護施設の職員や社会福祉、情報学、アーカイブズ学などの研究者のほかに、日本ではまだ実践が行われていないセラピューティックライフストーリーワークの実践家を含んでおります。本研究課題を通して、虐待などのトラウマがある子どもに対して、より望ましい方法で、自分の情報を受容できる環境や仕組みを日本の社会的養護の中で作っていける基礎となれるような研究成果を生み出していきたいと考えております。

最後になりましたが、三菱財団の皆様、選考委員の先生方、ご来賓の皆様、本助成金のために貴重な基金をご提供くださいました三菱グループの皆様に改めて深く御礼申し上げます。2年間のこの研究の中で、日本の社会的養護の子どもやケアリーヴァーの方たちに貢献できるように全力で研究を推進していきたいと存じます。誠にありがとうございました。



文化財保存修復 受領者代表挨拶

学校法人天理大学 理事長
西浦 忠一

今年度、三菱財団より助成いただく22件の文化財保存修復の受領者を代表いたしまして、誠に僭越ではございますが、御礼のご挨拶をさせていただきます。まずは22件もの保存修復に対しまして助成金を交付していただきましたことに、厚く御礼申し上げます。

三菱財団におかれましては、文化財保存修復事業への助成を通して社会へ多大な貢献をなされておられることに敬意を表します。先人が残した文化的所産を未来へ残していくことで、文化向上に寄与しようとされる姿勢は高く評価したいと思います。また国からの補助金が出ます国宝・重要文化財を対象外にされていることも、できる限り広く文化財を守りたいという意志の現れではないかと推察する次第です。

このたび助成いただくことになりましたのは、天理参考館が所蔵します「乾漆造伎楽面酔胡従（かんしつぞうぎがくめんすいこじゅう）」です。有名な美術品収集家であり茶人でもあった原三溪の旧蔵品です。これは乾漆造です。布目の粗い麻布を三層貼り重ね、表面は全体に黒色漆を塗り、髪の部分を除き彩色が施されています。飛鳥時代に伝わり天平時代に盛行した伎楽は、東大寺大仏開眼供養にも奉獻されました。本例は、乾漆造であることから奈良時代の作であることが確実視され、寛政4年（1792）の住吉廣行筆『南都東大寺 伎楽之面写』および同12年頃の松平定信らによる編集の『集古十集』に記載されていたもので、明治

以降、何らかの理由で東大寺から流出した可能性の高いものです。酔っ払った胡人「酔胡従」を表現しています。

本例は鼻先が欠けて無く、顎や両耳も大きく欠失していますし、また破断面が露出し、表面の漆層および乾漆層には亀裂が生じて浮き上がっているなど、破損著しい状態にあります。破損状況から判断して、経年劣化というより、当時破損したと思われるものです。明治期に伎楽面は数多く海外に流出しましたが、本例は破損があったためか国内にとどまったものと考えられます。伎楽面のなかでも乾漆造のものは脆弱なため遺品は少ないと言えます。また製作技法の確かさなどから実際に大仏開眼供養に用いられた可能性もあります。したがって、その歴史的・学術的・社会的価値は計り知れません。

これまで展示することも、他館へ貸し出すことも控えて参りました。このたびの助成により、保存処理がなされれば、この貴重な資料を広く公開し、活用することが可能となります。

最後になりましたが、三菱財団のご支援により、本件を含む22件の保存修復ができますことに、改めて御礼申し上げます。それとともに、これからも貴重な文化財を守り、「もの」を通して「ひと」の「こころ」を理解できるように、博物館活動に精進して参りたいと思います。本日は、誠にありがとうございました。

研究成果報告会

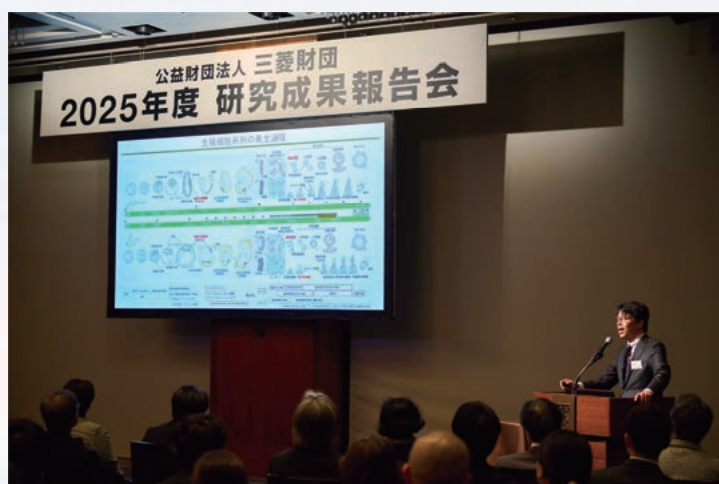
2025年9月11日、丸の内の東京會館で、2025年度助成金贈呈式の開催に先立ち、助成金受領者と来賓、選考委員、財団役員合わせて約200名が出席し、2025年度研究成果報告会が開催されました。

今回は、過去の助成先の中から、自然科学分野・人文科学分野の2分野で成果報告をいただきました。

自然科学分野研究成果報告

自然科学分野では、2022年度の助成先である、大阪大学大学院医学系研究科教授の林克彦（はやしかつひこ）氏から、助成対象となった「配偶子の性差を規定する遺伝子ネットワークの解明」の研究成果をもとにご報告いただきました。

ご報告の後、質疑応答が行われ、最後に自然科学分野十倉選考委員長の講評が行われました。



林 克彦氏による成果報告の様子



林 克彦氏



十倉選考委員長講評

人文科学分野成果報告

人文科学分野では、2022年度の助成先である、佛教大学社会学部教授の香西豊子（こうざい とよこ）氏から、助成対象となった「近代日本における伝染病への制度的弾性（レジリエンス）に関する実証研究」の研究成果をもとにご報告いただきました。

ご報告の後、質疑応答が行われ、最後に人文科学分野岩波選考委員長の講評が行われました。



香西豊子氏による成果報告の様子



香西豊子氏



岩波選考委員長講評

2025

第56回(2025年度)の

助成報告

助成金受領者と助成概要



第56回（2025年度）三菱財団自然科学研究助成先一覧

【一般助成】

番号	所在地	名 称	使 途	金 額
1	京都府	京都大学iPS細胞研究所 特定講師 あらおか としかず 荒岡 利和	光操作技術を応用した次世代型 ネフロン前駆細胞による高度 腎障害を伴うCKDに対する新規 治療法の開発	5,500,000円
2	熊本県	熊本大学ヒトレトロウイルス学共同研究 センター 教授 いけだ てるまさ 池田 輝政	HIV-1感染者における骨髄由来 抑制細胞MDSCと免疫応答の 関係	6,000,000円
3	福岡県	早稲田大学大学院情報生産システム研究科 教授 いけはし たみお 池橋 民雄	検知時間の超短時間化を実現 する真北測定MEMSジャイロ	4,500,000円
4	兵庫県	兵庫県立大学大学院理学研究科 教授 いなき みきこ 稲木 美紀子	上皮細胞の集団移動による形態 形成の機構	5,400,000円
5	京都府	京都大学化学研究所 准教授 いまにし みき 今西 未来	核酸高次構造選択的なペプチド の創出とがん遺伝子制御	6,000,000円
6	愛知県	名古屋大学環境医学研究所 特任講師 えんどう ふみと 遠藤 史人	TDP-43病理に起因するALS 分子病態を解明する革新的 マルチオミクスアプローチ	5,000,000円
7	北海道	北海道大学電子科学研究所 准教授 おおた りゅういち 太田 竜一	ナノ光共振器の光学浮上が拓く 固体材料のレーザー冷却	5,700,000円
8	宮城県	東北大学電気通信研究所 准教授 おおつか ともひろ 大塚 朋廣	原子層量子ドットセンサの開発 と応用	6,200,000円
9	茨城県	産業技術総合研究所計量標準総合センター 主任研究員 おかざき ゆうま 岡崎 雄馬	ミリ波を用いる新たな量子機械 の実現	14,000,000円
10	東京都	東京大学定量生命科学研究所 教授 おかだ ゆき 岡田 由紀	精子形成に伴う生理学および 病理学的DNA断片化部位の同定	6,500,000円
11	東京都	東京大学大学院医学系研究科 助教 かきうち みわこ 垣内 美和子	高度免疫逃避性ニッチェから 考える、胃上皮幹細胞ヒエラルキー の解明	5,500,000円
12	埼玉県	埼玉大学大学院理工学研究科 准教授 かわむら あきのり 川村 哲規	魚の正中ヒレから紐解く脊椎 動物の初期進化の研究	6,100,000円
13	福岡県	九州大学大学院工学研究院 准教授 きむら やすひろ 木村 康裕	制御された結晶欠陥に基づく 原子輸送エンジニアリングと 金属ナノワイヤ大面積化への展開	7,000,000円
14	東京都	東京大学大学院理学系研究科 教授 きゃんべる ろばーと Campbell Robert	次世代赤色蛍光バイオセンサー による生細胞イメージングの 革新	6,700,000円
15	福岡県	産業医科大学医学部 准教授 くぼ さとし 久保 智史	全身性エリテマトーデスを駆動 する遺伝素因の解明	5,000,000円
16	大阪府	大阪大学大学院基礎工学研究科 教授 くらもち ひかる 倉持 光	超高速2次元分光による凝縮相 複雑分子系の反応座標の可視化	10,500,000円
17	愛知県	名古屋大学理学研究科 准教授 こげやま けいこ 苔山 圭以子	短周期投げ上げ法による重力波 検出器の地面振動雑音除去実験	6,500,000円

番号	所在地	名 称	使 途	金 額
18	東京都	東京大学医科学研究所 准教授 こん あやな 昆 彩奈	加齢に伴うクローン性造血からがんへの進展メカニズムの解明	8,000,000円
19	埼玉県	理化学研究所開拓研究所 理研ECL研究チームリーダー さいとう まこと 齋藤 諒	OMEGA随伴システムの解析とツール開発	7,000,000円
20	愛知県	生理学研究所システム脳科学研究領域 教授 さ さ き りょう 佐々木 亮	戦略的な追跡行動を司る多次元空間認知の神経回路動態	13,000,000円
21	神奈川県	東京科学大学物質理工学院 教授 さんのみや たくみ 三宮 工	電子線励起発光における光子統計性を活用した半導体・光デバイスの解析	6,000,000円
22	熊本県	熊本大学発生活医学研究所 教授 しおだ のりふみ 塩田 倫史	グアニン四重鎖を標的としたシヌクレイノバチーの病態解明と創薬研究	7,000,000円
23	福岡県	九州大学医学部 准教授 しば た けんすけ 柴田 健輔	微生物由来代謝経路を利用した免疫制御機構の解明と新規ガン免疫療法の開発	5,500,000円
24	愛知県	名古屋大学トランスフォーマティブ生命分子研究所 (ITbM) 特任講師 しもとおの あきえ 下遠野 明恵	植物の乾燥ストレス受容を構造から読み解く	7,000,000円
25	兵庫県	理化学研究所生命機能科学研究センター チームディレクター しろうち かつゆき 城口 克之	動的かつ遺伝子網羅的な一細胞計測への挑戦	7,000,000円
26	京都府	京都大学大学院農学研究科 教授 すが せ けんじ 菅瀬 謙治	パーキンソン病予防に向けたEGCG酸化物の線維化抑制機構の解明	7,000,000円
27	宮城県	東北大学東北メディカル・メガバンク機構 准教授 すずき たかふみ 鈴木 隆史	扁平上皮がんの細胞運命決定を司るNRF2新規転写活性化機能の分子基盤解明	5,500,000円
28	大阪府	大阪大学大学院生命機能研究科 教授 すずき もとたか 鈴木 基高	なぜ意識レベルが樹状突起の特性を変えるのか？細胞内メカニズムの解明	13,000,000円
29	高知県	高知大学教育研究部 准教授 そ たい はじめ 祖谷 元	重力波星震学を用いた超新星重力波の理解と高密度物質の解明	3,000,000円
30	京都府	京都大学大学院農学研究科 教授 たかおか ようすけ 高岡 洋輔	転写因子を精密制御する人工植物ホルモンの開発	6,050,000円
31	北海道	北海道大学大学院情報科学研究院 教授 たけい くにはる 竹井 邦晴	AR / VR応用に向けたウェアラブル・エッジAI型高精度入力システムの開発	6,500,000円
32	東京都	上智大学理工学部 教授 たけおか ゆうこ 竹岡 裕子	Sn系ペロブスカイト太陽電池の安定性向上に向けた有機アンモニウム材料の検討	6,000,000円
33	東京都	公益財団法人東京都医学総合研究所 臨床医科学研究分野がん免疫プロジェクト プロジェクトリーダー たんの ひでたか 丹野 秀崇	細胞機能を可視化する次世代プローブの開発	5,900,000円
34	京都府	京都大学大学院医学研究科 特定教授 ちゃもと けんじ 茶本 健司	ベタインによるミトコンドリアを介した炎症抑制機構の解明	7,500,000円

番号	所在地	名 称	使 途	金 額
35	北海道	北海道大学大学院理学研究院 講師 常松 友美 (つねまつともみ)	夢を形作る記憶情報の同定	5,300,000円
36	東京都	日本医科大学研究部 教授 遠田 悦子 (とおだえつこ)	免疫デフォルトモードネットワークが規定する疾患リスクのメカニズム解明	4,900,000円
37	岡山県	岡山大学学術研究院医歯薬学域 教授 富樫 庸介 (とがしようすけ)	ミトコンドリア競合のメカニズム解明	8,000,000円
38	富山県	富山大学学術研究部 教授 中川 崇 (なかがわたかし)	NAD前駆体トリゴネリンの生体内代謝経路の解明とサルコペニア・バイオマーカーへの応用	6,400,000円
39	東京都	東京科学大学歯学部 教授 中島 友紀 (なかしまともき)	運動器産生エグザカインの同定と全身性疾患の治療・予防戦略の確立	5,400,000円
40	山形県	山形大学理学部 教授 並河 英紀 (なびかひでき)	自然界の等比級数的空間構造形成の規範モデルの構築	4,000,000円
41	岐阜県	岐阜大学大学院医学系研究科 教授 任 書晃 (にんふみあき)	電気的ハーモニックグルーピングに基づくピタゴラス音律の蝸牛起源説の確立	5,000,000円
42	東京都	早稲田大学理工学術院 教授 野田 優 (のだすぐる)	混合廃棄リチウムイオン電池の直接リサイクル技術の開発	6,000,000円
43	東京都	東京大学医学部附属病院 助教 野村 昌志 (のむらまさし)	Gliomatosis cerebri様悪性神経膠腫のシングル核解析による浸潤メカニズムの解明	7,500,000円
44	福岡県	九州大学先端物質化学研究所 教授 福原 学 (ふくはらがく)	音響波イメージングを志向した感圧分子フラワーの創製	6,750,000円
45	神奈川県	横浜国立大学大学院工学研究院 准教授 瀧脇 大海 (ふちわきおほみ)	多軸精密作業を学習し自動化する超軽量ロボットファクトリーの創出	8,000,000円
46	兵庫県	理化学研究所生命機能科学研究センター チームディレクター 古澤 力 (ふるさわちから)	大規模言語モデルを用いた原核生物の表現型一遺伝子型対応の解析	6,700,000円
47	東京都	慶應義塾大学医学部 教授 牧野 浩史 (まきのひろし)	マウス社会の文化創発における神経基盤解明	9,500,000円
48	奈良県	近畿大学農学部 教授 増田 誠司 (ますだせいじ)	mRNAの発現を最適化する核外輸送ネットワーク作動原理の解明	7,000,000円
49	愛知県	産業技術総合研究所材料・化学領域 上級主任研究員 増田 佳丈 (ますだよしただけ)	自然に学ぶ低環境負荷プロセスによる金属酸化物半導体ナノ材料の創製	4,500,000円
50	福岡県	九州大学大学院理学研究院 教授 松島 綾美 (まつしまあやみ)	核内受容体の転写制御による新規な痛み治療メカニズム	7,000,000円
51	東京都	東京大学大学院理学系研究科 准教授 道村 唯太 (みちむらゆうた)	超伝導単一光子検出器を用いたアキシオンダークマター探索の高感度化	15,000,000円

番号	所在地	名 称	使 途	金 額
52	熊本県	熊本大学国際先端医学研究機構 特別招聘教授 み はら だ けんいち 三原田 賢一	非哺乳類赤血球の成熟から紐解く哺乳類赤血球脱核誘導機構の解明	7,500,000円
53	千葉県	千葉大学大学院薬学研究院 教授 やまつぐ けんぞう 山次 健三	タンパク質の自在標識化を可能にするセリン4核クラスタータグと化学触媒	6,000,000円
54	香川県	香川大学創造工学部 教授 よし だ ひでのり 吉田 秀典	廃棄物の減容とCO ₂ の削減を目途とした廃棄物の再資源化と再資源化材料の付加価値化	4,500,000円
55	宮城県	東北大学金属材料研究所 教授 わたなべ ま さし 渡辺 万三志	ドーパント選定によるねじれ粒界を有する双結晶スピネル材の粒界強化メカニズムの解明	8,000,000円
合 計			55件	376,000,000円

(所属先・職名については2025年9月11日現在)

第56回（2025年度）三菱財団自然科学研究助成先一覧 【若手助成】

番号	所在地	名 称	使 途	金 額
1	大阪府	大阪大学微生物病研究所 助教 あべ こうた 阿部 耕太	なぜメスはオスより長生きか？ 性特異的な全身老化統御システムの 解明	4,000,000円
2	東京都	国立精神・神経医療研究センター神経 研究所 室長 あんどう 安藤 めぐみ	グリア細胞の局所カスパーゼ 活性化によるシナプス可塑性 制御メカニズムの解明	4,000,000円
3	福岡県	九州大学高等研究院 准教授 うしまる り いちろう 牛丸 理一郎	炭素-炭素結合形成を触媒する 新規コバルト依存性酵素の触媒 機構解析	4,000,000円
4	東京都	東京都立大学理学部 准教授 おかむら ゆう 岡村 悠	集団ロングリードゲノム解析で 探る植食性昆虫の害虫化ポテン シャル	4,000,000円
5	奈良県	奈良女子大学研究院生活環境科学系 専任講師 おぐり やすお 小栗 靖生	ページュ脂肪細胞の新規調節機 構の解明	4,000,000円
6	神奈川県	東京科学大学生命理工学院 特任准教授 おさかだ たくや 小坂田 拓哉	成長過程依存的に確立される 社会性を制御する回路基盤の同定	4,000,000円
7	東京都	東京大学大学院理学系研究科 助教 かり た ゆうや 莉田 裕也	バイオフィルムによる土壌多孔質 の閉塞とその生態系への影響	4,000,000円
8	東京都	国立がん研究センター研究所 腫瘍免疫研究分野 研究員 くまがい しょうご 熊谷 尚悟	神経炎症局所における制御性 T細胞の分化系譜の解明と新規 細胞療法への展開	4,000,000円
9	京都府	京都大学大学院医学研究科 助教 さいき りゅうのすけ 佐伯 龍之介	クローン性造血による疾患発症 メカニズムとその多様性の解明	4,000,000円
10	岡山県	岡山大学学術研究院環境生命自然科学 学域（農） 特任助教 さか た ななみ 坂田 七海	植物病原細菌の病原性因子を 標的とするantivirulence戦略 の開発	4,000,000円
11	宮城県	東北大学大学院医学系研究科 助教 しば た しゅん 柴田 峻	ヒト胚着床アセンブロイドモデル を基軸とした胎児免疫寛容の 理解	4,000,000円
12	東京都	慶應義塾大学医学部 准教授 し ほ や わたる 志甫谷 渉	リゾリン脂質受容体LPA1の 機能制御機構の解明と治療応用	4,000,000円
13	奈良県	奈良女子大学研究院自然科学系 准教授 しみず たかゆき 清水 隆之	超硫黄分子による葉緑体形成の 制御機構	4,000,000円
14	東京都	東京農工大学大学院工学研究院 助教 しみず としき 清水 俊樹	液中環境下でのコイル・グロ ビュール転位の動的挙動解明： 透過電子顕微鏡によるその場 観察技術の革新的応用	4,000,000円
15	青森県	弘前大学大学院理工学研究科 助教 せき たかかず 関 貴一	多色界面振動分光法による、 階層の実空間分子構造解析法の 開拓	4,000,000円
16	大阪府	大阪大学大学院理学研究科 准教授 たかはし りん たろう 高橋 倫太郎	自己組織化の精密制御に基づく 強靱な電気伝導性ゲルの創製	4,000,000円

番号	所在地	名 称	使 途	金 額
17	東京都	早稲田大学教育・総合科学学術院 准教授 田口 知樹	ラマン分光法を用いた石英単結晶の残留応力挙動の評価	4,000,000円
18	茨城県	産業技術総合研究所計量標準総合センター 研究員 立川 冴子	テラヘルツ分光を用いた、障害物越しの非接触温度測定技術の開発	4,000,000円
19	東京都	東京大学大学院工学系研究科 助教 谷田 桜子	交通網の人流を記述する数理フレームワークの構築	4,000,000円
20	大阪府	大阪医科薬科大学医学部 講師 辻野 拓也	膀胱がん治療QOL向上を目指した革新的治療戦略開発	4,000,000円
21	東京都	順天堂大学医学部 准教授 土屋 光	タンパク質分解系を規定するユビキチン液滴の解析	4,000,000円
22	山形県	山形大学大学院有機材料システム研究科 准教授 土肥 侑也	有機化ナノクレイを鋳型としたシート状高分子の高効率合成と精密特性評価	4,000,000円
23	千葉県	東京大学大学院新領域創成科学研究科 特任准教授 西嶋 傑	超大規模メタゲノムデータに基づくマイクロバイオームの疾患横断解析と汎用診断モデルの開発	4,000,000円
24	京都府	京都大学大学院工学研究科 助教 別府 航早	磁性アクティブ乱流の普遍統計則と制御原理の解明	4,000,000円
25	東京都	上智大学理工学部 准教授 三澤 智世	Ru(IV)-Ru(IV)二核錯体を用いた有機化合物のC-H酸化反応	4,000,000円
26	東京都	慶應義塾大学医学部 助教 森田 覚	大腸癌肝転移における線維化誘導性免疫変容と転移再発メカニズムに関する研究	4,000,000円
27	群馬県	群馬大学生体調節研究所 助教 吉成 祐人	新奇ホルモン様分子の受容体探索と機能的保存性の精査	4,000,000円
28	千葉県	東京大学大学院 新領域創成科学研究科 准教授 吉見 龍太郎	分子線エピタキシー法による薄膜試料合成を基軸としたトポロジカル量子物性開拓	4,000,000円
29	京都府	京都大学大学院医学研究科 特定研究員 米倉 慧	腸内微生物ダークマターであるウイルスに注目した腫瘍制御の新パラダイム	4,000,000円
合 計 29件				116,000,000円

(所属先・職名については2025年9月11日現在)

自然科学研究助成概要(一般)

自然科学

1

光操作技術を応用した次世代型ネフロン前駆細胞による高度腎障害を伴うCKDに対する新規治療法の開発

京都大学 iPS 細胞研究所

特定講師 荒岡 利和

慢性腎臓病（CKD）は、本邦で5人に1人が罹患しているが、有効な治療薬は少なく患者数は増加し続けている。早期CKDに対してヒトiPS細胞由来ネフロン前駆細胞（iNPC）の細胞移植が有効であるが、進行期CKDでは効果が減弱する。そのため、分泌型Klothoの発現を付与し機能強化した次世代型iNPCを用いた進行期CKDに対する新規細胞療法を創出する。また臨床応用には目的外細胞の完全除去が不可欠だが、治療に必要な10億個以上のiNPCから目的外細胞を短時間かつ安価に取り除く方法は未整備である。光誘導システムは安価に大量の細胞を一括して処理可能であるため、本システムを用いた革新的除去技術を開発する。

自然科学

2

HIV-1感染者における骨髄由来抑制細胞MDSCと免疫応答の関係

熊本大学ヒトレトロウイルス学共同研究センター

教授 池田 輝政

本研究は、抗レトロウイルス療法（ART）下でも持続するHIV-1感染者の免疫調節異常に着目し、骨髄由来抑制細胞（MDSC）の増加機構と免疫応答への影響を解明することを目的とする。MDSCはT細胞応答を抑制し、慢性炎症や非AIDS関連腫瘍進行に寄与する可能性がある。本研究では、HIV-1感染者におけるscRNA-seqを用いた遺伝子発現プロファイルやin vitro実験による誘導因子の解明を行い、HIV-1感染におけるMDSCの役割を明らかにする。

自然科学

3

検知時間の超短時間化を実現する真北測定MEMSジャイロ

早稲田大学大学院情報生産システム研究科

教授 池橋 民雄

地球の自転を計測して方位を抽出するMEMS真北測定ジャイロは自動運転等の位置検出で威力を発揮するが、現状では測定に長い時間がかかるという課題がある。本研究では真北測定向けに特化したMEMSジャイロを開発し、この課題を克服する。本MEMSジャイロの特徴は、コリオリ振動ジャイロにおいてセンス振幅が一定となるような制御を行う点にある。この実現のため、ジャイロを構成する二つの共振器の共振周波数の差を制御する。これにより微小な角速度を高い感度で検出することが可能となる。またジャイロのマス重量化し、信号雑音比を向上させる。これらの技術により、測定時間を現状の2分程度から数秒へと短縮することを目指す。

自然科学

4

上皮細胞の集団移動による形態形成の機構

兵庫県立大学大学院理学研究科

教授 稲木 美紀子

上皮細胞は、体表や臓器内腔を覆う層状の構造をとる分化した細胞集団で、通常は恒常性を維持し移動性をもたない。しかしながら、発生過程では、適切な場所およびタイミングで移動能を獲得し、必要とされる領域まで移動する。この移動性の制御が破綻するとがんの転移等の病因となりうるため、移動性の仕組みを知ることは、科学的な視点からのみならず、医学的にも重要である。本研究では、ショウジョウバエ卵巣上皮からクラスターを形成して上皮層を離脱し、細胞間を移動するボーダー細胞を用いて、上皮細胞のクラスター移動に必要な十分因子を明らかにする。同定した因子の機能阻害によりクラスター移動の優位性についても検証する。

自然科学

5

核酸高次構造選択的なペプチドの創出とがん遺伝子制御

京都大学化学研究所

准教授 今西 未来

グアニン四重鎖 (G4)、i-motif と呼ばれる特殊な核酸の高次構造は遺伝子発現調節に関わり、中でも、がん遺伝子の発現調節に関わることが示唆されている。したがって、がん関連遺伝子中に見られる個々の高次構造に選択的に作用する分子は、その機能の解明や遺伝子発現の制御に有効であると期待される。本研究では、個々の核酸高次構造を精密に認識するペプチドの創出原理を明らかにし、核酸高次構造依存的な遺伝子発現制御法を構築することを目的とする。特に、がん関連遺伝子に見られる高次構造選択的なペプチドを創出し、核酸の高次構造の特異的認識に基づく遺伝子の人為的な発現制御によるがん細胞増殖抑制を目指す。

自然科学

6

TDP-43病理に起因するALS分子病態を解明する革新的マルチオミクスアプローチ

名古屋大学環境医学研究所

特任講師 遠藤 史人

筋萎縮性側索硬化症 (ALS) は運動ニューロンが選択的に変性し、進行性の全身の筋力低下・麻痺をきたし数年で死に至る神経変性疾患で、根治法はいまだ確立されていない。本研究では、ALSの中核病理であるTDP-43異常を忠実に再現するヒト人工多能性幹細胞 (iPSC) 由来運動ニューロンモデルを樹立し、RNAシーケンスと質量分析によるマルチオミクス解析により、オルガネラ (核・ミトコンドリアなど) およびシナプスにおける分子異常を包括的に同定する。さらに、TDP-43モデルマウスおよびALS剖検組織の多層オミクスデータと統合解析を行い、有望分子の妥当性を検証して治療標的シーズの創出を目指す。

自然科学

7

ナノ光共振器の光学浮上が拓く固体材料のレーザー冷却

北海道大学電子科学研究所

准教授 太田 竜一

物質の「熱」は電子伝導や電子光変換を乱す雑音となるため、高速な信号処理や精密な計測を行うには物質を冷却する必要がある。光の吸収放射サイクルを用いるレーザー冷却は物質を非接触かつ遠隔に冷却する手法であるが、その主な対象は原子気体であり、質量と熱容量の大きな固体材料に対して用いることは困難であった。本研究ではナノ光共振器による吸収放射サイクルの高速化と光学浮上による真空断熱の融合により、マクロな固体材料に対するレーザー冷却を実現する。非接触かつ遠隔な物体冷却技術確立することで、従来技術では困難であった真空中や極限環境下での熱制御を目指す。

自然科学

8

原子層量子ドットセンサの開発と応用

東北大学電気通信研究所

准教授 大塚 朋廣

電子を微小領域に閉じ込めた量子ドットは、その電気伝導特性が周囲環境に応じて変化するため、高感度なセンサとして活用できる。本研究では、特に原子層物質を用いてこの量子ドットセンサの研究を行う。原子層物質は剥離、転写等の技術により様々な測定対象に適合できる可能性があり、この物質中に量子ドットセンサを作ることができれば幅広い対象に活用できる可能性がある。本研究では原子層物質を量子ドットセンサの基盤材料として導入し、異種材料との組み合わせ等に向けた新しい量子ドットセンサの研究を進める。さらに、転写・積層技術や微細構造作製プロセスの最適化により安定した動作や、多様な条件下での活用検討を目指す。

自然科学研究助成概要(一般)

自然科学

9

ミリ波を用いる新たな量子機械の実現

産業技術総合研究所計量標準総合センター

主任研究員 岡崎 雄馬

マイクロ波帯の共振器オプトメカニクスを利用したサイドバンド冷却によって、振動の量子力学的な最小単位である単一フォノンを計測・制御する「量子機械」が実現された。しかしマイクロ波は温度換算で0.3 K程度であり、熱励起を抑えるために系全体を1億円以上と高額な希釈冷凍機によって0.1 K以下の極低温に冷却する必要があった。この敷居の高さを緩和することを目指し、本研究では、マイクロ波よりも1桁以上エネルギーが高いミリ波帯の共振器を用いた量子機械を開発する。ミリ波のエネルギーが高いことから従来のように希釈冷凍機温度まで冷却せずとも、振動の量子極限の制御・計測ができるようになることが期待される。

自然科学

10

精子形成に伴う生理学および病理学的DNA断片化部位の同定

東京大学定量生命科学研究所

教授 岡田 由紀

男性側に起因する不妊の多くは造精機能障害によるものだが、その半数は原因不明である。本研究では、顕微受精が繰り返し不成功に終わる症例で高頻度に認められる精子DNA断片化に着目し、精子形成異常モデルマウスやヒト精子検体を用いてその発生位置や時期を特定するとともに、クロマチン構造との関係を明らかにしようとするものである。得られた知見は、未解明の点が多い精子DNAの保護機構の分子基盤解明のみならず、AIを活用した診断支援など精子の品質を評価する新たな臨床検査の開発に繋げる。

自然科学

11

高度免疫逃避性ニッチェから考える、胃上皮幹細胞ヒエラルキーの解明

東京大学大学院医学系研究科

助教 垣内 美和子

胃は、食道から直腸へ続く消化管の中でも、特に複雑な細胞組成からなり、臓器を維持する幹細胞の同定や分化過程の詳細については、未解明な点が多い。そこで本研究では、独自に見出した幹細胞マーカーLEFTY1陽性細胞が存在する微小環境「ニッチェ」に着目し、その免疫学的な特性を軸に、LEFTY1陽性細胞の機能解析と、既知の幹細胞マーカー陽性細胞との関係性や分化過程を明らかにする。胃の幹細胞は、日本人に多い胃がんの起源細胞としても重要であることから、本研究によって、生体の恒常性維持についての理解が深まるとともにがんの予防にも繋がる知見が得られることが期待される。

自然科学

12

魚の正中ヒレから紐解く脊椎動物の初期進化の研究

埼玉大学大学院理工学研究科

准教授 川村 哲規

カンブリア紀に出現した原始脊椎動物は、その後の進化の過程で四肢の起源となる対ヒレを獲得した。対ヒレの起源については、既存の正中ヒレを転用して誕生したとする仮説がある。本研究は、正中ヒレ形成機構の中心に位置するHox遺伝子群に注目し、その分子基盤を解明することで、脊椎動物が対ヒレを獲得した分子進化の仕組みに迫り、さらに四肢動物が正中ヒレを消失した進化的背景を探る。これにより、脊椎動物初期進化の理解に新たな視点を提供することを目的とする。

自然科学

13

制御された結晶欠陥に基づく 原子輸送エンジニアリングと 金属ナノワイヤ大面積化への展開

九州大学大学院工学研究院

准教授 木村 康裕

純金属ナノワイヤは、その特異な物理的特性によって既存デバイスの高性能化に貢献するのみならず、次世代光学デバイス等への応用が期待されている。しかし、成長原理が不明瞭でデバイス開発に資する高密度化が困難であった。最近申請者は、金属ナノワイヤが成長する薄膜内において粒径勾配を持たせると、ナノワイヤ成長に不可欠な原子輸送が大きく促進され、これまでより格段に高密度な金属ナノワイヤ合成が可能となることを示した。しかし、その合成領域は数百ミクロンの領域に限られている。本研究では、金属ナノワイヤ合成領域を数十センチの大面積とする新合成技術の開発を目指す。

自然科学

14

次世代赤色蛍光バイオセンサー による生細胞イメージングの 革新

東京大学大学院理学系研究科

教授 Campbell Robert

生体内の標的物質を感知して光を放つ蛍光バイオセンサーは、生物学において重要な研究ツールである。これまで、緑色蛍光タンパク質を基にしたバイオセンサーが多く作られてきたが、より長波長の赤色領域に蛍光を持つセンサーは、多くの利点が期待されるにも拘わらず、既存の赤色蛍光タンパク質が有するいくつかの難点のために開発が進んでいなかった。本研究で我々は、これらの課題を克服した新たな赤色蛍光タンパク質に着目することで、次世代の赤色蛍光バイオセンサーを開発する。具体的には、カルシウムイオンおよび低分子代謝物に対する複数の高機能バイオセンサーを創成し、マウス等での生体イメージングに応用することを目指す。

自然科学

15

全身性エリテマトーデスを 駆動する遺伝素因の解明

産業医科大学医学部

准教授 久保 智史

自己免疫疾患は遺伝要因と環境要因の双方が組み合わさって発症する。遺伝要因は生涯変化することがないため、その疾患における因果関係が明確な根本的リスクである。全身性エリテマトーデス（SLE）は、若年女性に発症し全身の臓器に障害をきたす自己免疫疾患で、仕事のみならず結婚や出産などの重要なライフイベントに悪影響をもたらす。本研究ではこれまで重要視されることがなかったSLE患者のレアバリエーション（非同義置換変異）に着目し、SLEを引き起こす根本的な原因、強い遺伝的要因を探索する。さらに、見出した遺伝的要因に対して機能検証を加えることにより、既存の遺伝的素因の探索から一線を画す手法を確立する。

自然科学

16

超高速2次元分光による凝縮相 複雑分子系の反応座標の可視化

大阪大学大学院基礎工学研究科

教授 倉持 光

光反応を含む化学反応は従来、一次元の反応座標で記述されてきた。しかし、多原子分子の反応は $3N-6$ の自由度をもつ複雑なポテンシャルエネルギー曲面上で進行するため、その全容解明は極めて困難である。本研究では、独自に開発したフェムト秒時間分解ラマン分光法に基づき、核運動の時間スケールで反応進行過程を時々刻々と追跡し、反応座標を直接可視化する「超高速二次元ラマン分光法」を開発する。本手法により、従来は理論計算でしか“観る”ことができなかった凝縮相の複雑分子系における反応座標を実験的に明らかにするとともに、反応座標の選択的励振による反応速度・収率の制御に資する基盤知見を獲得することを目指す。

自然科学研究助成概要(一般)

自然科学

17

短周期投げ上げ法による重力波
検出器の地面振動雑音除去実験

名古屋大学理学研究科

准教授 苔山 圭以子

重力波は2015年に大型レーザー干渉計型地上検出器で初検出され、ブラックホール連星合体や中性子星連星合体に関する知見が急速に蓄積された。しかし地上検出器は地面振動や懸架系雑音の影響で10Hz以下の感度が大きく低下する。このため巨大ブラックホール連星や背景重力波の検出には複数衛星による宇宙干渉計が不可欠だが、莫大なコストを要する。本研究は、レーザー干渉計の鏡を短周期で投げ上げ、自由落下中に観測するという革新的手法で地面振動を除去し、地上での低周波重力波検出感度を飛躍的に高めることを目指す。

自然科学

18

加齢に伴うクローン性造血から
がんへの進展メカニズムの解明

東京大学医科学研究所

准教授 昆 彩奈

白血病などの造血器腫瘍は、ドライバー変異が造血幹細胞に生じ、しばしば加齢に伴うクローン性造血を経て発症することが知られている。興味深いことに、クローン性造血と関連する他の遺伝子変異と比べると、スプライシング因子やDDX41変異は高齢者で選択されやすい。これは加齢に伴う骨髓微小環境の変化により、年齢により異なるクローン選択圧が生じている可能性を示唆する。本研究では、遺伝子改変マウスを用い、造血細胞に加えて骨髓ストローマ分画も対象とした単一細胞解析を行い、加齢による環境要因ががん細胞のクローン選択と腫瘍化に果たす分子機構を解明することを目指す。

自然科学

19

OMEGA随伴システムの解析と
ツール開発

理化学研究所開拓研究所

理研 ECL 研究チームリーダー 齋藤 諒

ゲノム編集で一躍有名になったCRISPR-Cas9・Cas12であるが、近年その進化的起源が動く遺伝子トランスポゾンにコードされるRNA誘導性DNA切断酵素にあることが明らかになってきた。OMEGAと名付けられたこれら酵素はそのDNA切断酵素活性を用いてトランスポゾンの複製を助けることが明らかとなっている。一方で、進化の過程でDNA切断活性を失い、他のタンパク質と複合体を形成しRNA誘導性を付与するOMEGAも発見されているが、それらの機能は未知である。本研究では、これら「OMEGA随伴システム」より新たなRNA誘導性機能を発掘し、分子ツールとしての応用可能性を提供することを目的とする。

自然科学

20

戦略的な追跡行動を司る
多次元空間認知の神経回路動態

生理学研究所システム脳科学研究領域

教授 佐々木 亮

ヒトを含む動物が自身の動きを正しく認識し、同時に動く物体を正確に判断することは重要な機能の一つである。特に、視覚情報などの外部表現に自他の身体技能を考慮した戦略性などの内部表現をいかに統合して、空間への追跡軌跡を決定するかの脳機構は未解明である。本研究では、独自開発したVR実験系を用い、ヒトに近い脳回路基盤を有するマカクサルスの追跡行動時の戦略性を多次元かつ時系列に定量化し、同時に脳機能をマルチスケールに記録し、神経計算論的解析からサルが想起した戦略的な追跡軌跡をリアルタイムに推定する。動物の最適戦略を学習・拡張する人工脳構築やニューロフィードバックを用いた機能回復など、医工産学応用に繋げる。

自然科学

21

電子線励起発光における 光子統計性を活用した半導体・ 光デバイスの解析

東京科学大学物質理工学院

教授 三宮 工

電子顕微鏡法は、原子や生体構造を可視化することが可能であり、材料解析から医学・創薬まで広く貢献し、その発展は科学基盤を支えている。また、真空中の加速電子を自在に操ることで、基礎物理研究にも大きな役割を果たしてきた。我々は、電子線励起発光(CL)に注目し、ナノフォトニック材料の光場観察や半導体評価、キラル特性やトポロジカルモードの可視化、単一加速電子をパルス利用したCL光子相関計測などを実現してきた。本研究では、単一電子励起による光子統計を活用した新たなCL法を、半導体や次世代発光材料の応用解析に展開し、発光を利用した革新的材料分析を目指す。

自然科学

22

グアニン四重鎖を標的とした シヌクレイノパチーの病態解明 と創薬研究

熊本大学発生病学研究所

教授 塩田 倫史

シヌクレイノパチーは、脳内に α シヌクレイン(α Syn)が凝集する神経変性疾患であるが、新たなバイオマーカーおよび根治療薬が求められている。これまで、 α Synの凝集機構は未解明であった。一方、研究代表者はRNA高次構造である「グアニン四重鎖(G-quadruplex; G4)」が α Synを凝集させることを発見した。本研究では、シヌクレイノパチーの原因となる(1)G4- α Syn共凝集体の複合体分子構造の解明、(2)細胞間伝播機構の解明およびG4集積抑制薬の評価、(3)G4を標的としたバイオマーカーの開発、を目的とする。G4を標的とした創薬研究はシヌクレイノパチーの創薬開発の推進に繋がる。

自然科学

23

微生物由来代謝経路を利用した 免疫制御機構の解明と新規ガン 免疫療法の開発

九州大学医学部

准教授 柴田 健輔

これまで申請者は、微生物が産生するビタミンB2合成経路由来の代謝産物を認識するT細胞サブセットであるMucosal Associated Invariant T (MAIT)細胞の機能制御機構について、研究を行ってきた。MAIT細胞は、抗原認識に伴う活性化後、抗ガン効果、感染防御、自己免疫疾患の病態制御に関わるため、その機能制御機構が注目されている。その研究の過程で申請者は、微生物のビタミンB2合成経路に関わる遺伝子を用いて、MAIT細胞を特異的に活性化できる新規技術を樹立した。そこで本研究では、その技術を用いて、免疫制御メカニズムの解明と、ガン免疫療法への応用を目指す。

自然科学

24

植物の乾燥ストレス受容を 構造から読み解く

名古屋大学トランスフォーマティブ生命分子研究所 (ITbM)

特任講師 下遠野 明恵

本研究では、我々が発見したペプチドと受容体で構成される機能分子に着目し、その分子機能を詳しく解析することで、植物がもつ環境ストレスに対する生存戦略に迫りたい。本研究は、植物が環境情報を細胞表面で認識する仕組みを分子間相互作用から解明する初の試みであり、植物に存在する受容体がどのように環境シグナルを見分け、特異的なシグナル伝達経路を活性化しているのかを理解する上で重要な知見をもたらすものと期待される。また、本研究対象のペプチドとその受容体は陸上植物に広く保存されているので、植物の環境応答の進化的変遷を理解する上でも重要なものと考えている。得られた知見から社会的付加価値の高い技術開発に繋がることを期待できる。

自然科学研究助成概要(一般)

自然科学

25

動的かつ遺伝子網羅的な
一細胞計測への挑戦

理化学研究所生命機能科学研究センター

チームディレクター 城口 克之

個体は一つの受精卵から創生し、がんは一つの細胞から発生する場合があるなど、一つの細胞の状態やその時間変化を捉えることは、生命現象の理解を深め、その制御は治療への発展性をもつ。細胞の状態変化を捉えるには、細胞内の分子の量を網羅的に経時計測することが一つの理想である。しかしながら、例えば動態計測が可能な光学顕微鏡では分子網羅的な情報を得ることは難しく、遺伝子網羅的な計測が可能なRNA-seq法は動態計測が簡単ではない。本研究では、細胞を対象に分子網羅的かつ経時計測が可能な計測法を開発する。本新規技術を用いてがんの転移に関わる上皮間葉転換の分子メカニズムを明らかにし、病気の進行や予防に資する技術として将来的に社会に貢献することを目指す。

自然科学

26

パーキンソン病予防に向けた
EGCG酸化物の線維化抑制機構
の解明

京都大学大学院農学研究科

教授 菅瀬 謙治

パーキンソン病は加齢とともに罹患率が上昇する神経変性疾患であり、その主要因とされる α シヌクレインの線維化抑制が予防戦略上の重要課題である。本研究では、緑茶成分であるエピガロカテキンガレート(EGCG)の酸化物が線維化抑制の本体であることを見出した知見に基づき、抑制成分の同定と作用機構の解明を行う。申請者が独自に開発したRheo-NMRを駆使し、流れの中で進行する α シヌクレインの線維化過程を原子レベルで解析し、抑制に関与する部位と分子機構を明らかにする。これにより、パーキンソン病予防に資する新たな科学的基盤を提供し、緑茶摂取の有効性に科学的根拠を与えて、生活習慣や食品指針への応用に発展させる。

自然科学

27

扁平上皮がんの細胞運命決定を
司るNRF2新規転写活性化機能
の分子基盤解明

東北大学東北メディカル・メガバンク機構

准教授 鈴木 隆史

KEAP1-NRF2経路の制御破綻は肺がんや食道がんをはじめ多くのがんの発生や悪性化に深く関与することが大規模ゲノム研究で明らかになっている。私たちは近年、この経路が抗酸化酵素や異物代謝酵素の発現制御にとどまらず、扁平上皮細胞などの細胞運命決定にも関与することを見出した。本研究では、この新しい知見を基盤にNRF2による独自の転写活性化機構を解明し、組織別がん発生の分子基盤の理解を深めるとともに、NRF2活性化がんに対する新規治療法の開発を目指す。

自然科学

28

なぜ意識レベルが樹状突起の
特性を変えるのか？
細胞内メカニズムの解明

大阪大学大学院生命機能研究科

教授 鈴木 基高

脳の重要な未解決問題の一つに、意識の神経基盤がある。私という固有の存在は脳のどこにあり、どんなメカニズムによって生み出されているのか？この重要な問題に対し、我々は2020年に「樹状突起と呼ばれる細胞組織の特性が全身麻酔によって顕著に変化する」という非常に興味深い発見を報告した。本研究は、申請者の2020年の発見から導き出された興味深い仮説を実験的に検証する初の試みであり、光遺伝学・広域カルシウムイメージング法など最新の技術と独自に開発した微小光学素子およびin vitroとin vivoという二つの異なる実験系を組み合わせた独創的なアプローチにより、意識と細胞内メカニズムの関係を明らかにすることを目指す。

自然科学

29

重力波星震学を用いた 超新星重力波の理解と 高密度物質の解明

高知大学教育研究部

准教授 祖谷 元

重力波が天文学における新しい観測手段となった今日、いざ重力波が観測された際に現象の背後に潜む物理を如何にうまく抽出するかということが重要です。コンパクト連星系の合体時からの重力波に次ぐ波源として重力崩壊型超新星爆発が期待されています。ここ数年、超新星爆発後に形成される中心天体(原始中性子星)における星震学を通して超新星重力波の理解が進んできております。本研究は、超新星爆発重力波におけるモデルパラメータを星震学的立場から系統的に調べ、重力波振動数におけるこれらの依存性を明らかにするものです。超新星重力波というシグナルを通して、超新星モデルだけでなく超高密度領域の物質の解明を目指します。

自然科学

30

転写因子を精密制御する 人工植物ホルモンの開発

京都大学大学院農学研究科

教授 高岡 洋輔

植物ホルモンは、たった10種類足らずで植物のほぼ全ての生理応答を担う重要な生理活性物質である。その実態は、一つの分子が多数の転写因子の活性を制御して多様な応答を制御していることが明らかとなっているが、個々の遺伝子の転写がどのように調節されているかについては未解明であり、人工制御も難しい。一方で、これら多くの転写因子が共通の転写メディエーター MED25との相互作用を介して活性化される興味深い現象も見出されつつある。本研究では、特定の転写因子とMED25の間の相互作用を誘導する「人工植物ホルモン」を開発し、植物ホルモンの多様な応答の中から任意の生理応答のみを精密制御する分子技術を開拓する。

自然科学

31

AR / VR応用に向けた ウェアラブル・エッジAI型 高精度入力システムの開発

北海道大学大学院情報科学研究院

教授 竹井 邦晴

メタバースの世界でさまざまな体験をすることができつつあるが、その仮想空間内での動きの空間分解能には限界があり、実生活のモノを使った体験を仮想空間内のみで達成することは難しい。そこで我々がこれまで培ってきたマルチモーダルセンサシートとその多データの相関を瞬時解析するエッジAIをVR/ARと融合することで、自然で直感的な文字入力を高い空間分解能で仮想空間上に反映させるシステムを開発する。本技術により人をモノから解放し、仮想空間内で様々なことができる世界を提供する。特に空間又は手の甲上での指の動きを詳細に捉えることで、物理的なキーボードがなくてもVR/AR上での高精度な文字入力を実現させる。

自然科学

32

Sn系ペロブスカイト太陽電池の 安定性向上に向けた 有機アンモニウム材料の検討

上智大学理工学部

教授 竹岡 裕子

カーボンニュートラルに向け、ペロブスカイト太陽電池が次世代太陽電池として注目を集めている。この太陽電池は現在主流のシリコン系太陽電池に匹敵する高い光電変換効率を実現しているが、本格普及のためにはPbの毒性による低安全性と低安定性の克服が必要と考えられる。Pbの代わりにSnを用いることが一つの道であるが、一方で、Sn系ペロブスカイトは酸化されやすく安定性が低いことが問題点となっている。本研究では、酸素バリア性が高く、活性酸素クエンチ効果のある有機アンモニウムを設計合成し、これらをペロブスカイト化合物に組み込むことで、非鉛、かつ環境耐性の高いペロブスカイト太陽電池の作製指針を得ることを目指す。

自然科学研究助成概要(一般)

自然科学

33

細胞機能を可視化する次世代プローブの開発

公益財団法人東京都医学総合研究所
臨床医科学研究分野がん免疫プロジェクト

プロジェクトリーダー 丹野 秀崇

これまでに質量分析器、共焦点顕微鏡、ウェスタンブロットリングなど細胞内タンパク質解析技術は発展してきたが、多くは破壊的で、生細胞のままの網羅的・時空間的解析は困難である。遺伝子編集によって目的タンパク質に蛍光タンパク質を融合すれば、生細胞のままタンパク質の解析が可能となるが、プライマリー細胞をそのままの状態で解析したい場合には適さない。もし生細胞条件でタンパク質を可視化できれば、基礎研究から創薬まで大きな波及効果が見込まれる。そこで、本研究では、独自の基盤技術によって、非破壊的に細胞機能を可視化する次世代プローブを体系的に開発する。これにより従来法では得られなかった知見を創出する。

自然科学

34

ベタインによるミトコンドリアを介した炎症抑制機構の解明

京都大学大学院医学研究科

特定教授 茶本 健司

これまでにミトコンドリア代謝は、免疫疾患・がん免疫分野における基本的制御機構の一つであることを報告してきた。本研究は炎症応答と代謝制御の新たな接点を明らかにすることを目的とする。ミトコンドリア代謝産物ベタインが特定のミトコンドリアタンパク質に結合し、形態変化を介して炎症シグナルを抑制するという独自の知見を出発点とし、その分子機構を解明する。複数の炎症モデルを用い、メタボローム解析と分子生物学的手法を統合的に活用することで、代謝と炎症をつなぐ未解明の仕組みに迫る。本研究は基礎生命科学に資するのみならず、炎症関連疾患やがん治療、自己免疫研究への応用的展開も期待される。

自然科学

35

夢を形作る記憶情報の同定

北海道大学大学院理学研究院

講師 常松 友美

本研究は、レム睡眠中に夢がどのような記憶情報をもとに形作られているか、その神経基盤の解明を目的としている。夢を形作る神経メカニズムとしてPonto-geniculo-occipital (PGO)波が示唆されている。PGO波による辺縁系や大脳皮質の活性化が記憶の断片を統合し、夢の奇異な内容を形成すると考えられているが、その神経メカニズムは依然として不明である。近年我々はマウスを用いて、PGO波が一部の海馬神経を活性化することを見出した。そこで、それらの海馬神経がどのような種類の記憶情報を保持しているのかを解明する。夢は負の感情を伴うことが多く、また普段思い出さないような人が現れる特徴を持つため、感情記憶や想起できない記憶に着目し研究を推進する。

自然科学

36

免疫デフォルトモードネットワークが規定する疾患リスクのメカニズム解明

日本医科大学研究部

教授 遠田 悦子

生体には、病原体成分や炎症性サイトカインといった疾患リスクとなる強い刺激だけでなく、微量の生理活性物質などの弱い刺激も恒常的に存在する。申請者は、ケモカイン受容体会合分子FROUNTを欠損したマクロファージでは、弱い刺激に対しても「微小活性化状態」となり、ネガティブフィードバック機構が亢進して強い刺激に対する過剰な応答を抑制する「恒常性維持型」の性質が誘導されることを見出した。本研究では、FROUNTがマクロファージの微小活性化を制御する分子機序を解明し、マクロファージの恒常性維持機能を増強することで、多くの慢性疾患に関与する炎症経路を安全に制御できる新たな免疫正常化戦略の創出を目指す。

自然科学

37

ミトコンドリア競合の メカニズム解明

岡山大学学術研究院医歯薬学域

教授 富樫 庸介

免疫チェックポイント阻害薬は腫瘍浸潤リンパ球（TIL）を活性化し効果を発揮しているが、長期奏効にはT細胞のミトコンドリアでの酸化的リン酸化が重要である。申請者はヒト検体から、腫瘍細胞の異常ミトコンドリアがTILに伝播し、元来有していたミトコンドリアと入れ替わって置換され、抗腫瘍免疫応答が抑制されることを明らかにした。この新たな「ミトコンドリア競合」について、その詳細なメカニズムや生物学的な意義を、様々な細胞や生理的・病的状態において網羅的に解析することで明らかにし、その概念を確立して新たな治療標的の同定や治療開発につなげる。

自然科学

38

NAD前駆体トリゴネリンの生体内 代謝経路の解明とサルコペニア・ バイオマーカーへの応用

富山大学学術研究部

教授 中川 崇

ニコチンアミドアデニンジヌクレオチド（NAD）は、生体に必須の補酵素であるが、老化の制御因子として近年注目を集めている。研究代表者らは、ニコチン酸のメチル化体であるトリゴネリンが老化で減少すること、新規のNAD前駆体であることを明らかにしてきた。また、その代謝には腸内細菌が関与していることが示唆されている。本研究では、NAD前駆体トリゴネリンと腸内細菌叢、腸肝循環との関わりに着目し、トリゴネリンの生体内代謝機構を明らかにする。さらには、現在有効なバイオマーカーが存在しないサルコペニアに関して、トリゴネリン代謝における代謝産物や関連する腸内細菌叢がバイオマーカーとして利用できるのかを検討する。

自然科学

39

運動器産生エグザカインの 同定と全身性疾患の治療・ 予防戦略の確立

東京科学大学歯学部

教授 中島 友紀

運動不足は高血圧、喫煙、高血糖に次ぐ死亡リスク因子であり、身体活動や運動量の低下は、骨粗鬆症などの運動器疾患、肥満・糖尿病など代謝性疾患や認知症・うつ病など精神神経疾患の発症・罹患リスクを増加させる。一方、身体活動の強化や運動習慣、力学ストレスの強化が、これら全身性疾患の改善や予防、ひいては死亡率の低下に繋がることが世界レベルで認知されている。本研究では、身体活動や運動による健康への恩恵、すなわち、“運動ベネフィット”の根底を担う生体分子の同定と機能解析から、生体恒常性の維持とその破綻に伴う様々な全身性疾患の発症メカニズムの謎を紐解き明かすことで、健康寿命の向上の分子基盤の確立を目指す。

自然科学

40

自然界の等比級数的空間構造 形成の規範モデルの構築

山形大学理学部

教授 並河 英紀

本研究は、非平衡過程で構築される自己組織化現象であるリーゼガング現象を題材に、自然界に広く見られる等比級数的空間構造の普遍的形成原理を解明し、規範モデルを構築することを目的とする。従来、リーゼガング現象の構造形成過程はpre-nucleationモデルとpost-nucleationモデルとして二者択一的に議論されてきたが、本研究では反応速度と拡散速度の比による条件分岐として統合的に理解する新しい理論枠組みを提示する。これにより、鉱物模様や生体石灰化、惑星軌道など多様なスケールに共通する秩序形成の学理的基盤を示し、等比級数的自己組織化現象の体系的理解を深化させることを目指す。

自然科学研究助成概要(一般)

自然科学

41

電氣的ハーモニックグルーピングに基づくピタゴラス音律の蝸牛起源説の確立

岐阜大学大学院医学系研究科

教授 任 書晃

本研究では、ヒトが可聴域を超える超音波を聴取する「超音波聴覚」の機構を解明した成果を基に、音楽における「オクターブ」概念の起源とされるピタゴラス音律が、内耳蝸牛に備わる生物物理学的音受容機構に依拠することを実証する。モルモットを対象とした有毛細胞電流のin vivo計測を通じて、周波数が1オクターブ離れた音が相互に干渉し抑制を引き起こす「ハーモニック2音抑制」を観測し、これまで聴覚心理学に委ねられてきた音律の生物学的基盤を、蝸牛の電気生理学の視点から明らかにする。

自然科学

42

混合廃棄リチウムイオン電池の直接リサイクル技術の開発

早稲田大学理工学術院

教授 野田 優

カーボンニュートラル達成には再生可能電力の主電源化が不可欠であり、大規模蓄電技術が欠かせない。リチウムイオン電池(LIB)への期待は大きいですが、CoやLiなどの資源制約があり、LIBの不適切な廃棄による火災も頻発している。使用済みLIBのリサイクルの確立が急務であり、劣化LIBから電池材料への直接リサイクルが注目されている。本提案では、代表者独自のカーボンナノチューブベース電極技術を用いて従来の1/1000の数ミリグラムの正極材で電池を作製し、正極材ごとに適切な再生条件を明らかにする。加えて、混合廃棄されたLIB正極材の低環境負荷・省エネルギーで経済性を有す直接リサイクルに新発想で取り組む。

自然科学

43

Gliomatosis cerebri様悪性神経膠腫のシングル核解析による浸潤メカニズムの解明

東京大学医学部附属病院

助教 野村 昌志

悪性神経膠腫は高い浸潤能を有するため、十分な外科的切除をすることが困難であり予後不良である。浸潤メカニズムをより深く理解することは悪性神経膠腫に対する有効な治療を探索する上で重要と考えられる。浸潤性腫瘍は正常組織に染み入るように広がるため、従来のバルク解析では腫瘍細胞の特徴を正確にとらえることが困難であった。本研究は悪性神経膠腫の中でも強い浸潤性形質を示す Gliomatosis cerebriの臨床検体に対して最新のシングル核遺伝子発現解析を用いて細胞レベルでの解析を行い、浸潤能に関与する遺伝子発現プログラムを明らかにする。本研究の成功により予後不良の悪性神経膠腫に新たな治療戦略をもたらす。

自然科学

44

音響波イメージングを志向した感圧分子フラワーの創製

九州大学先端物質化学研究所

教授 福原 学

Society5.0が目指す近未来の対がん医療体制構築に向けては、非侵襲的計測でがんを早期発見可能とするため、がん細胞内生化学反応と臨床症例との関連解析のためのビッグデータを得る必要がある。従って、そのための革新的な材料開発が必要不可欠である。本提案では溶液中で達成できたイメージングプロセスを基に、今後求められる技術を目指して生体細胞へと適用し、メカノバイオロジーのブラックボックスである学理(音波と細胞の相互作用)解明に迫るための感圧化学センサーを探索する。材料探索次元を探索した結果、数ある候補のオリゴマー群の中から「分子フラワー」として代表者が命名した感圧化学センサーの性能を探索する。

自然科学

45

多軸精密作業を学習し自動化する超軽量ロボットファクトリの創出

横浜国立大学大学院工学研究院

准教授 瀧脇 大海

ロボット技術は工業・農業・食品など幅広く自動化に貢献しているが、精密作業分野では十分に普及していない。一方、日本のものづくりは職人技に依存してきたが、人口減少や後継者不足で存続が危ぶまれている。もし狭小空間にも設置可能な超小型高性能ロボットが実現すれば、組立・加工・計測等の多様な精密作業を自動化し、機器の稼働率や応用範囲を大幅に拡大できる。

本申請では、申請者の機構・計測・制御の豊富な基盤技術を統合する事で、昆虫の機動性を模倣した6軸精密自走ロボットを開発し、機械学習による多軸精密作業の自動化を実現することで、電子・MEMS・生物・医療分野に適用可能な超軽量ロボットファクトリの創出を目指す。

自然科学

46

大規模言語モデルを用いた原核生物の表現型-遺伝子型対応の解析

理化学研究所生命機能科学研究センター

チームディレクター 古澤 力

抗生物質が効かない耐性菌の出現は深刻な公衆衛生問題であり、その進化過程を予測・制御する手法の確立は喫緊の課題である。本研究では、申請者が開発した全自動進化実験システムを用いて大腸菌の耐性進化を大規模に実施し、その変異データをもとに、大規模言語モデルEvoを活用して耐性を予測する機械学習システムを構築する。特に、複数変異の相互作用に着目し、それが耐性獲得にどう関与するかを解析する。さらに、モデル予測を実験で検証し、自然環境や臨床から分離された株にも適用可能な手法の確立を目指す。理論生物学・進化実験・機械学習を統合した本研究は、耐性菌出現の理解と予防に向けた革新的なアプローチとなる。

自然科学

47

マウス社会の文化創発における神経基盤解明

慶應義塾大学医学部

教授 牧野 浩史

動物はさまざまな環境に適応するために、他者からの教示や模倣を通じて新たな知識や技能を獲得する。こうした学習形態によって個体間で共有される行動様式や知識体系は「文化」と呼ばれ、世代を超えて累積的に進化する。本研究は、マウス社会における文化の創発とその神経基盤の解明を目的とし、大規模な仮想社会シミュレーションによる理論的アプローチと、実際のマウスを対象とした実験的アプローチを統合する。仮想社会と実社会を双方向的に比較することで、マウス集団において「文化」がいかに関与形成・伝達されるのか、さらにその基盤となる神経メカニズムは何か、を明らかにすることを目指す。

自然科学

48

mRNAの発現を最適化する核外輸送ネットワーク作動原理の解明

近畿大学農学部

教授 増田 誠司

遺伝子発現の制御には、転写、mRNAの安定性、翻訳段階での制御がよく知られている。これらに加えて、mRNAの核外輸送もその1つとして重要な貢献を果たしていることを明らかにしてきた。さらに最近mRNAの核外輸送は、mRNA輸送体と輸送受容体がそれぞれ多様性を持ち、mRNA選択性を発揮することを発見した。この核外輸送ネットワークを紐解く上で、mRNA輸送体と輸送受容体によるmRNA選択の分子機構を解明することが大きな鍵を握っている。本研究はそれぞれのmRNA輸送経路の貢献を包括的に明らかにすることにより、遺伝子発現におけるそれぞれのmRNA核外輸送経路の位置付けを明らかにしていく。

自然科学研究助成概要(一般)

自然科学

49

自然に学ぶ低環境負荷プロセス
による金属酸化物半導体ナノ
材料の創製

産業技術総合研究所材料・化学領域

上級主任研究員 増田 佳丈

自然界に見られる常温・常圧・水溶液環境での材料合成を手本とし、数百℃での高温加熱を用いることなく、低環境負荷プロセスでの金属酸化物半導体ナノ材料の開発を目指す。特に、水溶液中での金属酸化物の結晶成長を制御することにより、金属酸化物の微細構造の制御を目指す。具体的には、「金属酸化物半導体ナノ材料」に焦点を当て、ナノメートルサイズ、マイクロメートルサイズでの微細構造の制御がデバイス特性の向上に大きくつながる、「ニオイやガスのセンシングデバイス」を応用先として設定し、「自然に学ぶ低環境負荷プロセスによる金属酸化物半導体ナノ材料の創製」を目指す。

自然科学

50

核内受容体の転写制御による
新規な痛み治療メカニズム

九州大学大学院理学研究院

教授 松島 綾美

かつては、雄のみが動物実験に使われていた。しかし、近年、雌雄両方の動物実験が必要であることが認識された。その結果、ほとんどの実験結果では雌雄差がないにも関わらず、痛みの感受性には明確な性差があることが明らかになってきた。女性ホルモンのような性特異的なホルモンが痛み制御に関わる可能性が高いものの、これまで直接の証拠はない。本研究では、これまでの申請者のオピオイドペプチド前駆体遺伝子の転写制御に着目した研究成果に基づき、エストロゲン受容体およびエストロゲン関連受容体がオピオイドペプチド前駆体遺伝子の転写制御に関わるという仮説のもと、新たな作用機構の鎮痛薬を創出する。

自然科学

51

超伝導単一光子検出器を用いた
アクシオンダークマター探索の
高感度化

東京大学大学院理学系研究科

准教授 道村 唯太

様々な宇宙観測によって、宇宙の全物質の約80%はダークマターであることがわかっているが、その具体的な正体は謎のままである。我々は、近年高い注目を集めているアクシオンと呼ばれるダークマター候補に着目し、これを高感度に探索する新手法を提案した。アクシオンが光子とわずかに相互作用すると、その質量に比例した周波数で光の偏光面が回転する。この偏光面回転を光リング共振器で増幅して検出しようという提案である。我々はこれまでに、周回長1 mの光リング共振器を用いた世界初の観測運転を実施した。本研究では、狭帯域フィルタ光共振器と超伝導ナノワイヤ単一光子検出器を導入することで、従来のショットノイズ限界を突破し、感度の飛躍的な向上を目指す。

自然科学

52

非哺乳類赤血球の成熟から
紐解く哺乳類赤血球脱核誘導
機構の解明

熊本大学国際先端医学研究機構

特別招聘教授 三原田 賢一

よく知られているドーナツ状の赤血球は核を持たない細胞で、哺乳類でしか観察されません。非哺乳類では他の細胞と同様に核を有する細胞ですが、なぜ哺乳類の赤血球のみが成熟の過程で核を放出(脱核)し無核になるのか、その生物学的意義や機構はまったくわかっていません。我々は、通常ならば有核であるニワトリの赤血球を哺乳類であるマウスに移植すると無核の赤血球になることを発見しました。このことは、脱核の有無は赤血球自身の持つ遺伝子の違いに依るのではなく、体内環境の違いに左右されることを意味しています。本研究では、空間トランスクリプトームやプロテオーム解析を用いて、脱核を外から誘導する因子の同定に取り組みます。

自然科学

53

タンパク質の自在標識化を可能にするセリン4核クラスタータグと化学触媒

千葉大学大学院薬学研究院

教授 山次 健三

細胞内タンパク質の標識化技術は分子生物学研究に欠かせない。標的タンパク質にGFPなどのタグタンパク質を遺伝子工学的に融合する方法が頻用される。しかし、タンパク質タグは分子サイズが大きく、その機能的影響を無視できない。すなわち、本当に標的タンパク質の細胞内挙動や機能を観察できているのか？という疑問が常に残る。したがって、標的タンパク質の機能に干渉しない最小サイズで、様々な機能性プローブを、どの位置にも自在に導入できる統一的な手法が求められる。本研究では、7アミノ酸程度からなる世界最小級ペプチドタグと、それを細胞内で選択的に分子認識し修飾する化学触媒を開発し、上記を満足する有用な標識化法を開発する。

自然科学

54

廃棄物の減容とCO₂の削減を 目途とした廃棄物の再資源化と 再資源化材料の付加価値化

香川大学創造工学部

教授 吉田 秀典

本研究では、まず、水産加工廃棄物の再資源化材料による重金属類、ホウ素、フッ素、タンパク質（大腸菌を念頭）などの吸着機構を多角的に検討する。

次に、水産加工廃棄物を混和したコンクリートの性能を評価する。施工性については、水産加工廃棄物の混和がスランプ値に与える影響や適切な水セメント比を検討する。空気量については、その多孔質性が空気含有量や耐久性に及ぼす影響を把握し、AE剤の最適添加量を見出す。強度面では、短期および長期にわたる圧縮強度を測定する他、中性化抵抗性などについても精査する。こうした検討を通じて、水産加工廃棄物の混和によるイノベーションの創出と、循環経済の可能性についても模索する。

自然科学

55

ドーパント選定によるねじれ 粒界を有する双結晶スピネル材 の粒界強化メカニズムの解明

東北大学金属材料研究所

教授 渡辺 万三志

アルミン酸マグネシウムスピネル(MgAl₂O₄)は、優れた光学的・機械的特性を持つにもかかわらず、粒界特性の制御が困難で実用化に至っていない。本研究では、光学特性を損なわず、より効率的にスピネル材の結晶粒界を強化するドーパントを選定することで、結晶粒界改善法を確立することを目的としている。実際には、スピネル材単結晶からねじれ粒界を有する双結晶を作製し、元素添加による構造・組成への影響を調べる、また、同一の粒界から極微小曲げ試験片を作製し、偏析による強度変化も定量的に測定し、それらの相関を調べることを目的としている。本研究で得られる知見は、界面制御による材料開発の新たな指針を提示するものである。

自然科学研究助成概要(若手)

自然科学

1

なぜメスはオスより長生きか？
性特異的な全身老化統御
システムの解明

大阪大学微生物病研究所

助教 阿部 耕太

本研究は、「なぜ老化に性差があり、メスはオスよりも長生きなのか？」という、生物学の根本的な問いに、新たな老化モデルである超短命脊椎動物ターコイズキリフィッシュを用いて挑む。無脊椎動物では生殖と老化の関係が古くから指摘されてきたが、申請者はこれを脊椎動物で初めて実証し、寿命・老化の性差が生殖細胞を起点とする内分泌シグナルにより制御される可能性を示した。本研究では、性特異的な内分泌・臓器・栄養応答を多階層的に解析し、老化における性差の統合的な理解を目指す。ヒトにつながる新規老化機構の解明や、性差に即した新たな健康長寿戦略の端緒となることが期待される。

自然科学

2

グリア細胞の局所カスパーゼ
活性化によるシナプス可塑性
制御メカニズムの解明

国立精神・神経医療研究センター神経研究所

室長 安藤 めぐみ

カスパーゼ3は、細胞死の一種であるアポトーシスを促進する代表的な酵素である。一方、カスパーゼ3が細胞の局所で一時的に活性化されると、細胞死ではなく細胞の形態・機能の成熟を制御する（局所アポトーシスと呼ぶ）。脳においては、局所アポトーシスの存在や意義は未だ十分に解明されていない。本研究では、神経細胞を支持するグリア細胞であるアストロサイトにおける局所アポトーシスの発見を発端とし、これが神経細胞のシナプス可塑性を制御する可能性を検証する。可塑性の生じるシナプスの選別がグリア細胞に依拠することが明らかとなれば、グリア細胞が記憶学習の最終段階を制御するというパラダイムシフトにつながることを期待される。

自然科学

3

炭素-炭素結合形成を触媒する
新規コバルト依存性酵素の
触媒機構解析

九州大学高等研究院

准教授 牛丸 理一郎

ヌクレオシドとアミノ酸は重要な生体分子であり、互いに結合することによって多様な生物活性を示す。研究代表者らは最近、新規のビタミンB12結合型鉄硫黄クラスター酵素が、ヌクレオシドとアミノ酸を炭素-炭素結合で連結する触媒機能を示すことを見出した。この多核金属酵素はアミノ酸側鎖の不活性化炭素を活性化し、ヌクレオシドの直接修飾を可能にする極めて新規性の高い酵素である。本研究では、この酵素反応の詳細な機構解明を目的とするとともに、構造と機能に基づいた酵素改変によりヌクレオシド骨格に多様な側鎖構造を導入しうる新規バイオ触媒の創出を目指す。

自然科学

4

集団ロングリードゲノム解析で
探る植食性昆虫の害虫化
ポテンシャル

東京都立大学理学部

准教授 岡村 悠

本研究は、植食性昆虫の害虫化をもたらす遺伝的基盤を、ゲノム構造変異（SV）の進化動態から解明することを目的とする。アブラナ科農作物の主要害虫モンシロチョウと、近縁で非害虫のヤマトシジグロシロチョウを対象に、日本各地から集団サンプリングを行い、ロングリードシーケンスによって全ゲノムのSVと遺伝子重複・欠損動態を比較解析する。得られる知見は害虫化に伴う形質進化の機構を明らかにするとともに、外来種や分布拡大種の「害虫化ポテンシャル」を予測する新たな指標の創出につながることを期待される。

自然科学

5

ベージュ脂肪細胞の 新規調節機構の解明

奈良女子大学大学院生活環境科学系

専任講師 小栗 靖生

ベージュ脂肪細胞は、誘導型の熱産生脂肪細胞であり、熱産生を介してエネルギー消費量を高める。従って、ベージュ脂肪細胞を増大・活性化させることは、肥満や2型糖尿病をはじめとする生活習慣病の予防・改善に繋がると示唆される。

申請者はこれまでに、ベージュ脂肪細胞の前駆細胞を解析し、本細胞が加齢など特定の条件下で減少することを明らかにしている。他方、ベージュ脂肪前駆細胞の制御機構は十分に理解されていない。本研究では、ベージュ脂肪前駆細胞の減少に関わる分子機序の解明、および、同細胞を増やすことが可能な誘導物質の探索を目的とする。これにより、生活習慣病の予防・改善に資する新規介入法の開発を目指す。

自然科学

6

成長過程依存的に確立される 社会性を制御する回路基盤の 同定

東京科学大学生命理工学院

特任准教授 小坂田 拓哉

我々ヒトを含む動物はひとりで生きることは難しく、コミュニティの中で日々を過ごしていると言っても過言ではないだろう。コミュニティの中で生きる上では柔軟な社会的交流を営むことは必要不可欠である。そもそも個体として未成熟な期間を無事乗り越えられたのは、母親を筆頭とした親による養育の賜物である。また、次世代を残すための性行動や、ヒエラルキーの根幹となる攻撃性や防衛行動など様々な社会行動は我々の生活に密接な関係を持つ。社会的交流はライフステージ・年齢に応じて制御され、可塑的に変化していると推定される。本研究計画では、社会性を制御するのに重要な脳視床下部に着目して、その緻密な制御機構についてマウスで解析を行う。具体的には、「攻撃性」と「逃避行動」に着目し、幼年期から成体にかけての可塑的な行動変化を検証し、背後に存在する脳内ダイナミクスとともに明らかにする。

自然科学

7

バイオフィームによる 土壌多孔質の閉塞と その生態系への影響

東京大学大学院理学系研究科

助教 菊田 裕也

土壌中の微生物は土壌粒子に固着してバイオフィームと呼ばれる生物膜を形成する。その成長が進むと結果として土壌間隙の水の通り道が塞がるバイオクロッキング（生物学的閉塞）が起こる。この現象は水流に基づく栄養輸送を阻害し、微生物の生存戦略に大きな影響を与える。本研究では、透明人工土壌の実験系を用い、微生物の成長にともなう土壌間隙が閉塞する微視的動態を追跡する。浸透現象と生態系理論の数理モデルを駆使し、土壌構造に基づくバイオクロッキングの普遍的な性質と微生物の最適戦略を解明することを目指す。バイオクロッキングの機序を理解し制御することは、農業・汚水処理・環境浄化などの広範な応用につながると期待される。

自然科学

8

神経炎症局所における制御性 T細胞の分化系譜の解明と 新規細胞療法への展開

国立がん研究センター研究所腫瘍免疫研究分野

研究員 熊谷 尚悟

本研究課題では、神経炎症局所における制御性T細胞の活性化機構を切り口として、転移性脳腫瘍を始めとした中枢神経系悪性腫瘍の抗腫瘍免疫応答のブレーキ機構の本態解明に迫るだけでなく、これらの患者検体解析の結果、見出した事象を元に全く新しい概念の抗腫瘍細胞療法を考案します。さらには転移性脳腫瘍ヒト検体を解析した結果見出された神経炎症局所における制御性T細胞の動態の詳細機構を解明し、自己免疫性神経疾患に対するキメラ抗原受容体発現制御性T細胞（CAR-Treg）療法の可能性を検討したいと考えております。ご支援いただきますこと心より感謝申し上げます。

自然科学研究助成概要(若手)

自然科学

9

クローン性造血による疾患発症メカニズムとその多様性の解明

京都大学大学院医学研究科

助教 佐伯 龍之介

本研究は、高齢者に頻発するクローン性造血(CH)が心血管疾患や重症COVID-19など多彩な疾患リスクを高める仕組みを解明することを目的とする。大規模ヒトコホートにおけるゲノム・マルチオミックス解析により、CHに伴う免疫細胞や臓器環境の変容を明らかにし、疾患発症の因果メカニズムを探る。さらにCHを遺伝子変異や染色体異常などのサブタイプごとに層別化し、疾患リスクとの関連性を精査することで、病態に固有の分子基盤を同定する。最終的には、バイオマーカーや分子標的を見出し、予防医療や介入法の開発につなげることで、人々の健康寿命延伸に貢献することを目指す。

自然科学

10

植物病原細菌の病原性因子を標的とするantivirulence戦略の開発

岡山大学学術研究院環境生命自然科学学域(農)

特任助教 坂田 七海

モモせん孔細菌病は *Xanthomonas arboricola* pv. *pruni* (*Xap*) により引き起こされ、世界的にモモ栽培へ深刻な被害を及ぼしている。従来の銅剤や抗生物質による防除には、耐性菌の出現や環境負荷といった課題がある。本研究の特色は、変異株を用いた大規模スクリーニングにより *Xap* の病原性因子を網羅的に探索する点にある。さらに、同定因子をAI技術で構造解析し、阻害リガンド設計へ展開する。候補化合物は機能検証により病原性抑制効果を確認する。本研究は、病原性因子の解明とそれを標的とした新規防除技術の創出を通じ、環境に優しい持続可能な農業に貢献することを目指す。

自然科学

11

ヒト胚着床アセンブロイドモデルを基軸とした胎児免疫寛容の理解

東北大学大学院医学系研究科

助教 柴田 峻

晩婚化に伴う着床障害は深刻な社会問題となっており、年間約17万人が直面している。本研究では、申請者らが独自に開発したヒト胚着床オルガノイドモデルを活用し、胎児と母体の複雑な相互作用メカニズムを解明する。血管網を有する子宮内膜オルガノイドの構築や、ヒトES細胞由来の胚盤胞様構造物との共培養により着床過程を精密に再現する。シングルセルマルチオーム解析により分子レベルでの胎児-母体間コミュニケーションを統合的に評価し、着床に重要な因子を特定する。この革新的なプラットフォームにより、着床障害の診断バイオマーカーや治療薬開発への基盤を構築し、不妊治療の改善に貢献することを目指す。

自然科学

12

リゾリン脂質受容体LPA1の機能制御機構の解明と治療応用

慶應義塾大学医学部

准教授 志甫谷 渉

リゾホスファチジン酸受容体1(LPA1)はGPCRの一種で、従来の低分子創薬では標的結合部位の疎水性や選択性の問題から有効な阻害薬の開発が難しい。そこで本研究ではLPA1を標的とした抗体医薬の開発を目指す。すでに拮抗活性を持つ抗体の創出に成功しており、クライオ電子顕微鏡(cryo-EM)で抗体-受容体複合体の構造を解明する。得られた情報に基づき、アミノ酸変異導入による抗体機能の向上を図る。最終的に、間質性肺炎など難治性肺線維症の治療を見据えた抗LPA1抗体医薬の創出につなげる。

自然科学

13

超硫黄分子による葉緑体形成の制御機構

奈良女子大学大学院自然科学系

准教授 清水 隆之

本研究では、超硫黄分子による葉緑体形成の制御機構に着目して、新たな植物生理制御システムの分子基盤を構築することを目指す。

超硫黄分子は、分子内に過剰な硫黄原子が付加されたポリスルフィド類で、太古の地球から生物を支えてきた生命素子として、その普遍性や重要性の点から近年注目を集めている。植物でもその重要性が示唆されているが、超硫黄分子が植物の生理機能におよぼす影響とその意義はよくわかっていない。

そこで、植物を最も特徴づけるオルガネラである葉緑体に着目し、超硫黄分子との関係を分子レベルで解明することで、植物における超硫黄分子による生理機能調節システムの重要性を明確化する。

自然科学

14

液中環境下でのコイル・グロビュール転位の動的挙動解明：透過電子顕微鏡によるその場観察技術の革新的応用

東京農工大学大学院工学研究院

助教 清水 俊樹

温度応答性ポリマーは温度変化により、高分子鎖が広がったコイル状態から凝縮したグロビュール状態へ可逆的に切り替わるコイル・グロビュール転位を起こすことが知られている。本研究ではこの液中現象に対し、非晶質炭素膜を用いた独自開発の液体セルで透過電子顕微鏡（TEM）その場観察を行い、従来の手法では難しかったナノスケールでの液中構造変化の可視化を目指す。このアプローチにより、新規機能性材料の設計やドラッグデリバリー材料としての応用に向けた重要な知見を提供することが期待される。さらに、ポリマー合成と分子動力学シミュレーションを取り入れることで、実験、理論、材料設計の統合的な研究へと展開していく。

自然科学

15

多色界面振動分光法による、階層的実空間分子構造解析法の開拓

弘前大学大学院理工学研究科

助教 関 貴一

高度な電子・機械・光学特性を有する材料の合理的な設計指針の確立のためには、その機能化を担う、界面分子構造や局所電荷状態を包括的に理解することが重要である。本研究では、界面選択的な振動分光法である和周波発生振動分光法を基軸として、研究代表者が近年展開してきた、分子の三次元構造解析などの最新鋭の界面現象解析法を発展させ、電子材料表面に存在する分子の官能基の配向と深さ座標を可視化する分光手法の深化に挑戦する。この手法は非接触な界面分子構造解析手法であり、究極的には、デバイス内部の埋没固固界面や生体膜などのソフト分子界面における立体分子構造解析法として広く適用可能になるのではないかと期待する。

自然科学

16

自己組織化の精密制御に基づく強靱な電気伝導性ゲルの創製

大阪大学大学院理学研究科

准教授 高橋 倫太郎

ネットワーク状高分子とイオン液体から構成されるゲルはイオンゲルと呼ばれ、大容量バッテリーや、生体運動を利用した発電デバイスへの応用が期待されているが、簡便な作製法の開発とさらなる力学物性と電気的特性の向上が望まれている。本研究では重合と自己組織化を同時に進行させることによって、秩序性の高いダブルジャイロイドと呼ばれるネットワーク構造を形成させる。この構造が共連続構造であり、なおかつ秩序性が高いために高い電気伝導性を示し、力学物性も強靱になると予測される。本研究ではこの構造やその形成機構を明らかにしながら、力学物性と電気的特性に優れたイオンゲルを開発することを目指す。

自然科学研究助成概要(若手)

自然科学

17

ラマン分光法を用いた
石英単結晶の残留応力挙動の
評価

早稲田大学教育・総合科学学術院

准教授 田口 知樹

一般に鉱物は完全な結晶ではなく、秩序構造が乱れた領域（結晶欠陥）をもつ。近年、私は石英中の結晶欠陥の形成に残留応力が関与する可能性を見出した。日本に代表されるプレート境界の応力場では、鉱物物性に基づき様々な残留応力が発生していることが示唆される。残留応力はラマン分光法に基づき評価できるが、石英の残留応力と結晶欠陥形成プロセスとの関係性はほとんど明確になっていない。本研究では、石英を対象に加熱ステージを搭載した微小硬度計とラマン分光分析を組み合わせることで、広範な温度領域における結晶欠陥周囲の応力挙動を解析する。プレート境界の応力場や地震波速度構造に関する新たな定量的指針を示すことを目指す。

自然科学

18

テラヘルツ分光を用いた、
障害物越しの非接触温度測定
技術の開発

産業技術総合研究所計量標準総合センター

研究員 立川 冴子

従来の非接触な温度計測方法には、放射温度計や、レーザーを使った吸収分光による方法などが挙げられる。しかし、放射温度計は表面の温度しか分からず、可視から赤外域のレーザー分光では不透明な容器の内部温度や障害物越しの温度は計測できない。そこで本研究では、多くの材料に対し透過性の高いテラヘルツ波の分光を使った、不透明容器内の気体の温度測定技術開発に取り組む。申請者の在籍するグループでは可視～赤外域におけるレーザー分光温度計測の実績があり、今回はさらにテラヘルツ領域に拡張させる。実現すれば、非接触な内部温度計測が可能になるだけでなく、複数ガスがある場合には分子種同定と各分子毎の温度測定にもつながる。

自然科学

19

交通網の人流を記述する
数理フレームワークの構築

東京大学大学院工学系研究科

助教 谷田 桜子

本研究は、交通ネットワーク上の人の流れを体系的に記述し、輸送の最適化を実現する方法論の構築を目指す。まず個別の交通系における自己組織化現象を数値シミュレーションと数理モデル化で明らかにし、得られた記述を抽象化する。次に、それらの結合する手法を検討し、個別の現象の記述を交通網全体のダイナミクスへ拡張するより普遍的な数理モデルを構築する。これにより、交通現象を可視化し系統的に解析する人流計算の枠組みを提案し、混雑や遅延の解消に資する応用を開拓する。寺田寅彦「電車の混雑について」の系譜を受け継ぐ現代的研究であり、物理学的興味に加え、効率的な輸送を実現する工学的意義も大きい。

自然科学

20

膀胱がん治療QOL向上を
目指した革新的治療戦略開発

大阪医科薬科大学医学部

講師 辻野 拓也

本研究は、膀胱がんに対する化学放射線療法（CRT）の治療効果を最大化し、耐性克服と治療適正化を目指すものである。申請者らは、親株および耐性株を用いたCRISPRスクリーニングとマルチオミクス解析により、治療感受性・耐性関連遺伝子を網羅的に同定し、世界最大級の約200例のCRT施行膀胱がん臨床データと統合解析することで、実臨床に即した遺伝子バイオマーカー探索を行っている。最終的に、個別化医療の実現を通じて、膀胱がん治療の予後とQOL向上に貢献することを目的とする。

自然科学

21

タンパク質分解系を規定する ユビキチン液滴の解析

順天堂大学医学部

准教授 土屋 光

細胞内には、ユビキチン鎖を相分離の駆動力として、分解の場となる液滴が存在する。一つは申請者が発見したプロテアソームfociでありプロテアソーム分解の場、もう一つはp62 bodyでありオートファジーによる分解の場となる。しかしながら、「どのように液滴分解の経路が規定されるのか」については不明である。申請者らは、p62 body制御分子を探索したところ、プロテアソーム・オートファジー両経路に関与するUBQLNファミリーを同定した。本研究ではUBQLNファミリーを中核とし、多面的な高深度プロテオーム解析を組み合わせ、ユビキチン陽性の液滴を介したタンパク質分解経を規定する因子・要因を決定する。

自然科学

22

有機化ナノクレイを鋳型とした シート状高分子の高効率合成と 精密特性評価

山形大学大学院有機材料システム研究科

准教授 土肥 侑也

二次元方向のみに架橋を有するシート状高分子は、新規構造高分子として合成と特性解明に注目が集まるが、未だモデル試料の合成例は限定的である。研究代表者は最近、汎用モノマーメチルメタクリレート（MMA）の無機層状化合物モンモリロナイト（MMT）鋳型内での平面重合と分離精製より、目的シート状高分子が得られたことを実証した。本研究では、MMT鋳型を有機化処理し、（１）MMAの高効率平面重合の実現と（２）他モノマーへの同手法の展開を目指す。得られた高分子試料に対して、研究代表者の分離精製技術を基盤とし、分子量の異なるモデル試料群を調製した上で、希薄溶液中の形態と運動性の精密評価・解析を目指す。

自然科学

23

超大規模メタゲノムデータに 基づくマイクロバイオームの疾患 横断解析と汎用診断モデルの開発

東京大学大学院新領域創成科学研究科

特任准教授 西嶋 傑

ヒトの腸内には多様な微生物が共生しており、その集合体であるマイクロバイオームは消化や免疫だけでなく、さまざまな疾患とも深く関わるのが近年明らかになっている。従来の研究は主に個別の病気を対象としてきたため、異なる疾患に共通して関連する腸内細菌や、ある疾患に特異的な細菌については十分に理解されていない。本研究では、世界最大規模となる数万件の腸内メタゲノムデータを統合的に解析し、疾患間に共通する特徴や特異的な細菌を体系的に明らかにする。さらに、これらの知見を基に、複数の疾患リスクを同時に評価できる新しい診断モデルを開発し、腸内マイクロバイオーム研究の新たな展開を目指す。

自然科学

24

磁性アクティブ乱流の 普遍統計則と制御原理の解明

京都大学大学院工学研究科

助教 別府 航早

微生物や動物細胞など自ら動き相互作用する「アクティブマター」は、微小スケールのエネルギー注入から乱流様の集団運動（アクティブ乱流）を自発的に形成する。その予測と制御は、非平衡物理・生命科学・工学にまたがる重要課題である。申請者は、バクテリア懸濁液に磁性流体を混ぜた「磁性アクティブ流体」を開発し、外部磁場で運動様式を操作できる基盤を築いた。本研究では、静的磁場から動的磁場まで制御を拡張し、流れの状態を系統的に切り替えることで、実用的な操作指針と汎用的な制御原理を確立する。さらに、実験・数値計算・データ駆動モデリングを統合し、乱流ダイナミクスの予測とエネルギー輸送の普遍的統計則の理解を目指す。

自然科学研究助成概要(若手)

自然科学

25

Ru(IV)-Ru(IV)二核錯体を用いた有機化合物のC-H酸化反応

上智大学理工学部

准教授 三澤 智世

自然界では2つ以上の金属(=金属多核)中心を反応点とする多様な金属酵素により、常温・常圧で効率的に物質変換が行われている。メタンをメタノールに酸化するメタンモノオキシゲナーゼ(MMO)の活性中心は2つの鉄イオン(sMMO)や銅イオン(pMMO)を酸素が架橋した構造を持つ。エネルギー・環境問題が深刻化する昨今、天然のメタン変換反応の理解と天然に倣った人工的な反応系の構築は重要である。

本研究課題ではsMMO模倣に着目した。鉄と同族で第二遷移系列元素のルテニウム(IV)(Ru(IV))中心を導入した二核錯体を用いて、モデル基質となる有機分子のC-H酸化における中間体の結晶構造や物性評価、および酸化反応過程の解明・理解を目指す。

自然科学

26

大腸癌肝転移における線維化誘導性免疫変容と転移再発メカニズムに関する研究

慶應義塾大学医学部

助教 森田 覚

本研究は、大腸癌肝転移における線維化と免疫微小環境の相互作用を包括的に解析し、再発機構の解明と新規治療戦略の創出を目指す。臨床検体に対する詳細な病理学的評価により線維化の程度と免疫細胞浸潤との関連を定量化するとともに、マウス肝転移モデルを用いて線維化が免疫細胞の分布や機能に及ぼす影響を多角的に検討する。さらに分子病態学的手法を組み合わせ、線維化関連因子が腫瘍微小環境に与える影響を同定することで、再発リスク予測や治療標的探索に資する知見を獲得することを目的とする。

自然科学

27

新奇ホルモン様分子の受容体探索と機能的保存性の精査

群馬大学生体調節研究所

助教 吉成 祐人

生物は飢餓に陥ると、その持続時間に応じて糖・脂肪・アミノ酸といった貯蔵栄養素を巧みに動員し、生存を維持する。しかし、それぞれの栄養素の利用の切り替えがいかに調節されているのか、その詳細なメカニズムの多くは未解明である。

本研究では、申請者がキイロショウジョウバエを用いて発見した「飢餓時アミノ酸代謝誘導ホルモン CG14075」に着目し、その受容体探索を進めるとともに、マウスを用いてオーソログの機能解析を行う。これにより、飢餓時における代謝の切り替えを担うシステムの統合的理解に向けた基盤を築くことを目的とする。

自然科学

28

分子線エピタキシー法による薄膜試料合成を基軸としたトポロジカル量子物性開拓

東京大学大学院 新領域創成科学研究科

准教授 吉見 龍太郎

近年発見された新しい物質群であるトポロジカル量子物質と呼ばれる物質群は、結晶や磁性の対称性によって特徴的なバンド分散・スピン構造を有し、散逸の伴わない量子伝導や局在スピン反転など既存の半導体とは全く異なる物性を発現する。本研究では、薄膜試料におけるトポロジカル量子物質の物質開発・物性探索を行う。薄膜試料は表面状態を有するトポロジカル量子物質の表面状態を調べるのに最適な形態であり物性探索に大きく寄与する。特に、新規トポロジカル絶縁体の物質開拓とそれを用いた磁気近接ヘテロ接合による量子異常ホール効果の高温化と、強誘電トポロジカル絶縁体の誘電分極制御による伝導制御に取り組む。

自然科学

29

腸内微生物ダークマターである ウイルスに注目した腫瘍制御の 新パラダイム

京都大学大学院医学研究科

特定研究員 米倉 慧

悪性腫瘍は日本人の死因1位であり、悪性腫瘍の効果的な治療法の開発は重要な課題である。がん薬物療法の治療効果を左右する因子として腸内細菌叢が近年注目を集めている。一方で、腸内マイクロバイオームの構成員である腸内ウイルスの抗腫瘍免疫応における役割は不明であった。

本研究は、患者ビッグデータ解析、1細菌レベルのゲノム解析技術、さらにマウス実験を組み合わせ、腸内ウイルスが細菌の遺伝子発現をリプログラミングし、細菌由来代謝物質の変化を通じて抗腫瘍免疫応答や免疫チェックポイント阻害剤の有効性に影響するという仮説を検証する。

第54回（2025年度）三菱財団人文科学研究助成先一覧

【大型連携研究助成】

番号	所在地	名 称	使 途	金 額
1	東京都	東京大学東洋文化研究所 教授 なかじま たかひろ 中島 隆博	地球環境再生と新しい生の形式 ーアジアの知から紡ぐ倫理的未來	9,000,000円

【一般助成】

番号	所在地	名 称	使 途	金 額
2	東京都	東京大学大学院医学系研究科 客員研究員 あなざわ りょうこ 穴沢 良子	「精神科医療機関による『心療内科』 の診療科名の標榜が人々の精神科医 療に対する認識と受診行動に与える 影響」	830,000円
3	山形県	山形大学学士課程基盤教育院 教授 あら き し のぶ 荒木 志伸	AI-OCRを活用した山寺立石寺・ 木札の考古学的調査とデータ ベースの構築	1,910,000円
4	愛知県	名古屋大学大学院法学研究科 教授 あら み れい こ 荒見 玲子	女性地方公務員のキャリア形成と 能力開発志向における組織社会化 の影響についての調査研究	3,200,000円
5	東京都	青山学院大学国際政治経済学部 教授 いむ じえふあん 林 載桓	中国共産党統治下の国家権力と 基層幹部：人徳・人間関係・法制度 に基づくアカウンタビリティの動態 分析	2,970,000円
6	東京都	お茶の水女子大学人間発達教育科学研究所 教授 うえはら いずみ 上原 泉	大規模言語モデルによる縦断的 な語りデータの解析と自己史の 形成過程の理解	3,330,000円
7	福岡県	西南学院大学法学部 教授 う かい たけふみ 鵜飼 健史	選挙権年齢からみた「私たち」 の民主主義の構想ー政治参加の 可能性	760,000円
8	東京都	東洋大学法学部 准教授 おく の ま ゆみ 奥乃 真弓	米国のLLCのフィデューシャリー・ デューティー緩和がデジタル社会に 与える影響	950,000円
9	奈良県	奈良県立大学地域創造学部 准教授 おまた ひ とみ 小俣ラポー 日登美	プロパガンダ形成の長期過程の 歴史ー近世フランス語宗教テク ストの人文情報学的解析の試み	3,750,000円
10	愛知県	名古屋大学人文学研究科 准教授 かげやま えつ こ 影山 悦子	仏教東漸と大仏造営の源流を もとめてーパキスタン北部ダレ ル渓谷の調査資料をもとにー	1,210,000円
11	埼玉県	早稲田大学人間総合研究センター 招聘研究員 きくち ゆ き こ 菊地 有希子	弥生時代の米収量と気候の影響 に関する実験考古学的研究	530,000円
12	福岡県	九州大学留学生センター 准教授 きのした ひろ こ 木下 博子	インドネシア社会における保守 勢力の台頭とイスラーム的規範 にかんする研究ー中東留学経験 者の民族誌ー	2,240,000円
13	東京都	東京大学史料編纂所 教授 くろしま さとる 黒嶋 敏	尚家旧蔵「琉球国之図」のデジタル 公開と総合研究	1,350,000円
14	東京都	早稲田大学教育・総合科学学術院 教授 こう の な 鴻野 わか菜	日本におけるウクライナ美術の 受容の基礎的研究	3,130,000円
15	東京都	東京科学大学大学院医歯学総合研究科 講師 こうばた ひろ こ 甲畑 宏子	アドレセンスの同意年齢に関 する倫理的・法的変遷の検討 及び東アジアにおける実態調査	3,250,000円

番号	所在地	名 称	使 途	金 額
16	東京都	明治大学情報コミュニケーション学部 准教授 小林 秀行 こばやし ひでゆき	石川県能登町・穴水町における多重被災からの生活再建の実態解明	1,090,000円
17	京都府	京都大学大学院教育学研究科 教授 齋藤 直子 さいとう なおこ	〈生き方としての哲学〉に基づくグローバル・ヒューマニティーズの国際対話研究	3,380,000円
18	宮城県	東北大学大学院経済学研究科 准教授 酒井 一輔 さかい かずほ	女性労働・実質賃金と結婚行動に関する比較史的研究：前工業化期の日本を中心とした歴史実証分析	2,310,000円
19	東京都	東京大学相談支援研究開発センター 特任教授 佐藤 岩夫 さとう いわお	最高裁評議過程の実証的研究－「司法のブラックボックス」を開く	3,190,000円
20	東京都	早稲田大学文学学術院 教授 清水 由紀 しみず ゆき	道徳性の発達に関する比較文化研究：多文化共生のための社会的基盤構築に向けた基礎的研究	2,230,000円
21	鳥取県	鳥取大学地域学部 教授 筒井 一伸 つつい かずのぶ	「田園回帰」がもたらすベトナム農村の建造環境の変容に関する地理学的研究	2,780,000円
22	大阪府	大阪大学大学院医学系研究科 特任助教 中尾 俊一郎 なかお しゅんいちろう	訪日外国人に対する救急医療における医療者の英語診療技術向上に資するAI技術を活用した教材開発と検証	3,430,000円
23	東京都	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授 中野 裕考 なかの ひろたか	アンデス地域先住民文化に基づく哲学可能性の探究	2,910,000円
24	高知県	高知県立大学総合情報研究センター 講師 根本 大志 ねもと たいし	3DGSを活用した「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」のデジタルアーカイブ構築	1,460,000円
25	兵庫県	神戸大学大学院人文学研究科 教授 野口 泰基 のぐち やすき	記憶の安定化をもたらす心理的・神経的要因の研究	2,200,000円
26	愛知県	名古屋大学人文学研究科附属人類文化遺産テキスト学研究センター 研究員 野澤 暁子 のざわ あきこ	中世ヒンドゥー・ジャワ時代貝葉写本の自然描写と韻律構造の分析：環境適応と集合的記憶の観点から	1,950,000円
27	京都府	京都大学人文科学研究所 教授 藤原 辰史 ふじはら たつし	雑誌「暮しの手帖」の未公開資料、とくに同雑誌への女性の投稿原稿ならびに女性の生活に関する取材資料の整理と分析	3,400,000円
28	宮城県	平泉参詣曼荼羅研究会 代表 堀 裕 ほり ゆたか	平泉の参詣曼荼羅の研究	2,760,000円
29	東京都	東洋大学社会学部 教授 本間 圭一 ほんま けいいち	日米両国民の相手国情報収集におけるソーシャル・メディアの利用実態調査 二国間外交への影響展望	2,110,000円
30	東京都	公益財団法人中近東文化センター附属アナトリア考古学研究所 所長 松村 公仁 まつむら きみよし	ヒッタイト帝国成立とフリ宗教の受容；ビュクリュカレ遺跡フリ宗教文書の発掘と研究	3,380,000円
31	愛媛県	愛媛大学大学院農学研究科 准教授 間々田 理彦 ままだ みちひこ	カンボジアの農村部における障害者の「生活の質」に関する研究	1,950,000円

番号	所在地	名 称	使 途	金 額
32	愛媛県	愛媛大学法文学部 教授 み かみ さとる 三上 了	海外援助アプローチと援助成果 持続性－ウガンダでの家庭内飲料水 浄化支援を題材としたフィールド 実験－	3,160,000円
33	東京都	東京大学教養学部附属教養教育高度化機構 特任准教授 みやざき あや 宮崎 彩	「資源化する文化遺産」と「文化 遺産化する資源」：持続可能な 文化遺産とは何か	2,250,000円
34	茨城県	筑波大学図書館情報メディア系 助教 むら た こうじ 村田 光司	中後期ピザンツ世界における 天文現象記録の研究	2,050,000円
35	茨城県	筑波大学図書館情報メディア系 准教授 やなぎうら たけし 柳浦 猛	大学生数の増加が地域経済に 与える影響の測定：私立大学 公立化現象に着目して	3,630,000円
36	山口県	山口大学教育学部 講師 やまもと はじめ 山本 孟	国内所蔵楔形文字粘土板文書の データベース作成	1,930,000円
37	神奈川県	慶應義塾大学総合政策学部 教授 わたなべ まさひと 渡辺 将人	台湾の政治と選挙をめぐる「装飾」 文化の歴史：アメリカとの比較を 中心に	3,040,000円
合 計			37件	95,000,000円

(所属先・職名については2025年9月11日現在)

人文科学研究助成概要(一般)

人文科学

1

地球環境再生と新しい生の形式－アジアの知から紡ぐ倫理的未来

東京大学東洋文化研究所

教授 中島 隆博

地球温暖化の根底にあるのは、人間中心主義的世界観や科学技術と結びついた資本主義の不正である。本研究は、人間をHuman Co-becoming=他者とともに人間的になりゆくプロセスと捉え、環境と真に調和した「新しい人間」を再定義するとともに、その行動規範となる新しい生の形式を社会に導入することを目的とする。

本課題では、アジアの在来知「礼」を気候・環境正義実現のための規範として鍛え直すことで、共感やケアに基づく「新しい普遍概念」を創出し、この概念に基づいた新しい地球倫理、責任ある市場経済、豊かな人間の生の形式を可視化して社会に発信する。これにより人間と環境が共生する倫理的未来をめざす。

人文科学

2

「精神科医療機関による『心療内科』の診療科名の標榜が人々の精神科医療に対する認識と受診行動に与える影響」

東京大学大学院医学系研究科

客員研究員 穴沢 良子

近年、精神疾患患者数は増加の一途を辿っている。1996年に「心療内科」が標榜診療科名として認可されて以降、これを標榜する精神科診療所数は激増した。両診療科は元の専門性を異にするものだから、この標榜によって精神科受診の心理的ハードルが低下し、健康問題への早期介入のメリットが指摘される。一方で、真に心療内科的治療が必要な場合のミスマッチや心療内科医が精神疾患を診るリスクも懸念される。本研究は、社会の両診療科の区別や同一視の実態を明らかにし、心療内科の標榜が精神科受診行動に及ぼす影響を探ることで、精神科医療における標榜診療科名の役割を明らかにし、適切な医療情報提供とその普及に寄与することを目的とする。

人文科学

3

AI-OCRを活用した山寺立石寺・木札の考古学的調査とデータベースの構築

山形大学学士課程基盤教育院

教授 荒木 志伸

本研究は、山形市立石寺（通称：山寺）奥の院から発見された近世木札群（推計10万点）の調査をもとに、庶民信仰の実態を解明し、木札研究の方法論を確立することを目的とする。木札の形式・法量・木目・文字内容を詳細に記録し、木札の製作過程や奉納主体に関する宗教・社会的背景について明らかにしたい。また、全国の木札に関するデータベースを作成し、広い視野から立石寺木札群を考察する。調査に際しては、AI-OCRを導入した解析システムを独自に開発、導入することで、従来困難であった大規模資料の調査手法を実践的に提示し、歴史研究の新たな展開を目指す。

人文科学

4

女性地方公務員のキャリア形成と能力開発志向における組織社会化の影響についての調査研究

名古屋大学大学院法学研究科

教授 荒見 玲子

本研究では、「女性公務員のキャリア意識や能力開発志向が、所属組織に適応する組織社会化を経ることによってどのように変化するか」という問いに答えるために、過去に一度データを取得した4都県（茨城県、東京都、福井県、愛知県）の新規採用職員の男女約400名を対象に、追跡調査を行い、過去の調査からの変化や採用5年目に直面する課題について、昇進・職務に関する認識、仕事生活の両立に関する意識等と、属性の変化や異動や職場環境に関する意識の影響とその男女差を確認する。それにより働く職員と組織運営・人事管理の経時的な関わりの視点から明らかにし、広く公務に関わる働き方や日本型雇用の見直しについても示唆を得る。

人文科学研究助成概要(一般)

人文科学

5

中国共産党統治下の国家権力と基層幹部：人徳・人間関係・法制度に基づくアカウントビリティの動態分析

青山学院大学国際政治経済学部

教授 林 載桓

本研究は、中国共産党統治の持続と変化のメカニズムを、基層統治に着目して捉え直す試みである。第一に、外部環境の大きな変化にも共産党統治が継続してきた理由を、基層統治の視点から捉え直し、従来のエリート中心の説明の限界を補完する。第二に、習近平政権下で進められる統治体制改革、とりわけ党組織の基層社会への浸透や監督制度の整備と運用が、どのような成果や限界をもたらしているのかを実態調査により明らかにする。第三に、末端行政組織に配置された基層幹部の出自・経歴・職業意識・ネットワークに焦点を当て、彼らが政策実施の現場でどのように行動しているのかを分析することで、共産党統治の構造を再検討する。

人文科学

6

大規模言語モデルによる縦断的な語りデータの解析と自己史の形成過程の理解

お茶の水女子大学人間発達教育科学研究所

教授 上原 泉

本研究は、7組の親子を対象に乳幼児期から数ヶ月ごとに10～15年以上に渡り実施した、日常の出来事の記憶に関するインタビューにより収集した会話データを大規模言語モデルで分析し、併行して収集してきた感情語や記憶語の理解データや親による子どもの発達度合いの報告データに基づく心理学的分析結果と併せることで、乳幼児期から青年期にいたる自己史の形成過程に関する新たな解釈を提供する。本研究は、AIへの個体史や個性の実装研究へと発展し、個人の活動にカスタマイズされた個性的なAIやロボットの開発につながる可能性と、こうした進展に伴うELSI（倫理的・法的・社会的課題）を具体化できる可能性が期待される。

人文科学

7

選挙権年齢からみた「私たち」の民主主義の構想－政治参加の可能性

西南学院大学法学部

教授 鵜飼 健史

本研究の目的は、選挙権年齢の引き下げはどこまで可能なのか、理論的に明らかにすることである。本研究はまず、16歳選挙権の導入をめぐる現代社会分析や、選挙権年齢に関する歴史の解明に取り組む。こうした土台となる研究成果をふまえた上で、年齢引き下げについての一般的な諸論拠を批判的に考察する。本研究では、基準として「能力」の正当性、シルバー・デモクラシー論の理論的な妥当性、そして年齢規定そのものの意義についても検討がなされる。これら予備的な考察によって、最終的に、民主主義をいっそう民主化するという観点から、望ましい選挙権年齢のあり方が導かれる。

人文科学

8

米国のLLCのフィデューシャリー・デューティー緩和がデジタル社会に与える影響

東洋大学法学部

准教授 奥乃 真弓

会社法は経営者たちが会社の利益よりも私的利益の追求を優先することを防ぐため、経営者らに信託義務（Fiduciary Duty）を課す。これに対して、米国で近年人気の事業体であるLLC（有限責任会社）では、「契約自由の原則」「経済的効率性」の観点から運営契約により、信託義務の緩和が認められる。技術革新が進む中、AI事業やDAO（分散型自律組織）にもLLCが導入され大幅な緩和が進行中である。本研究では、契約自由の原則と信託義務の相克を媒介する基本原理を明らかにし、LLC・DAOに横断して適用できる設計指針を確立し、日本の会社法への示唆を得ることを目的とする。

人文科学

9

プロパガンダ形成の長期過程の歴史－近世フランス語宗教テキストの人文情報学的解析の試み

奈良県立大学地域創造学部

准教授 小俣ラポー 日登美

17世紀日本ではキリスト教が迫害され、そのイメージがヨーロッパで迫害言説として語られた一方、フランスではカトリック／プロテスタント間の争いから迫害言説が広まっていた。日欧で起きた宗教的闘争は歴史的事件として明確な因果関係を持たないが、ヨーロッパで浸透した殉教言説を通じて、両者は歴史的記憶の形成過程で接続されたと仮定される。この現象は、従来の伝統的歴史学的手法では、文化史的・文学的・美術史的・文化人類学的個別の事象を総合的に積み重ねて指摘するほかなかった。そこで本研究では、統計学者およびAI技術者が共同して、デジタル・ツールを利用した分析を行って、人文情報学的に実証性を加えようとするものである。

人文科学

10

仏教東漸と大仏造営の源流をもとめて－パキスタン北部ダレル渓谷の調査資料をもとに－

名古屋大学人文学研究科

准教授 影山 悦子

インダス川上流に位置するダレル渓谷は、古代仏教の一大拠点であったガンダーラから北へ、中国に向かうカラコルム道沿いにある。5世紀初めにこの道を南下してインドへ向かった東晋の仏僧法顕は、ダレル国に木彫の弥勒大仏が存在し、それにより仏法の東流が始まったと伝える。仏教伝播や大仏信仰の起源を考える上で重要な地域だが、治安が悪いため当地の発掘調査は行われていない。

故土谷遙子氏は、1998年にダレル渓谷に入ることに成功し、以降数年にわたりその周辺の峠道を徹底的に踏査している。本研究では土谷氏の調査資料を出発点として、仏教東漸や大仏建立という大きな文化の流れや営みの実態を明らかにすることを目指す。

人文科学

11

弥生時代の米収量と気候の影響に関する実験考古学的研究

早稲田大学人間総合研究センター

招聘研究員 菊地 有希子

米収量は、弥生時代の人々が気候変動にどう反応したかを推定するために重要な検討項目の一つである。本研究では、実験考古学的手法を用いて、気候が米収量にどのような影響を及ぼしたかを明らかにする。弥生時代の栽培条件（無施肥、無農薬、機械不使用）を可能な限り復元した28年続く実験田で、栽培可能な最も古い品種を栽培し、採取した18年分の収量構成要素（株あたり穂数、穂あたり粒数、登熟歩合）のデータと、気象データ（気温、降水量、日照）の相関関係を解析する。各気候要素が収量構成要素にどう影響するかを具体的に把握できれば、人々の気候変動への対応に米収量の増減がどう影響したかを推定するための有益な情報となる。

人文科学

12

インドネシア社会における保守勢力の台頭とイスラーム的規範にかんする研究－中東留学経験者の民族誌－

九州大学留学生センター

准教授 木下 博子

本研究は、インドネシア人の中東留学経験が帰国後に再解釈され、宗教的規範や価値観の拡大にどう影響するかをエスノグラフィーの手法で明らかにする。特にエジプトのアズハル大学への留学経験者に注目し、教育・外交・市民社会・産業分野における多様な活動を描き出すことで、保守的イスラームの担い手とされる彼らが、現代インドネシア社会におけるイスラーム的規範の変容に果たす役割とそのメカニズムを総合的に解明する。また、国家制度に限らず、草の根的な活動を含む中東留学経験者の多面的な影響を検討することで、宗教的实践の変容過程を通時的に理解し、イスラームと社会の関係性に関する新たな知見を提示することを目指す。

人文科学研究助成概要(一般)

人文科学

13

尚家旧蔵「琉球国之図」のデジタル公開と総合研究

東京大学史料編纂所

教授 黒嶋 敏

本研究では、琉球の国王家だった尚家に伝わった「琉球国之図」のデジタルアーカイブを構築し、その詳細な内容分析を進めていく。同図は、18世紀の琉球で三角測量の技術を応用して製作された精巧な古地図で、美しく彩色されるとともに、図中を埋め尽くすように地名情報が書き込まれており、歴史資料としても高い意義を持つ作品である。

これまで同図は公開体制が整わず研究が進んでこなかったが、新たな所蔵者のご理解のもと、申請者らの撮影した高精細データを用いたデジタルアーカイブ構築が可能になった。アーカイブには地名検索や現代地図との重ね合わせなどの機能を搭載させた利用しやすいものとし、研究期間中の公開を目指している。

人文科学

14

日本におけるウクライナ美術の受容の基礎的研究

早稲田大学教育・総合科学学術院

教授 鴻野 わか菜

ウクライナと日本の美術交流史の調査に関する基礎的研究は、現在戦争によって文化も被害を受けているウクライナとの将来的な連携のためにも重要である。1920年代に革命を避けて来日したウクライナ美術家の足跡を辿ることは、今日の両国の交流に対しても光を投げかける。また、2020年代に新たに進展しているウクライナとの美術交流についても、本研究が学術的な側面からその推進を助けることになる。美術の受容研究は過去の経緯に限定されがちであるが、現在進行中の文化交流をさらに将来に向けて考えることは重要な営みである。日本とウクライナだけでなく、関係する多くの国々を文化や歴史でつなぐ視野が開かれることが期待される。

人文科学

15

アドレセンスの同意年齢に関する倫理的・法的変遷の検討及び東アジアにおける実態調査

東京科学大学大学院医歯学総合研究科

講師 甲畑 宏子

本研究は、未成年者、特に10代のアドレセンスを対象に、医療・医学研究における同意年齢と同意能力をめぐる課題を検討するものである。まず、文献調査を通じて同意年齢に関する議論の変遷や倫理的課題を整理する。次に、日本・韓国・中国・台湾における、1) 臓器移植の意思表示、2) 性に関連する医療の受診、3) 宗教上の理由などにより保護者と治療方針の合意が得られない場面での医療提供、4) バイオバンクへの参加、5) 医学研究への参加、の同意実態を明らかにする。得られた知見は、日本における同意年齢の在り方に関する議論や国際的枠組みの構築に資することを目的とする。

人文科学

16

石川県能登町・穴水町における多重被災からの生活再建の実態解明

明治大学情報コミュニケーション学部

准教授 小林 秀行

多重被災は、複数の自然災害が生活再建のために必要な時間よりも短い間隔で発生することによって繰り返され被災し、その被害が重なり合っていく被害形態を意味する。この被害形態は近年、気候変動などにもなう災害の頻発によって問題視されはじめており、物的被害の累積は当然ながら、生活再建の努力が再被災によって破壊される点で被災者に大きな心理的影響をもたらすことが指摘されている。本研究では、いわゆる能登群発地震および奥能登豪雨によって、長期にわたって被害が繰り返されている奥能登地域の能登町・穴水町を対象に、被害実態および回復過程を明らかにすることを通して、多重被災の構造をより正確に把握することを目指す。

人文科学

17

《生き方としての哲学》に基づく グローバル・ヒューマニティー ズの国際対話研究

京都大学大学院教育学研究科

教授 齋藤 直子

本申請研究は、人文科学の未来に向け、アメリカ実践哲学を学際的・超学際的な〈生き方としての哲学〉として再評価し、京都学派の哲学、およびウィットゲンシュタインの日常言語哲学の東西の思想系譜の相互触発を通じて、人間教育の新たな思想枠組みを提示する。その実践的意義を、医療倫理、生命倫理、死の教育、環境教育、食といのちの教育、他なる者への美的想像力を育成する教育、メンタルヘルス教育において解明し、哲学とはすでにいつでもどこでも学際的・超学際的に開かれたものであることを実証する。イギリス、フィンランド、フランス、アメリカの研究者たちとの国際連携を基軸に、グローバル・ヒューマニティーズの拠点形成を形成する。

人文科学

18

女性労働・実質賃金と結婚行動に 関する比較史的研究：前工業化期 の日本を中心とした歴史実証分析

東北大学大学院経済学研究科

准教授 酒井 一輔

本研究は、産業革命以前、すなわち1600年から1890年頃（江戸時代初期～明治時代中期）までの日本における農村女性雇用労働者を対象に、①平均的な実質賃金水準および男女賃金比、②実質賃金水準・男女賃金比が結婚行動に与えた影響、の2点について長期推計と国際比較を行うことを目的としている。そのために、奉公人請状を中心とした古文書などの一次資料を日本各地から収集し、ミクロデータの積み上げとその統計的分析を行う。具体的な作業として、農村女性の実質賃金額と男女賃金比の系列および平均初婚年齢・生涯未婚率・離婚率の系列を推計して、実質賃金・男女比の系列との関係を分析することを予定している。

人文科学

19

最高裁評議過程の実証的研究－ 「司法のブラックボックス」を 開く

東京大学相談支援研究開発センター

特任教授 佐藤 岩夫

裁判所の判決は政府の政策や社会のあり方に大きな影響を及ぼすことから、裁判所がその判断に至った経緯を深く知ることは、社会及び学問の重要な関心事である。しかし、裁判所の評議過程資料が公文書として保管され一定期間経過後に公開の道が開かれる諸外国と異なり、そのような仕組みがない日本では、裁判所の評議過程は完全にブラックボックスとなってきた。この状況において、著名な法学者にして最高裁判事を務めた故團藤重光博士が遺し、近年整理作業が進む膨大な資料群は貴重な意義を持つ。本研究は、法学各分野の研究者がこの資料を読み解き、最高裁判決の評議過程を実証的に解明することで、司法のブラックボックスを開く試みである。

人文科学

20

道徳性の発達に関する比較文化 研究：多文化共生のための社会的 基盤構築に向けた基礎的研究

早稲田大学文学学術院

教授 清水 由紀

本研究は、子どもの道徳性発達における普遍性と文化固有性を体系的に検討し、異文化理解と多文化共生の基盤構築に資することを目的とする。道徳的な価値観は社会的な存在である人において普遍的な発達を示すが、その表現形態は文化圏によって異なる可能性がある。しかしこれまで、異文化間での比較の実証は限られてきた。そこで本研究では、日本とドイツの児童を対象に援助行動を促進・抑制する条件の違いについて実験的検討を行う。具体的には、他者からの要求の有無や要請者の違い、および状況によって援助行動がどのように変化するかを調べると共に、親の道徳的な価値観が子どもの援助行動にどう影響するかについて検討する。

人文科学研究助成概要(一般)

人文科学

21

「田園回帰」がもたらす
ベトナム農村の建造環境の
変容に関する地理学的研究

鳥取大学地域学部

教授 筒井 一伸

ベトナム農村では近年、Bỏ phố về quê（直訳は向村離都）と呼ばれる田園回帰（農村移住）の現象が顕著になってきている。日本国内でも顕著な田園回帰の現象は、新しい農村住民が生まれ、地域コミュニティにおける既存の農村住民とのコミュニケーションを通じた相互作用が地域づくりに展開するモデルとして理解される。同時にそのなりわい創出により建造環境の変容をもたらす。建造環境とは建造物および周辺の物的枠組みであり、そこでの生産と消費など様々な活動がコミュニティ空間の変容と地域づくりに影響を及ぼす。本研究は、ベトナム農村の田園回帰現象による建造環境の変容実態を、日越研究者の連携により明らかにする。

人文科学

22

訪日外国人に対する救急医療における
医療者の英語診療技術向上に資する
AI技術を活用した教材開発と検証

大阪大学大学院医学系研究科

特任助教 中尾 俊一郎

訪日外国人観光客の増加に伴い、救急医療における英語対応の必要性が高まっている。英語対応は翻訳機器を使用しても時間を要する場合が多く、救急医療の質に悪影響を及ぼす可能性がある。本研究では、英語を母語とする救急医療従事者から現場で使用される英語表現を収集して言語データベースを構築し、医療従事者が効率的に情報収集を行える最小限の英語表現を特定する。AI ツールを活用して同定した英語表現を効果的に学習する教材を開発し、教材の学習効果は救急現場での英語対応を再現し、従来の翻訳機器を用いた場合と比較することで検証する。医療者の英語診療技術を向上させ、英語話者にも安心安全な救急医療を提供することを目指す。

人文科学

23

アンデス地域先住民文化に
基づく哲学可能性の探究

東京大学大学院人文社会系研究科

准教授 中野 裕考

現在、哲学の分野で、大学の学問の外で受け継がれてきた知的伝統との接触から新たな活力を得ようという世界的な潮流がある。この文脈で、ラテンアメリカ先住民の文化や言語、その中でも人口規模が大きなケチュア語圏アンデス地域が注目されている。口承による文化伝達が近代的な学校教育に取って代わられるプロセスが進行しつつあるこの地で、ケチュア語を母語としながら大学で哲学を学んだ若い世代が現れてきている。本研究は、彼らとともに先住民文化の担い手たちとケチュア語で対話を行うことによって、哲学の拡張を図りたい。先住民の言語や文化が知の対象として分析されるのではなく、あくまでも知の主体として現れる方法論を開発したい。

人文科学

24

3DGSを活用した「長崎と天草
地方の潜伏キリシタン関連遺産」
のデジタルアーカイブ構築

高知県立大学総合情報研究センター

講師 根本 大志

本研究は、世界遺産「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」を対象に、ガウシアンブラッティング（Gaussian Splatting）技術を活用し、教会や島々が持つ祈りと迫害の記憶を内包した「場」の機能をデジタル上で再現することを目的とする。単なる3D記録ではなく、その空間で営まれた儀式や精神的体験を含むインタラクティブ環境を構築し、利用者が360度操作可能な3D空間を通じて信仰行為を追体験できる仕組みを考案する。このプロジェクトにより、文化財の劣化や地域活性、アクセス困難といった社会課題に応えらるとともに、文化遺産の精神的価値と歴史文化を継承する新たな保存・活用モデルを提示する。

人文科学

25

記憶の安定化をもたらす 心理的・神経的要因の研究

神戸大学大学院人文学研究科

教授 野口 泰基

現代日本が直面している大きな課題の1つは、少子高齢化である。特に加齢に伴う記憶能力・言語能力の減退は、数々の問題を引き起こしている。では言語性記憶の減退を抑え、その長期的・安定的な保持を可能にする要因は何だろうか？申請者の最近の研究から、脳波リズムの「規則性（安定性）」に鍵があることが分かってきた。具体的には、不規則な脳波リズム（心臓にたとえると「不整脈」）が、記憶の不安定化の原因であることが示唆された。本計画ではこの知見を発展させ、記憶の長期的安定をもたらす心理的・神経的要因を探る。認知的減退を防止できるような具体的方策の提案を目指す。

人文科学

26

中世ヒンドゥー・ジャワ時代貝葉 写本の自然描写と韻律構造の分析： 環境適応と集合的記憶の観点から

名古屋大学人文学研究科附属
人類文化遺産テキスト学研究センター

研究員 野澤 暁子

本研究はインドネシア・バリ島の研究者や文化伝承者との連携のもと、中世に普及した「ラジャパラ（Rajapala）物語」の自然描写と韻律構造の分析を行う。この物語は羽衣伝説と同系統の天人女房譚として、伝統的な記録媒体である貝葉写本に韻律詩形式で記されている。そこで本研究はこの物語を島嶼間移住が活発化した中世開拓時代の環境適応の記憶と捉え、現地資料館収蔵の貝葉写本の記述から当時の自然観を明らかにするとともに、韻律構造の分析と口承技法の復元に挑む。有形・無形の文化遺産から中世バリの自然と人との共生関係を立体化する実践的研究を通じ、民話や身体知をめぐる新たな価値の国際的発信を目指す。

人文科学

27

雑誌『暮しの手帖』の未公開資料、とくに 同雑誌への女性の投稿原稿ならびに女性の 生活に関する取材資料の整理と分析

京都大学人文科学研究所

教授 藤原 辰史

本事業は、1948年創刊の雑誌『暮しの手帖』の貴重な資料群をデジタル化・翻刻し、可能なものは公開し、半世紀前の歴史理解に寄与し、そのうえでそれらの整理・分析を通じて、戦後の女性たちの生活実態や心性の変遷を明らかにすることを目的にしている。本研究で扱う、暮しの手帖社所蔵の資料として以下の3点がある。1）『山のあなたの空とおく 主婦の綴り方』への応募原稿（女性の生活実感が描かれた原稿）。2）『戦時中の暮しの記録』への応募原稿（およそ1700通の戦争体験）。3）「日本人の暮し」の取材資料（プロの写真家が撮影した日本人の生活者）。以上の作業を通じて、日本女性史研究の発展に微力ながら貢献したい。

人文科学

28

平泉の参詣曼荼羅の研究

平泉参詣曼荼羅研究会

代表 堀 裕

日本の中世から近世にかけて、中国の影響を受けつつ、絵解きによって寺社への参詣を促す寺社参詣曼荼羅という絵画ジャンルが普及する。東北地方でも、平泉を描いた参詣曼荼羅3本が知られるが、西国の参詣曼荼羅の研究に比べると、基礎的な研究がなお必要である。そこで、美術史、日本史、考古学の共同研究組織を結成し、3本すべてをとりあげた上で、絵画としての評価、中近世を中心とした作成の歴史的な背景と意味、考古学的な成果との対比を行うことで、その作成時期や価値を明確にしたい。そのうえで地元の研究者を中心とする文化遺産研究の活用とモデルケースの一助となるように努める。

人文科学研究助成概要(一般)

人文科学

29

日米両国民の相手国情報収集における
ソーシャル・メディアの利用実態調査
二国間外交への影響展望

東洋大学社会学部

教授 本間 圭一

本研究は、アンケートとインタビュー調査を通じ、日米両国民が、相手国の情報を得るため、利用しているソーシャル・メディアの内容やコンテンツの中身を明らかにする。その上で、日本外務省と米商務省の広報担当者に面会し、調査結果に関する反応や今後のソーシャル・メディア戦略を聞き取る。日米両国で、ソーシャル・メディアの利用時間がテレビや新聞を上回る中、メディアを介した世論が外交を左右するボトムアップ型の世論・外交関係を念頭に、ソーシャル・メディアが日米関係に与える影響を分析する。相手国を理解する手段として、既成メディアとの違いも検証しながら、相互理解に資する有効なSNS戦略の在り方を提案する。

人文科学

30

ヒッタイト帝国成立とフリ宗教
の受容；ビュクリュカレ遺跡
フリ宗教文書の発掘と研究公益財団法人中近東文化センター附属
アナトリア考古学研究所

所長 松村 公仁

製鉄と軽戦車という技術革新によって古代オリエントに一大帝国を築いたとされるヒッタイトは、常に強大な帝国ではなく、宮廷内の陰謀、隣国との覇権争い等により疲弊し衰退したが、北シリアにミタンニ王国を建国したフリ人の強い影響を受けた紀元前15世紀末から14世紀にかけて再建を図り帝国を築き上げ、「カデシュの戦い」でエジプトのラムセスII世と争うまでに至った。本研究では弱体化したヒッタイトによる「フリ宗教の受容」が大帝国を構築する上で決定的な役割を果たしたと考え、フリ語祈禱文書が出土するビュクリュカレ遺跡発掘調査を通して、ヒッタイト王家がフリ宗教を受容し儀礼を執り行った歴史的・政治的背景を探る。

人文科学

31

カンボジアの農村部における
障害者の「生活の質」に関する
研究

愛媛大学大学院農学研究科

准教授 間々田 理彦

経済成長を続けるカンボジアは、障害児教育や障害者の社会進出にも政府として関心を寄せているものの、包括的な福祉政策は未整備である。本研究は生活実態や就業状況等の調査が進んでいないカンボジアの農村部に居住する障害者のQOLについて、教育と就労の面から明らかにし、地域性を考慮した自立支援の在り方を提言することを目的としている。SDGsの目標とも連動し、社会福祉政策形成に資する基礎データの蓄積を図る先端的かつ社会的意義の高い研究として期待される。最終的には現地の研究者や関係者と連携し、教育終了後の就労支援モデルの構築を目指す。

人文科学

32

海外援助アプローチと援助成果持続性
ーウガンダでの家庭内飲料水浄化支援
を題材としたフィールド実験ー

愛媛大学法文学部

教授 三上 了

海外援助では途上国の抱える課題解決を意図して、援助する側が先進国の優れた道具や方法を移植しようとするが、それらが持続的に活用され続けるか否かは、援助される側次第であって、援助する側がコントロールできることではない。したがって、意図された結果を産むために、援助された側が自主的に活用し続けるような援助アプローチの特定が喫緊の課題である。本研究は、これに対しとくにHands-offアプローチと情報エンパワーメントの有効性に着目し、家庭内飲料水浄化支援を例として、ウガンダのWakiso県北部において約200世帯を対象としたフィールド実験を行い、援助成果の持続性に違いが出るか、約一年間かけて追跡する。

人文科学

33

「資源化する文化遺産」と 「文化遺産化する資源」： 持続可能な文化遺産とは何か

東京大学教養学部附属教養教育高度化機構

特任准教授 宮崎 彩

文化遺産の保全と活用のための制度設計とその執行との間に存在するギャップが、文化遺産の持続的な保護の在り方に影響を与えることに着目した研究である。社会科学ではあまり扱ってこなかった文化遺産の保全メカニズムを、構成するマルチレベルのアクターや制度・政策の設計と実施プロセスに分解し、分析することで、文化遺産を持続的に保全活用するためのメカニズムを解明しようとする。人びとの暮らし（農業活動や歴史的町並みでの生活）が遺産化することで、その近郊で生活するコミュニティとの価値認識のずれが持続的な維持管理に与える影響について、日本、英国、仏国、マレーシアの事例を調査しながら、明らかにし、現地で報告を行う。

人文科学

34

中後期ビザンツ世界における 天文現象記録の研究

筑波大学図書館情報メディア系

助教 村田 光司

キリスト教が信仰された中世のビザンツ帝国圏では、科学技術の発展の傍ら、日食や月食、彗星など天文現象の記録が多数残された。これらを網羅的に調査し、信頼性や文脈を歴史学・文献学・天文学的に検討することで、当時の天文文化の特質を解明することが本研究の目標である。ビザンツの記録は西欧中世やアジアの記録に比べ包括的な調査がないため、本研究で収集した記録をカタログとして提供することも目指す。それによって、歴史的出来事の年代確定や文化史の背景の解明が進み、中世の科学や天文文化をより広い視野で評価することが可能となる。また得られた天文記録データは、過去の宇宙地球環境復元への貢献も期待できる。

人文科学

35

大学生数の増加が地域経済に 与える影響の測定： 私立大学公立化現象に着目して

筑波大学図書館情報メディア系

准教授 柳浦 猛

日本には少子化と大学過剰にもかかわらず800超の大学が存在し、その背景には大学誘致による地域経済活性化への期待がある。しかし学生数の増加が地域経済にどの程度寄与し、投入された税金に見合う効果をもたらしているのかは明らかでない。本研究は、私立大学の公立化が、学生数急増という現象を生み出した点に着目し、2000-2023年の市町村パネルデータを用いて、公立化が地域経済に与えた効果を検証する。これにより大学規模拡大のメカニズムを解明し、少子化時代における大学設置や認可制度のあり方に実証的知見を提供し、政策議論の推進に資することを目的とする。

人文科学

36

国内所蔵楔形文字粘土板文書の データベース作成

山口大学教育学部

講師 山本 孟

本研究は、国内の博物館や大学に所蔵される楔形文字粘土板文書の情報を集約し、研究者向けデータベースを構築することを目的とする。楔形文字は古代西アジアで3千年以上使用された文字で、多くが粘土板に記されている。欧米の博物館や研究機関に所蔵されているものは公開が進んでいる一方、日本では収集や購入が個別に行われ、全体像が把握されていない。本研究は所蔵経緯や内容を記録し、未整理の所蔵情報を一元化し、研究者が利用しやすい形で共有する。これにより、今後の楔形文字研究の基盤を築くとともに、文化財としての粘土板の適切な保存管理方法の提案も行う。

人文科学研究助成概要(一般)

人文科学

37

台湾の政治と選挙をめぐる 「装飾」文化の歴史： アメリカとの比較を中心に

慶應義塾大学総合政策学部

教授 渡辺 将人

本研究は、台湾の政治、選挙で用いられる政治関連の「装飾」やグッズの文化的な性質について歴史的に明らかにする。具体的には選挙宣伝について台湾が政治的な影響を受けてきたアメリカとの比較を行う。台湾の選挙では華やかな宣伝や派手な幟、屋外集会、ジープなどへの立ちのりの街宣などお祭りのような様子が著名であるが、これらの容態については断片的な記録やメディア報道にとどまってきた。申請者のアメリカ研究の専門と台湾研究の蓄積を活かし、台湾の政治文化にどの程度まで、アメリカの模倣が浸透しているか、どの程度まで何を基準に台湾が独自の文化に適応させた装飾表現を政治分野で発展させてきたか明らかにする。

第56回（2025年度）三菱財団社会福祉事業・研究助成先一覧

番号	所在地	名 称	使 途	金 額
1	岩手県	一般社団法人三陸アーカイブ減災センター 代表理事 あきやま まり 秋山 真理	各地の大学が連携して「被災写真・家族の宝物を守り、被災者・遺族の心の支援へとつなぐ」担い手育成事業	3,480,000円
2	京都府	立命館大学衣笠総合研究機構 専門研究員 あ く つ み き 阿久津 美紀	社会的養護における知る権利保障のためのデータベース構築	4,090,000円
3	神奈川県	特定非営利活動法人ABCジャパン 理事長 あ ふ そ み ち え 安富祖 美智江	外国人市民のための自立支援と居場所運営	5,240,000円
4	東京都	東京都立産業技術大学院大学 AI UXデザイン研究所 研究チーム長 い が ら し と し は る 五十嵐 俊治	高齢者の聴覚機能・認知機能に合わせ自動適応するエージェンツ側の音声基盤技術の開発	3,010,000円
5	京都府	立命館大学産業社会学部 教授 い し だ か な こ 石田 賀奈子	エビデンスに基づく乳児院における支援の質の検討ー社会福祉学と心理学の協働を通してー	1,580,000円
6	茨城県	日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク (PEPNet-Japan) 代表 い し は ら や す し 石原 保志	大学で学ぶ聴覚障害学生のニーズに寄り添う：聴覚障害学生支援コーディネータ育成プログラムの作成	3,960,000円
7	徳島県	徳島大学大学院社会産業理工学研究部 准教授 い と う し ん い ち 伊藤 伸一	特別な訓練を必要としない意思を伝達する脳波インタフェース実用化に向けたルール抽出のための基礎研究	2,280,000円
8	兵庫県	日本福祉教育・ボランティア学習学会「インクルーシブボランティア研究会」 代表 い わ も と ゆ う こ 岩本 裕子	インクルーシブボランティアサミット～集まれインクルーシブボランティア活動～ の開催	3,090,000円
9	長野県	信州大学医学部附属病院 講師 う え は ら ま さ し 上原 将志	無作為抽出地域住民コホートをを用いた脊椎姿勢異常の縦断的解析（第2期おぶせスタディ）	1,890,000円
10	兵庫県	神戸大学大学院保健学研究科 助教 う ち だ と も こ 内田 智子	脳疾患により障害を持つ親の育児をサポートするためのチェックシート作成に関する研究	1,040,000円
11	北海道	特定非営利活動法人リカバリー 理事長 お お し ま え い こ 大嶋 栄子	依存症を含む重度な困難を抱えた元受刑女性を対象とした衣食住支援のソーシャルビジネス型実証モデル	3,120,000円
12	京都府	京都大学大学院医学研究科 講師 お お た き ち ふ み 大滝 千文	産後のメンタルヘルス支援策構築のための、産後早期の褥婦の睡眠・休息実態と産褥期看護の可視化研究	1,950,000円
13	東京都	東京都福祉局・小平児童相談所虐待対策班 児童福祉司 お お は ら た か は る 大原 天青	児童虐待を行った保護者への初期介入モデルの作成ー実態分析・介入効果・映像化ー	4,950,000円
14	大阪府	特定非営利活動法人ちゅうぶ 代表理事 お の う え こ う じ 尾上 浩二	障害者の社会参加交流企画「梅田おにごっこ」の開催と大阪梅田地区のバリアフリー調査とマップ作製	1,110,000円
15	千葉県	社会福祉法人千楽 理事長 き し だ こ う じ 岸田 宏司	企業等から福祉現場への人材供給に関する調査研究事業	3,650,000円

番号	所在地	名 称	使 途	金 額
16	長野県	特定非営利活動法人親子の未来を支える会 長野支部 理事 北村 千章	須高地域における医療的ケアや障がいのある子どもと家族、支援者の相談窓口開設と包括的支援体制の構築	4,180,000円
17	東京都	武蔵野大学人間科学部 教授 小高 真美	ロールプレイ演習によるオンデマンド自殺予防ゲートキーパー研修の開発と効果検証	2,080,000円
18	北海道	日本医療大学保健医療学部 准教授 小林 英司	要介護高齢者の転倒後症候群の予防戦略開発－転倒後の起立動作の能力向上に着目して－	1,010,000円
19	兵庫県	関西学院大学社会学部 准教授 小林 智之	効果的な災害復興に向けた被災地コミュニティの評価指標開発と実用ツールの構築	3,900,000円
20	東京都	東京科学大学環境・社会理工学院 教授 西條 美紀	地域の高齢者活動コミュニティを基点にした高齢者の健康・生活情報の縦断蓄積及び医療連携可能性の検証	1,980,000円
21	茨城県	筑波技術大学保健科学部附属 東西医学統合医療センター 准教授 櫻庭 陽	医療系国家資格を有する視覚障害者のリカレント教育の実践と働く場の共生環境を推進するための研究	3,730,000円
22	宮城県	東北文化学園大学医療福祉学部 教授 佐々木 明子	小規模自治体における住民の健康とQOLの高い生活を推進する地域づくり	3,200,000円
23	東京都	国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 室長 佐藤 さやか	思春期から青年期前期を対象とした心理支援へのアクセシビリティに関する実態調査	3,200,000円
24	愛知県	運転寿命延伸プロジェクト・コンソーシアム 会長 島田 裕之	仮想空間評価システムを用いた高齢者の安全運転能力測定の妥当性検証	4,790,000円
25	東京都	上智大学大学院総合人間科学研究科 教授 新藤 こずえ	障害等の複合的困難を抱えた子ども・若者の家庭養護に関する国際比較研究	3,010,000円
26	東京都	一般社団法人Prison Arts Connections 代表理事 鈴木 悠平	刑務所アートを通じた回復共同体の形成－対話が隔々まで息づく社会に向けて	1,920,000円
27	東京都	白梅学園大学子ども学部 准教授 田中 真衣	子ども虐待予防のための保護者支援モデルの開発と地域協働デザインの構築	2,160,000円
28	千葉県	千葉大学大学院社会科学研究院 特任研究員 鄭 安君	「日本と台湾における外国人介護人材の学びの機会とキャリア構築に関する国際比較」	1,110,000円
29	富山県	特定非営利活動法人結の会 理事長 南部 圭祐	異世代間交流による創造的キャリア教育：学童保育×大学生×地域産業の協働モデル構築	3,320,000円
30	大阪府	よって小屋 代表 西垣 伸悟	精神疾患・心身症などで入院する子どもの入院中～退院後の伴走支援事業	1,400,000円

番号	所在地	名 称	使 途	金 額
31	東京都	認定特定非営利活動法人日本がん登録協議会 理事長 にしの 西野 よしかず 善一	J-CIP (Japan Cancer Information Partnership) : 当事者とともにつくる真に役立つがん情報発信	2,940,000円
32	東京都	特定非営利活動法人ブリッジフォースマイル 理事長 はやし 林 けいこ 恵子	社会的養護下にある中高生への自立支援と効果検証	3,500,000円
33	京都府	京都大学iPS細胞研究所 特命准教授 ばんの 坂野 はるひこ 晴彦	認知症に伴う興奮・易怒性・異常行動を予測するデジタルバイオマーカーの創出	3,600,000円
34	京都府	同志社大学社会学部 准教授 ひろの 廣野 しゅんすけ 俊輔	ポストコロナにおける障害者福祉施設等における面会および外出制限の実態に関する研究	2,400,000円
35	東京都	一般社団法人みとびら 代表理事 ふじもと 藤本 しょうじ 昌志	アート×ファッションを用いて若年受刑者を社会とつなぎ、立ち直りを支えるプロジェクト	3,880,000円
36	福岡県	一般社団法人福祉とデザイン 代表理事 さかい 酒井 さきほ 咲帆	養育里親委託時に用いる実親(親権者)向けコミュニケーションツールのデザイン	1,340,000円
37	東京都	特定非営利活動法人協力アカデミー 代表理事 まつばら 松原 あきら 明	相利評価を活用した福祉政策・事業の成果可視化と普及プロジェクト	5,790,000円
38	大阪府	関西医科大学リハビリテーション学部 助教 みやはら 宮原 ともこ 智子	地域在住の高次脳機能障害当事者及び家族に対する包括的実践介入方法の立案及び効果検証	1,340,000円
39	島根県	島根大学法文学部 教授 みやもと 宮本 きょうこ 恭子	ことばのケアを担う外国にルーツをもつ子どもと家族の支援方策の構築に関する研究	1,120,000円
40	東京都	特定非営利活動法人ReBit 代表理事 やくし 薬師 みか 実芳	自治体と共に進める、LGBTQも安心して暮らせるまちづくりの実態調査と実践モデル構築	3,570,000円
41	和歌山県	エンジェル会の会 会長 やまもと 山本 ともとし 智敏	アンジェルマン症候群国際会議	1,000,000円
42	東京都	特定非営利活動法人Social Change Agency 代表理事 よこやま 横山 ほくと 北斗	社会保障教育事業における若年層の社会保障制度の認知・意識調査と社会問題としての認知向上の取組み	3,330,000円
43	石川県	金沢大学保健管理センター 協力研究員 よしかわ 吉川 ひろあき 弘明	令和6年能登半島地震・水害が教育機関に及ぼした影響	760,000円
合 計			43件	120,000,000円

(所属先・職名については2025年9月11日現在)

社会福祉事業・研究助成概要

社会福祉

1

各地の大学が連携して「被災写真・家族の宝物を守り、被災者・遺族の心の支援へとつなぐ」担い手育成事業

一般社団法人三陸アーカイブ減災センター

代表理事 秋山 真理

被災した写真を元の持ち主に返す活動は、東日本大震災を契機として始まり、写真が、被災者やご遺族にとってかけがえのない宝物、ときには唯一の遺品、生きてきた証として、被災者の前を向く力になることが示されてきた。一方、雨水や泥、潮水により被災した写真は、より早い乾燥・冷凍と適切な処置をすることで画像を保護することができ、そのノウハウも蓄積されてきた。本事業では、3.11で培われた被災者対応、被災写真対応のノウハウを共有・普及し、各地の大学や他団体・個人の協力を得て、能登地方の被災者等の「心の支援」として被災した写真を被災者等の手元に残す活動を実施し、あわせて「心の支援」を行う全国の若い担い手を育成する。

社会福祉

2

社会的養護における知る権利保障のためのデータベース構築

立命館大学衣笠総合研究機構

専門研究員 阿久津 美紀

本研究では、特別養子縁組や里親家庭で養育される以前の生活拠点であった乳児院や児童養護施設などの社会的養護で子どもの記録がどのように残され、管理されていたのかという実態を調査し、当事者が記録を検索するためのデータベース化を目指すとともに現場の職員が記録管理により意欲的に取り組めるような活用方法についても提案する。

現在の社会的養護が抱える課題と今後、日本が目指している特別養子縁組や里親委託の増加の両方に該当する子どもの知る権利保障のために、社会的養護の施設で作成された記録を整備し、そうした記録の活用を提案することで、「子どもの最善の利益のため」の記録管理の整備と利用を目指す。

社会福祉

3

外国人市民のための自立支援と居場所運営

特定非営利活動法人 ABC ジャパン

理事長 安富祖 美智江

本事業は、外国人市民が安心して自立した生活を送り、地域社会の一員として共に暮らし支え合う意識を育むことを目指し、全国規模でオンライン日本語講座や自立支援セミナーを展開する。日本語学習の支援に加え、心理士による心理支援、キャリアプランナーによる生活マナー講座も実施し、多方面から生活基盤づくりを後押しする。また横浜市鶴見区では、外国につながる子どもたちのための居場所づくりを推進し、フリースクールで高校進学や日本語学習を支援、放課後自習室や小学校内放課後教室で学習環境と地域とのつながりを提供する。外国人との共生が課題となる中、外国人市民とその子どもたちが地域に根ざして主体的に暮らしていける環境整備を目指している。

社会福祉

4

高齢者の聴覚機能・認知機能に合わせ自動適応するエージェント側の音声基盤技術の開発

東京都立産業技術大学院大学 AI UX デザイン研究所

研究チーム長 五十嵐 俊治

本研究では、高齢者の聴覚機能や認知機能に応じて自動的に発話速度や音量、言語スタイルを調整するAIエージェントを開発します。自然な対話を通じて高齢者が継続的に会話を楽しめる仕組みを構築し、発話データを長期的に収集することで認知機能を正確に評価する基盤技術を確立します。さらに、適応的なコミュニケーション設計により高齢者の生活の質を向上させ、社会福祉分野における実践的な貢献を目指します。

社会福祉

5

エビデンスに基づく乳児院における
支援の質の検討－社会福祉学と
心理学の協働を通して－

立命館大学産業社会学部

教授 石田 賀奈子

社会的養護は国際的潮流としても里親委託が推進されている。日本においても施設から里親中心の社会的養護が目指され、特に乳児期は家庭での養育が重要であるとして乳児院よりも里親委託が重視されている。しかし乳児期の施設生活に関する先行研究は東欧のものが多用され、日本の乳児院が適切に評価された結果とはいえない。本研究では「科学的視点に基づいた乳児院における養育の質の評価」はどのように行われるべきかを社会福祉、発達、心理といった近接領域の協働にもとづいて、乳児院を対象とした調査を実施し、その結果から検討する。本研究の成果を通して、乳児院で育つ子どもの発達支援、家族支援の向上に貢献したい。

社会福祉

6

大学で学ぶ聴覚障害学生のニーズ
に寄り添う：聴覚障害学生支援コ
ーディネータ育成プログラムの作成

日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク
(PEPNet-Japan)

代表 石原 保志

大学で学ぶ聴覚障害学生のニーズは、近年、多様化・複雑化する傾向にある。しかし、こうしたニーズに寄り添い、的確な支援を提供できる障害学生支援コーディネータは多くはなく、聴覚障害学生のニーズが潜在化する現状にある。本事業では、こうした課題に対応するため聴覚障害学生支援に特化した専門的知識と実践的スキルを備えたコーディネータを育成する包括的プログラムを開発する。このプログラムは、オンライン学習コンテンツによる理論的知識の習得と、実践的な対面トレーニングを組み合わせるもので、個々の聴覚障害学生のニーズや特性を適切にアセスメントし、場面に応じて最も適切な支援を提供できる力の育成を目指す。

社会福祉

7

特別な訓練を必要としない意思を
伝達する脳波インタフェース実用化に
向けたルール抽出のための基礎研究

徳島大学大学院社会産業理工学研究部

准教授 伊藤 伸一

特別な訓練を必要としないヒトの思考をそのまま検出する人工知能（機械学習モデル）を用いたブレイン・コンピュータ・インタフェース（BCI）の実用化を目指し、より少ない学習データにより質問に対する返答（Yes・No）を識別するBCIの構築を試みる。人工知能を使用することで、質問に対する返答を99%以上の精度をもって識別するBCIを構築するに至った。しかしながら、モデルを構築するにあたり10,000程度以上のデータが必要であった。訓練は不要であるが、必要とされるデータセットがあまりに大きいことが実用化の壁となっている。そこで、モデルの最小化ならびにデータセットの最小化のための限界点を探ることを目指す。

社会福祉

8

インクルーシブボランティア
サミット～集まれインクルーシブ
ボランティア活動～ の開催

日本福祉教育・ボランティア学習学会
「インクルーシブボランティア研究会」

代表 岩本 裕子

つながりの希薄化・分断化、課題の多様化・複雑化が進む我が国において、地域共生社会の構築は重要な課題とされ、属性や立場を超え、誰もが社会に参加し、助け合うことが求められている。なかでも基盤となる場のひとつであるボランティア活動では、精神疾患や発達障害など人との関係に困難を抱えそのままでは活動が難しい人達への支援は、大きな課題と言える。

本事業は、このような人々の活動を実現し、誰もが参加できるインクルーシブなボランティア活動を目指して、全国各地の実践者が一堂に会し学びあう、研究集会、実践交流会である。これにより、事例収集・啓発・実践への適用・ネットワークの構築につなげることが期待できる。

社会福祉事業・研究助成概要

社会福祉

9

無作為抽出地域住民コホートを 用いた脊椎姿勢異常の縦断的解 析（第2期おぶせスタディ）

信州大学医学部附属病院

講師 上原 将志

人口の高齢化に伴って健康寿命の延伸が課題とされるなかで、本研究は、運動器の加齢変化、特に脊椎姿勢異常が歩行や運動能力に与える影響に注目したものである。本研究の特徴としては、日本人特有の生活様式や人種的特性を反映した病態評価や姿勢変化が運動機能に与える影響を明らかにすることにある。具体的には、高齢期に発生する腰背部痛や歩行・運動機能の低下、呼吸器や消化器の症状によるQOL低下という課題に対して、日本人のための脊椎姿勢指標の導出と矯正目標の確立、さらに運動機能が最良となる予防対策の開発を目指す。さらに、得られたデータに基づいた、検診と予防介入を通じて運動機能向上と健康寿命の延伸を目指す。

社会福祉

10

脳疾患により障害を持つ親の育児を サポートするためのチェックシート 作成に関する研究

神戸大学大学院保健学研究科

助教 内田 智子

周産期に脳血管障害を発症することは決して少なくなく、障害を持ちながら育児に取り組む親の数も多い。しかしながら、現状でこのようなケースへの支援は十分とは言えず、当事者が独自に取り組まざるを得ない状況となっている。本研究はこのようなニーズにこたえようとするもので研究期間にチェックシートの作成を目指し実務的な成果物をあげたい。

こうしたチェックシートが確立することは、育児に関わる保健、医療、福祉それぞれの場面に對し共通の視点を提供することによって当事者に対して切れ目のない支援を促進することにつながりたいと考える。

社会福祉

11

依存症を含む重度な困難を抱えた 元受刑女性を対象とした衣食住支援 のソーシャルビジネス型実証モデル

特定非営利活動法人リカバリー

理事長 大嶋 栄子

薬物使用により、逮捕され受刑生活を経て出所した元受刑女性の多くが集まる東京において、安全な住居の提供と安心してできる相談支援体制の構築を目的とした事業である。元受刑女性は、薬物依存症のみならず精神疾患、DV被害、貧困など複層的な困難を抱えており、そのリカバリーのためには多くのケアや支援が必要となってくる。しかしながら、元受刑女性たちの多くが既存の精神障害者支援の枠組みの福祉支援を受け入れ難いという特徴もある。したがって、本事業では新しい事業モデルを構築することにより、元受刑女性たちが自分および他者への信頼を回復し、社会の中で安心して生きられるリカバリーのプロセスが提示されることを期待する。

社会福祉

12

産後のメンタルヘルス支援策構築の ための、産後早期の褥婦の睡眠・ 休息実態と産褥期看護の可視化研究

京都大学大学院医学研究科

講師 大滝 千文

出産後の女性の約17.0%が産後うつを経験しているとされ、その予防は褥婦の生活の質、夫婦関係・母子関係、自殺予防など様々な観点から対策が求められている喫緊の課題である。本研究は、産後の睡眠障害と産後うつとの関係が指摘される中で、我が国では諸外国に比して産後入院期間が長いにも関わらず、十分な研究がなされていないことに着目し、産褥早期の睡眠・休息と褥婦の心身の健康状態との関係を調査・分析する。産後入院中の褥婦の睡眠・休息の実態を明らかにし、産後うつとの関連を検討し、産後うつ予防のために褥婦に提供されるケアやサポートについて具体的な提案を行う。

社会福祉

13

児童虐待を行った保護者への 初期介入モデルの作成 －実態分析・介入効果・映像化－

東京都福祉局・小平児童相談所虐待対策班

児童福祉司 大原 天青

年々増加する児童虐待は子どもの成長発達に重大な影響を及ぼす社会的問題である。最前線に対応を担う児童相談所では、実践の検証・効果的な介入方法の開発・虐待親への支援モデルが未確立等の理由から苦悩している実態がある。申請者らは、児童相談所で勤務する職員と研究者らでチームを組み、現場の最前線の課題に取り組む。[研究1]では、児童相談所の既存の児童虐待ケースへの介入と効果を実証的に明らかにする。[研究2]では、児童虐待に対する初期介入による改善効果を実証的に明らかにする。[研究3]では対応方法に関する映像化を行う。これらの取り組みによって、児童虐待を行った保護者への初期対応モデルの作成を試みる。

社会福祉

14

障害者の社会参加交流企画「梅田 おにごっこ」の開催と大阪梅田地区 のバリアフリー調査とマップ作製

特定非営利活動法人ちゅうぶ

代表理事 尾上 浩二

ソーシャルインクルージョンの実現をめざす「おにごっこ」という街歩きイベントは、障害当事者が中心となって企画し、今年で11回目を迎える。バリアフリーマップを基に大阪の中心街をスタンプラリー方式で探索する。障害者はもちろん、市民も子どもも参加し、500人規模に広がってきた。11回の内7回は大阪でも人情に厚い土地柄とされるなんばで実施。なんばで耕してきた文化をさらに広めべく、今回は梅田に舞台を移す。新たなバリアフリーマップ作成や安全確保対策に取り組む。行政や社協等が中心となり、公費で障害者との交流イベントを行う例は多いが、障害者自身が発信者となり、障害の有無を越えた交流を企画する例は貴重である。

社会福祉

15

企業等から福祉現場への人材 供給に関する調査研究事業

社会福祉法人千楽

理事長 岸田 宏司

福祉現場の深刻な人材不足を解消し、ガバナンスや支援力の向上を目指すと共に、企業等で働く中高年層に新たなキャリア形成や生きがい創出を支援することを目的とする。まず、人材不足の影響について、全国の社会福祉法人等にアンケート調査を行う。転職者を受け入れた法人には、実際の働き方等ヒアリングを行い、企業・転職希望者向け、法人向けの説明冊子や動画を作成し、ホームページやsns等での情報提供を行う。全国各地で福祉関係者や産業雇用安定センター等を対象にフォーラムを開催する。また、企業で働く人や人事担当者向けのセミナーで冊子を配布、福祉の仕事について説明し、希望者には福祉現場の見学の機会を設ける。

社会福祉

16

須高地域における医療的ケアや 障がいのある子どもと家族、支援者の 相談窓口開設と包括的支援体制の構築

特定非営利活動法人親子の未来を支える会長野支部

理事 北村 千章

本事業は、医療的ケア児や慢性疾患を抱える子どもとその家族を、出生から成人期まで包括的に支える体制を須高地域に構築することを目的とする。現在、相談窓口の不明確さ、地域資源をつなぐコーディネーターの不在、成人以降を見据えた支援体制の不足が課題となっている。これを解決するために、①子どもの成長過程における支援ニーズの把握と相談窓口の開設、②ライフステージに応じたマネジメントが可能なコーディネーターの配置と人材育成、③出生から成人移行まで切れ目なく支える包括的支援体制の整備を進める。行政・医療・教育の専門職が連携し、地域で継続的に支援できる仕組みを実現することを目指す。

社会福祉事業・研究助成概要

社会福祉

17

ロールプレイ演習による オンデマンド自殺予防ゲート キーパー研修の開発と効果検証

武蔵野大学人間科学部

教授 小高 真美

自殺は日本を含む世界共通の深刻な公衆衛生課題である。わが国では自殺者数は減少傾向にあるものの、国際的には依然として高水準にある。世界保健機関（WHO）も推奨するゲートキーパー養成は、日本の自殺総合対策大綱にも明記されており、研修の内容や方法を工夫し、より多くの人が継続的に受講できる体制が求められている。中でも対面で行うロールプレイ演習は、スキル習得に有効とされる一方、苦手意識や羞恥心、時間的制約などが課題となり、十分に実施できない場合がある。そこで本研究では、オンラインで気軽に実施できるロールプレイ教材を開発し、研修参加者のスキル向上への効果と、実践への適用可能性を検証することを目的とする。

社会福祉

18

要介護高齢者の転倒後症候群の 予防戦略開発－転倒後の起立 動作の能力向上に着目して－

日本医科大学保健医療学部

准教授 小林 英司

転倒は高齢者にとって依然大きな課題であり、その予防に多くの試みが進んでいる。その中で本研究は、転倒後に自力で起き上がれないことへの不安から自己効力感が低下し、活動性が低下する事例が多いことに着目し、床からの起立動作能力を高めることで転倒に伴う自己効力感と活動性低下が抑止されると仮定する。研究期間ではコホート調査により、起立動作能力の違いによって転倒自己効力感の低下が抑制されるかを検証する。転倒をゼロにすることは難しく、実際には多くの者が転倒不安から外出を控え、体力低下を招くという現状を打開するため、本研究をきっかけに床からの起立能力の評価が地域での介護予防対策に新たな役割をなすことを期待する。

社会福祉

19

効果的な災害復興に向けた 被災地コミュニティの評価指標 開発と実用ツールの構築

関西学院大学社会学部

准教授 小林 智之

災害によって被災した自治体はその後絶えず様々な問題に対処することとなる。そのため、復興は、核心的な問題が見えず、明確な終わりを定めることも難しく、対応する自治体職員の疲弊を招く。本研究では、累積的で連鎖的に変化する復興状況をリアルタイムに可視化することで、現在、そして今後の災害時の復興支援につなげることを目的とする。具体的には、研究1で福島県や石川県の被災地自治体へのインタビューやアンケート調査を通して、復興業務で参考にしたいコミュニティ評価指標を抽出し、研究2で他の災害被災地への一般化可能性を検討する。最後に、研究3でレーダーチャートなどを用いて復興状況を可視化するツールを開発する。

社会福祉

20

地域の高齢者活動コミュニティを 基点にした高齢者の健康・生活情報の 縦断蓄積及び医療連携可能性の検証

東京科学大学環境・社会理工学院

教授 西條 美紀

本研究の目的は、地域コミュニティで収集されるデータを活用した在宅高齢者の見守りネットワークの仕組みをデザインし実証することである。中野区と石巻市において地域コミュニティの活動に参加する高齢者の出欠記録、体調に関する質問への回答、活動主催者の気づきを縦断的に記録し、包括支援センター等と共有する独自のアプリを開発し、本アプリを活動主催者が用いて、高齢者に異変がある際に包括支援センターに繋ぎ、専門職が連携して早期対応するためのネットワークを構築する。

本研究により、生活・健康状態が悪化した高齢者の早期介入件数が増加し、高齢者の健康寿命延伸、QOL 向上、医療費介護費の支出削減のインパクトが期待される。

社会福祉

21

医療系国家資格を有する視覚障害者のリカレント教育の実践と働く場の共生環境を推進するための研究

筑波技術大学保健科学部附属東西医学統合医療センター
准教授 櫻庭 陽

医療系国家資格である鍼灸あん摩マッサージ師及び理学療法士は、歴史的に視覚障害者の就労支援の役割を担っている。彼らは働きながら、医療職として知識や技術のブラッシュアップを求められるが、十分な視覚障害補償下でそれを実践できる環境は少ない。これらの課題解決のため、5年前よりリカレント教育を実施するなかで、彼らの雇用拡大やキャリアチェンジ・アップには、企業や協働する従業員等の理解および環境整備が必要だと強く感じた。本研究では、企業や従業員の視覚障害者雇用の考えを把握し、その結果をリカレント教育でフィードバックするとともに、相互理解を促すイベントを開催することで、視覚障害者との共生社会拡大を目指す。

社会福祉

22

小規模自治体における住民の健康とQOLの高い生活を推進する地域づくり

東北文化学園大学医療福祉学部
教授 佐々木 明子

高齢化・過疎化が進む小規模自治体では、専門職者や行政職員が住民と協働で地域づくりを推進する必要がある。本研究では、小規模自治体における自立維持可能性となる要因を、自治体の特性と健康と生活の面から捉え、島しょ部・山間部・沿岸部・農村部・近郊都市などの小規模自治体における住民の健康とQOLの高い生活を推進する地域づくりと保健師が果たす役割を明らかにする。特に、住民の健康と生活、社会資源、健康への態度・行動や保健福祉事業の種類・実践と住民のニーズ等を多面的にアセスメントすることが特徴である。研究成果は小規模自治体の特性を尊重し、住民の健康とQOLの高い生活を推進する地域づくりに貢献する指針とする。

社会福祉

23

思春期から青年期前期を対象とした心理支援へのアクセシビリティに関する実態調査

国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所
室長 佐藤 さやか

本研究は、若者世代のメンタルヘルス不調に対する支援システム構築の端緒として、Web上の多様な情報発信を念頭に心理的困難について誰に相談したいと考えているかを明らかにする。思春期から青年期前期にある人を対象にグループインタビューで相談先や理由を聴取しWeb調査の調査項目や選択肢に反映する。さらにグループディスカッションでWeb調査結果を踏まえて思春期から青年期前期にある人が望むメンタルヘルスケアシステムのあり方を検討し、当事者参画の観点から真に頼られる支援システムについて探究する。得られた結果について成果報告Webサイトを通じて情報発信を行い、今後の制度設計に資する基礎資料とする。

社会福祉

24

仮想空間評価システムを用いた高齢者の安全運転能力測定の妥当性検証

運転寿命延伸プロジェクト・コンソーシアム
会長 島田 裕之

高齢者の運転技能を簡便に評価するため、仮想空間運転シミュレーション（virtual reality driving simulation：VRDS）を開発してきた。VRDSは、自動車運転中に必要な目視確認等を簡便に評価するが、実車検査で評価した運転技能の関連性については検証が不十分である。本研究は、VRDSと実車検査の関連性を検証およびVRDS評価による運転技能の推定モデル構築を目的とする。本研究により、VRDSが実車検査の代替指標として利用できることが明らかになれば、高齢者に対して大規模な運転技能評価に関するスクリーニングが可能となり、高齢者の交通事故問題の解決に寄与する可能性がある。

社会福祉事業・研究助成概要

社会福祉

25

障害等の複合的困難を抱えた子ども・若者の家庭養護に関する国際比較研究

上智大学大学院総合人間科学研究科

教授 新藤 こずえ

日本の社会的養護は、施設養護から里親等による家庭養護への政策転換がなされている。しかし、障害や外国ルーツなど複合的困難を抱えたマイノリティ性のある子どもが家庭養護を利用しにくいという課題がある。日本では家庭養護で暮らす子どもは2割程度にとどまっているが、オーストラリアでは9割を超えている。本研究では、マイノリティ性のある子どもへの支援の実態を明らかにするため、日本においては専門里親や里親フォスタリング機関等への調査、オーストラリアでは里親サポートや支援者支援の調査を行う。そのうえで、子どもの多様性を尊重した個別のかつ専門性の高い支援を実現するための方策を検討する。

社会福祉

26

刑務所アートを通じた回復共同体の形成ー対話が隔々まで息づく社会に向けて

一般社団法人 Prison Arts Connections

代表理事 鈴木 悠平

刑事司法分野における芸術活動は、犯罪・非行からの離脱や更生、再犯防止への効果や影響が注目されている。また、受刑者たちによる芸術活動は、受刑者個々人の変容だけでなく、外からは見えにくい刑務所内の環境やそこで過ごす受刑者たちの経験を知る手がかりとなったり、当事者の対話の機会の創出につながったりと、刑務所外の社会にも多様な影響をもたらし得る。

本事業は、アートを通して刑務所内外をつなぐ「刑務所アート展」の企画・運営と、同分野に関する社会調査を実施し、加害/被害、当事者/非当事者といった二分法を越え、誰かの回復にみんなで向き合おうとする回復共同体を形成することを目指すものである。

社会福祉

27

子ども虐待予防のための保護者支援モデルの開発と地域協働デザインの構築

白梅学園大学子ども学部

准教授 田中 真衣

近年、子ども虐待は社会課題であり続けており、子育て家族を支援するための社会的整備が急務である。子ども虐待を予防・防止するためには、保護者支援の確立と、切れ目のない地域づくりが必要である。本研究では、保育所や子育て広場、児童発達支援事業所等の保育者が、子ども虐待予防のための『SomLicペアレント・トレーニング』ファシリテーター養成講座と、『ペアトレCaf?』への参加を通して、保護者支援に対する意識と、他機関との連携状況に生じる変化に関するデータを収集する。さらに、保健、子育て支援、障害児支援、虐待防止等既存制度を含めて、協働を促進する保護者支援体制構築モデルを提示することを目指す。

社会福祉

28

「日本と台湾における外国人介護人材の学びの機会とキャリア構築に関する国際比較」

千葉大学大学院社会科学研究院

特任研究員 鄭 安君

日本と台湾はともに多くの東南アジア人介護労働者を受け入れており、長期就労や永住の可能性も開かれている。対人サービスである介護現場はスキルアップや学びが重要であるうえ、外国人が安心・安全に働く・暮らすには、言語や関連技術の習得だけでなく、社会参加や将来展望に繋ぐ広い意味の学びの機会と課題を見つめる必要がある。本研究は、半構造化インタビューを中心に労働者や雇用者、研修関係者など多様な視点から、日本と台湾における外国人介護労働者の学びの機会やキャリア構築への展開についての課題を比較しながら考察し、外国人の参考事例を通して、日本の介護分野全体の人材育成と人材確保についての問題の解決に繋げたい。

社会福祉

29

異世代間交流による創造的 キャリア教育：学童保育×大学生 ×地域産業の協働モデル構築

特定非営利活動法人結の会

理事長 南部 圭祐

本事業は、学童保育を単なる居場所にとどめず、子どもたちの健全育成と将来の自立を支える場へと発展させることを目的とする。小学生と工学系大学生が少人数グループで協働し、地域企業見学や課題解決型学習（PBL）に取り組むことで、児童には創造性や社会性、将来への展望を、大学生には教育的成長や社会人基礎力を育む機会を提供する。さらに、地域企業や団体の参画により「地域全体で子どもを育てる」仕組みを構築し、子育て支援の新たなモデルを提示することを目指す。このモデルは他地域への展開も可能であり、放課後児童支援の質的向上や地域福祉の発展に寄与する実践的な事業となる。

社会福祉

30

精神疾患・心身症などで入院 する子どもの入院中～退院後の 伴走支援事業

よって小屋

代表 西垣 伸悟

近年、子どものメンタルヘルスの課題が深刻化し、精神科病棟への入院者数は増加している。精神科病棟に入院する子どもは不登校・被虐待などの背景をもつケースも多く、入院によって症状が改善しても、生活・社会環境の調整までは難しく、退院しても再入院することが多いとされている。

そのため本事業では、精神科病棟に入院中の子どもたちとレクリエーションや学習支援を通して信頼関係を築き、退院後の地域生活でも子どもが気軽に立ち寄れる場所を設けることで孤立を防ぐ活動を行う。そして、活動を通して精神科病棟を退院した子どもの孤立を防ぐ伴走支援に関する事例とノウハウを構築していく。

社会福祉

31

J-CIP (Japan Cancer Information Partnership)：当事者とともに つくる真に役立つがん情報発信

認定特定非営利活動法人日本がん登録協議会

理事長 西野 善一

認定特定非営利活動法人日本がん登録協議会（JACR）は、がん登録情報の利活用を通じ、患者・家族・医療従事者・行政担当者に対し科学的根拠に基づく情報提供を行い、がん対策の推進を担う。本申請事業J-CIP（Japan Cancer Information Partnership）は、がん予防・検診から治療・療養までの多様なフェーズに応じた情報ニーズを体系的に把握し、がん登録データに基づいた情報基盤を整備する。さらにWeb公開や地域特性に即した発信体制を構築することで、関係者の意思決定を支援し、エビデンスに基づく政策立案と患者中心のがん医療の実現に資する。

社会福祉

32

社会的養護下にある中高生への 自立支援と効果検証

特定非営利活動法人ブリッジフォースマイル

理事長 林 恵子

家庭環境に恵まれず児童養護施設や里親家庭などいわゆる社会的養護の下で育った子どもたちは、18歳になると自立を余儀なくされる。自立が円滑に行われるような支援が必要であり、その支援は都道府県の義務とする児童福祉法の改正が行われたが、必要な支援が確実に行われるという状況には至っていない。

本事業は、対象となる中高生に対する仕事体験や一人暮らし準備セミナー、生活必需品のプレゼント仲介など、特に行政の手が届いていない領域の支援を行い、これらの効果計測のための調査を実施する。入所中支援（インケア）から退所後支援（アフターケア）まで一貫した支援の必要性を明らかにし、行政に制度の拡充を働き掛けたい。

社会福祉事業・研究助成概要

社会福祉

33

認知症に伴う興奮・易怒性・異常行動を予測するデジタルバイオマーカーの創出

京都大学 iPS 細胞研究所

特命准教授 坂野 晴彦

認知症に対しては近年治療薬の開発が進み注目が集まっていると同時に、依然として本人だけでなく周囲の介助者にとっても心理的負担が大きい課題となっている。特に易怒性などの行動心理症状は問題になることが多い。

本研究の目的は、認知症に伴う興奮・易怒性・異常行動を予測するデジタルバイオマーカーを見出すことである。具体的には高齢者を対象に、ウェアラブル活動量計を用い持続的計測を行う。得られたデータを既に取得済みの遺伝性アルツハイマー病の結果と比較し、確度の高いデジタルバイオマーカーを抽出、同定する。

本研究の成果は、易怒性などの早期発見、早期対応につながり、介護者負担を減らす可能性を秘めていると考えられる。

社会福祉

34

ポストコロナにおける障害者福祉施設等における面会および外出制限の実態に関する研究

同志社大学社会学部

准教授 廣野 俊輔

新型コロナウイルス感染症が厚生労働省の定める感染症分類で5類に移行され、日本の社会全体としてコロナによる種々の制限が緩和されてきた。その一方で、障害者の入所施設等においては、コロナによって導入された面会・外出制限は、現在も5類移行以前と同じか、少なくともコロナ以前とは比べものにならないほど厳しいまま維持される傾向にある。そのため入所もしくは入院している障害者の基本的な権利が著しく制限されている。

本研究では障害当事者が中心となり現状を調査し改善するための方策を考察する。当事者が調査に参加することで、権利が制限されている障害者が自分の困難について余すところなく語ることができると考えている。

社会福祉

35

アート×ファッションを用いて若年受刑者を社会とつなぎ、立ち直りを支えるプロジェクト

一般社団法人みとびら

代表理事 藤本 昌志

社会的に見過ごされがちな若年女子受刑者を取り巻く課題に着目し、アートとファッションの力を活用して、教育と刑務作業の両面から社会復帰を支援する新たなモデルの構築と持続的運営を目指す事業である。

具体的にはアパレル企業、大学、法務省矯正局と連携し、「刑務所の中のファッションブランド」を立ち上げ、受刑者がSDGs素材を用いた布製品の企画、製造に取り組みながら誇りを持って働ける環境を、矯正施設内に創出する。さらに縫製指導や使い手からのフィードバックを通じて、出所後の生活や就労に必要な技術や社会性を育む。加えて活動を可視化し製品を介して接点を広げることで、受刑者の更生と福祉への社会的理解の深化を図る。

社会福祉

36

養育里親委託時に用いる実親(親権者)向けコミュニケーションツールのデザイン

一般社団法人福祉とデザイン

代表理事 酒井 咲帆

全国で里親養育の推進が目指される中、委託が進まない大きな要因の一つに、親権者(主に実親)が同意をしない、あるいは同意に抵抗を感じているという課題がある。昨年度の当団体の調査により、児童相談所を含むフォスティング機関が親権者とのやり取りの中で直面する具体的な困難も明らかになった。そこで本事業では、里親委託時に担当者が活用できるコミュニケーションツールを企画・デザインし、関係機関に配布する。子どもと親権者の権利、そして子どものパーマネンシー保障を踏まえて作成することで、同意をめぐる適切な視点を提供し、子どもの最善の利益に基づく措置先の判断や、親権者との共同養育への貢献を目指す。

社会福祉

37

相利評価を活用した福祉政策・事業の成果可視化と普及プロジェクト

特定非営利活動法人協力アカデミー

代表理事 松原 明

近年、福祉分野をはじめとする社会課題の解決のためには多様な主体が的確かつ効率的に連携して取り組むことが必要となっている。一方、こうした事業において、運営手法が十分に開発されているとは言えない状況がある。

これを受け、当法人は、多主体連携事業を効果的に開発運営するために、全ての主体の相利の実現度を一覧性をもって整理し共有することのできる「相利評価」という手法を開発した。本事業は、この手法を3つの異なる型の事業に適用し、PDCAサイクルでの有効性を検証し、活用マニュアルを作成・普及していく。それにより、今後、特に福祉分野において増大が見込まれる多主体連携事業の効果的かつ効率的な実施に貢献したい。

社会福祉

38

地域在住の高次脳機能障害当事者及び家族に対する包括的実践介入方法の立案及び効果検証

関西医科大学リハビリテーション学部

助教 宮原 智子

高次脳機能障害は、頭部外傷や脳卒中後に生じる後天性の認知機能低下である。後遺症の大部分は不可逆的であり、当事者及び家族の生活を一変させるが、見えない障害ゆえ周囲の理解が得られにくく、家族の負担増大も課題である。しかし本邦における現存の社会制度支援は当事者に対する対価で成立し、家族は具体的支援対象にならない。

本研究は、個別性の高い高次脳機能障害を神経心理的に評価した上で家族を含めた包括的な介入方法の立案を行う。個々の家族に対して知識の向上、本人への接し方等のアドバイスを継続的に実施することにより、家族の支援者としての能力が促進され、成果として家族システムの好循環を可能にする、と考える。

社会福祉

39

ことばのケアを担う外国にルーツをもつ子どもと家族の支援方策の構築に関する研究

島根大学法文学部

教授 宮本 恭子

本研究は、日本で暮らす外国人家庭が増加するなかで、その家庭のなかで「ことばのケア」を担う子ども（ことばのヤングケアラー）とその家族のニーズに応える支援のあり方を検討することが目的である。本研究では、子どもが親の「ことばのケア」を担うことで生じる教育面での遅れや生活面での負の影響があり、そのような問題への対応としていかなる支援が必要なのかを、実態調査やニーズ調査の結果を通して検討するものである。地域福祉推進のためには、人々の多様性に関する住民の理解が欠かせない。本研究は、外国人を含む様々な人々が、社会の一員あるいはその地域の一員として生きていける包摂的な社会の実現につながる研究として期待できる。

社会福祉

40

自治体と共に進める、LGBTQも安心して暮らせるまちづくりの実態調査と実践モデル構築

特定非営利活動法人 ReBit

代表理事 薬師 実芳

本事業は、全国各地でLGBTQも安心して暮らせるまちづくりを目指し、自治体と協働して実態調査・施策立案・好事例の創出・普及を行う。LGBTQは学校・職場・地域等で困難が多く、生活困窮・精神障害・希死念慮等深刻なリスクに直面。一方、行政や福祉サービス利用時に8割が困難を経験し、安全網が機能していない。2023年にLGBT理解増進法が制定され、自治体の取り組みが努力義務化されたが、未だ過渡期にある。本事業では、地方地域の実態調査や、課題解決に向けた施策の研修や伴走を通じ、自治体がLGBTQ施策を進める際のモデルを提示。さらに、創出した好事例を全国に共有し、法や制度への反映を目指す。

社会福祉事業・研究助成概要

社会福祉

41

アンジェルマン症候群国際会議

エンジェルの会

会長 山本 智敏

アンジェルマン症候群は、小児慢性特定疾病の一つで、日本の患者数は約3千人と推定されている。このような稀少難病の治療法の開発においては、患者、研究者とも数が少ないため国際的なネットワークが大変重要である。

エンジェルの会は、家族会として情報交換・交流、専門家による勉強会等を行っており、また、アンジェルマン症候群の研究の推進を目指す国際組織 Angelman Syndrome Alliance の一員です。今回同Allianceの2026年第9回国際会議を京都にて、国内外の患者家族、研究者などのべ300名以上の参加のもと開催予定。患者家族、研究者の国際交流とともに、研究を推進いたします。

社会福祉

42

社会保障教育事業における若年層の社会保障制度の認知・意識調査と社会問題としての認知向上の取り組み

特定非営利活動法人 Social Change Agency

代表理事 横山 北斗

少子高齢化や社会経済の変化に伴い、社会保障制度が果たすべき機能は一層重要となっている。その安定的かつ持続可能な運用のためには、国民の理解と信頼の形成が不可欠である。本研究事業では、弊法人が開発した社会保障制度を学ぶロールプレイングゲームを用い、中学・高校で出前授業を行い、社会保障に関する認知や意識の形成を調査・分析する。さらに社会保障教育フォーラムを開催し、成果を広く普及する。長期的には義務教育での導入を視野に、若年層の正しい知識と信頼形成を促進することを目的とする。

社会福祉

43

令和6年能登半島地震・水害が教育機関に及ぼした影響

金沢大学保健管理センター

協力研究員 吉川 弘明

災害時のメンタルヘルスとケアの重要性について、近年理解が浸透し、行政による支援体制、全国からの応援体制等がとられるようになってきた。児童生徒に対しては、学校という場でスクールカウンセラーが主な担い手となっている。

能登においては、地震と水害という連続した災害を経験し、学習継続のために中学生が集団避難する例もあった。

本事業では、学校を舞台とするこころのケアに関して、どのような活動が行われ、受け入れ側がそれをどう受け止めたかについて、肯定的な面だけではなく失敗や教訓とすべきことも含めて調査・整理し、今後の対策に生かすことを目的とする。被災した地元の専門家ならではの調査研究である。

第7回（2025年度）三菱財団文化財保存修復事業助成先一覧

番号	所在地	名 称	使 途	金 額
1	山梨県	宗教法人永泰寺 代表役員 あおやぎ まさあき 青柳 雅明	木造 釈迦如来立像修復事業	3,000,000円
2	島根県	隠岐の島町 町長 いけだ こうせい 池田 高世偉	大光寺伝来僧形坐像保存修復事業	3,270,000円
3	和歌山県	橋本市谷奥深区 区長 うえだ ひとみ 上田 ひと美	和歌山県指定文化財木造大日如来坐像保存修理事業	3,340,000円
4	京都府	宗教法人円頓寺 代表役員 うちやま しんかく 内山 真覚	円頓寺惣門再興勸進状保存修理事業	460,000円
5	茨城県	茨城県立歴史館 館長 おののけ しゅん 小野寺 俊	玉里舟塚古墳出土埴輪修復事業	1,830,000円
6	奈良県	春日大社 宮司 かさんのいん ひろただ 花山院 弘匡	春日若宮御祭礼絵巻物（全3巻）保存修理事業	2,500,000円
7	新潟県	宗教法人龍泉院 代表役員 かみや まさとし 神谷 麻俊	木造阿弥陀如来坐像の修復	1,190,000円
8	山口県	公益財団法人吉川報効会吉川史料館 理事長 きつかわ しげもと 吉川 重幹	湖亭春望図修理事業	850,000円
9	兵庫県	神戸女子大学古典芸能研究センター センター長 きのした ふみたか 樹下 文隆	神戸女子大学古典芸能研究センター所蔵「志水文庫 仏教・神道版画コレクション」保存修復事業	4,210,000円
10	東京都	学校法人國學院大學 理事長 さなぎ しょうぞう 佐柳 正三	國學院大學博物館所蔵 壺形埴輪（奈良県桜井市外山茶臼山古墳出土）の修理	1,630,000円
11	石川県	真宗大谷派磯越山法融寺 代表役員 しのづか えいゆう 篠塚 榮祐	能登町指定文化財「白衣観音図」（法融寺蔵）保存修理事業	800,000円
12	新潟県	宗教法人関興寺 代表役員 すぎおか みょうぜん 杉岡 明全	木造阿弥陀如来坐像修復事業	1,000,000円
13	大分県	報恩寺 住職 たけなか せんゆう 竹中 仙雄	木造阿弥陀三尊像保存修理事業	4,170,000円
14	愛知県	公益財団法人徳川黎明会徳川美術館 館長 とくがわ よしたか 徳川 義崇	楼閣人物図螺鈿印籠・盆保存修復事業	1,190,000円
15	栃木県	二荒山神社 宮司 なかまろ てるみ 中麿 輝美	大正天皇御物『武蔵野図蒔絵文台・黒漆水割文料紙箱・黒漆桜花文硯箱』	1,220,000円
16	奈良県	学校法人天理大学 理事長 にしうら ただかず 西浦 忠一	天理参考館所蔵 乾漆造伎楽面醉胡従修復事業	2,990,000円
17	奈良県	ひろはし のぶひろ 廣橋 延博	奈良県指定文化財広橋家文書（渡辺惣官家文書）公開修復事業	2,210,000円

番号	所在地	名 称	使 途	金 額
18	広島県	宗教法人持光寺 代表役員 まつおか しょうれい 松岡 昭禮	木造阿弥陀如来立像保存修理事業	2,500,000円
19	京都府	宗教法人旦棕神社 代表役員 みず た きよふみ 水田 清文	旦棕神社木造大將軍神像保存 修理事業	2,970,000円
20	大阪府	宗教法人葛井寺 住職 もり かいりゅう 森 快隆	大阪府指定文化財葛井寺参詣 曼荼羅修理事業	2,000,000円
21	福島県	洞秀山泰享院長福寺 住職 や ない だいきゅう 矢内 大丘	木造虚空蔵菩薩坐像及び 二天立像修繕事業	1,430,000円
22	東京都	東京大学大学院工学系研究科建築学専攻 専攻長 い や ま じゅん 伊山 潤	工部大学校卒業制作図面保存 修復事業	3,240,000円
合 計			22 件	48,000,000円

(所属先・職名については2025年9月11日現在)

文化財保存修復事業助成概要

文化財

1

木造 釈迦如来立像修復事業

宗教法人永泰寺

代表役員 青柳 雅明

永泰寺の釈迦如来像は、釈迦堂に安置される本尊である。網目状の螺髪、体に密着した着衣、同心円文状の衣文といった特徴は、東大寺の僧・斎然が985年に中国から招来した京都・清凉寺の釈迦如来像を模刻したものである。本像は、流麗な衣文を繊細に重ね、その稜線に切金文様が良く残るなど、地方に伝わる清凉寺式釈迦如来像の優品として貴重であり、山梨県の文化財に指定されている。

しかし、経年劣化により、各所の矧ぎ目が緩み、塵芥が付着するなど、汚れが目立ち保存状態が悪化しているため、早急な修理が必要である。この貴重な文化財を適切に修理し、保存管理するとともに、貴重な文化財として次代へ継承することが望まれる。

文化財

2

大光寺伝来僧形坐像保存修復事業

隠岐の島町

町長 池田 高世偉

本像は隠岐の島町の大光寺に伝来した肖像彫刻であり、制作時期は14世紀に遡る。大光寺は時宗道場として創建され、像主は14世紀に同寺の住職であった重阿とされる。重阿は隠岐から京都の金蓮寺に入山し、応安3年(1370)に四代浄阿となり、永和5年(1379)に没した。

本像の面貌表現は迫真性があり、中世時宗肖像彫刻の優品として評価されている。しかし虫害・朽損による損傷が著しく、各部材の緊結が緩み、形態を維持できる状態にない。現在は地域の過疎化、高齢化が進み本像の維持管理が難しくなり、隠岐の島町が寄贈を受け管理している。早急に適切な修理を施して良好な状態での保存管理とともに、幅広い公開が望まれている。

文化財

3

和歌山県指定文化財木造 大日如来坐像保存修理事業

橋本市谷奥深区

区長 上田 ひと美

本像は、平安時代に隆盛した定朝様式の特徴を示しながら、後の慶派へと繋がる奈良仏師の造像をうかがわせる。さらに後世の修理がほとんどなく、台座、光背も当初の状態で伝わる。高野山麓に伝来する当初の台座と光背を伴う12世紀半ば～後半にかけての奈良仏師新出作例としては貴重であるため、和歌山県指定文化財となっている。橋本市谷奥深の地域住民によって維持管理がされてきたが、経年劣化による虫損や朽損が著しく、早急な修理が必要であり、現在維持管理が難しい状況である。本事業により、適切な修理が施され、良好な状態で後世に伝えていきたい。

文化財

4

円頓寺惣門再興勸進状保存修理事業

宗教法人円頓寺

代表役員 内山 真覚

本勸進状は、円頓寺の惣門を再建しようとした際、寺の由緒を述べ、再建への助成を求めるために作成されたものである。内容は二段に分かれ、前段は麻呂子親王による鬼退治と共に円頓寺の由緒を述べ、後段では再興する惣門に安置する金剛力士像の功德を述べる、室町時代後期の勸進状に典型的な内容となっている。

また、『実隆公記』文亀元年8月19日条に「丹後国熊野郡佐野郷大治山円頓寺惣門修造勸進帳、真光院所望に依り、筆を染め了んぬ」とあり、勸進状制作の事情が明らかな点が評価できる。

今回の修復によって、本勸進状の価値を広く周知することが可能となり、学術振興に貢献できると考える。

文化財保存修復事業助成概要

文化財

5

玉里舟塚古墳出土埴輪修復事業

茨城県立歴史館

館長 小野寺 俊

玉里舟塚古墳は、6世紀前半頃の前方後円墳である。1965年から6次にわたる発掘により多数の埴輪が出土した。これらは当時の埴輪祭祀を考える上で貴重な資料であるとともに、人物埴輪は「上下分離成形技法」の代表例であり、また継体天皇墓とされる大阪府今城塚古墳の人物埴輪との共通性が指摘されていることから、東国の埴輪製作及び近畿地方との技術交流を跡づけるものとして注目されている。

このように本資料は学術上重要な資料であり、当館でも常時公開してきた。しかし発掘から60年が過ぎ、石膏部分の劣化が顕著となった。保存処理を行うことにより、本資料を良好な状態で長く保存し、展示に供するとともに教育と研究に役立てたい。

文化財

6

春日若宮御祭礼絵巻物(全3巻)保存修理事業

春日大社

官司 花山院 弘匡

春日若宮おん祭は平安時代に始まった春日大社摂社若宮神社の例祭で、その神事芸能は、国の重要無形民俗文化財に指定されています。

本絵巻は江戸時代中期の作で、該当祭礼を描く絵画の中でも極彩色で詳細に描写され、最も古い薪能図も付載されることから、日本の祭礼・芸能の理解に不可欠な資料として展示公開され、多くの書籍にも紹介されています。

現状は、巻末などに強い折れを生じ、一部に絵具の剥落や劣化も見られ、裏打の糊浮きが随所に見られます。貴重な絵巻を良好な状態を保ちながら広く公開するため、解体修理を行い、軸木や箱なども新調する保存事業を行います。

文化財

7

木造阿弥陀如来坐像の修復

宗教法人龍泉院

代表役員 神谷 麻俊

本像は新潟県南魚沼市に所在する曹洞宗龍泉院の本尊阿弥陀如来坐像である。体部内背面に墨書銘があり、貞応年(1222~1224)に造立されたことがわかる。当院の開創の寛正4年(1463)より遥かに遡り、その関係は現在不明である。また、同市に所在する観音堂(君帰観音)に伝わる観音菩薩立像(新潟県指定文化財)には承久2年(1220)の墨書銘があり、本像の作風と類似点が指摘されている。

現状、頭体幹部と脚部が分離しており、台座、光背ともに経年による劣化が著しい状態である。今回の修復により、墨書銘のさらなる解析がされ地域史研究に貢献することが期待される。

文化財

8

湖亭春望図修理事業

公益財団法人吉川報効会吉川史料館

理事長 吉川 重幹

本図は、雪舟筆と伝えられているもので、江戸時代に狩野探幽が雪舟筆と鑑定している。賛は臨済宗大鑑派の禅僧天與清啓である。天與清啓は遣明使節の正使を命じられ、その一行の中に雪舟もあり、二人に親交があったことも知られている。製作時期は、天與清啓が渡航前に周防に滞在していた頃とされ、製作時期が限定できる山水図として重要であることから、山口県の文化財に指定された。

今回の修理事業は、雪舟の研究における貴重な資料であると同時に旧大名家に伝わる日本の美術作品としての価値がある。現状は本紙全体に折りや汚れが見受けられ、将来にわたり適切な管理と保護措置が求められ、本事業による効果は高いものとする。

文化財

9

神戸女子大学古典芸能研究センター 所蔵「志水文庫 仏教・神道版画 コレクション」保存修復事業

神戸女子大学古典芸能研究センター

センター長 樹下 文隆

本コレクションは、崇拜対象となる図像・文字・絵図等を摺り物にして量産した、近世庶民信仰の実態を伝える仏教・神道版画である。寺社等の本尊や肉筆画等をもとに版木を作り、摺って庶民に配付したもので、頒布地域やその対象、目的等、あらゆる面で限定的な資料で、制作時の形態を保ったままの現存例は稀少かつ貴重で、全体像を掴むことは容易ではない。近世文学研究者の故信多純一博士が明確な目的を持って、各地の古書肆、寺社、礼所、山岳霊場等で収集し、信仰の地域的広がりを知ることができる本コレクションの価値は高い。損耗の著しい166点の修復によって全容公開が可能となり、近世庶民信仰研究の進展に寄与することが期待できる。

文化財

10

國學院大學博物館所蔵 壺形埴輪（奈良県桜井市 外山茶臼山古墳出土）の修理

学校法人國學院大學

理事長 佐柳 正三

本作品は、古墳時代前期（3世紀）の壺形埴輪であり、古墳の被葬者へ奉げる飲食物の象徴として作られた。大王墓に匹敵する大型前方後円墳の奈良県桜井市外山茶臼山古墳（全長約200m）から出土したもので、古墳時代最初期における埴輪の実態や、古墳を舞台とした葬送儀礼の変遷を明らかにするために欠かせない著名な考古資料でもある。

現状は、昭和20～30年代に応急修理されたままの状態にあり、経年劣化で取り扱いが難しく、外面の過剰な補彩によって本来の器面も見えにくくなっている。今回の解体修理によって、器壁・内面の詳細な観察も可能となり、埴輪研究の進展はもとより、博物館における展示公開にも活用することが期待される。

文化財

11

能登町指定文化財「白衣観音図」 （法融寺蔵）保存修理事業

真宗大谷派磯越山法融寺

代表役員 篠塚 榮祐

喜多川相説（生没年不詳）は、近世初期絵画の巨匠である俵屋宗達の工房を継承した宗雪の後継者と目される画家である。本作は相説画としては珍しい仏画で、古来の図像を継承しながら、相説らしい穏やかで潤いのある作品となっている。宗達画は、後に「琳派」と呼ばれる一大流派の源流となったことが知られているが、その後継者である宗雪や相説の研究は進んでおらず、今後の美術史上の課題でもある。相説は一時期北陸地方で活躍したとみられており、本作を所蔵する法融寺も能登半島に所在している。本作は本紙、表具ともに虫損による穴が多数あり、保存修理の緊急性は極めて高い。

文化財

12

木造阿弥陀如来坐像修復事業

宗教法人関興寺

代表役員 杉岡 明全

本像は、やや顎を前に出した顔立ちや像底を割り上げる構造など、運慶の作風や造法の踏襲がうかがえ、鎌倉時代に遡る慶派仏師による造像と考えられる。制作時期は当寺の創建よりはるかに遡るため、当寺の歴史との関係は不明であるが、新潟県下では当該時期の慶派仏師の作例が少なく、像内の胸膜部の墨書より、寛文13年（1673）に鎌倉の仏師禅慶によって修理されたことが知られ、南魚沼市の文化財に指定されている。

現状、鉄や鉄釘の腐食が進行し、構造が弱まっており、表面の剥落や損傷が著しく早急の修理が望まれる。この度の事業を通し修復過程を画像により公開するなどし、市民の文化財保護への理解を深める契機としたい。

文化財保存修復事業助成概要

文化財

13

木造阿弥陀三尊像保存修理事業

報恩寺

住職 竹中 仙雄

本阿弥陀三尊は、ふくよかで円満な表情、浅く整えられた衣文表現などに、11世紀前半から半ばにかけて活躍した仏師定朝によって確立された仏像様式（定朝様式）の踏襲がうかがえる。一方で寄木造ではなく一木造の構造を示し、量感のある肉身表現や衣文表現の一部に翻波式表文の名残をとどめるなど、造法、表現ともに古様な要素も見られ、地方への定朝様式の伝播の様相を知る上でも貴重である。

しかし、各像は虫損、朽損が著しく、経年劣化により接合部の剥離や亀裂が随所に認められる他、台座・光背（後補）の部材が亡失し、各所の矧ぎ目が緩み崩壊寸前の状態であり、早急の修理が必要である。適切に修理がなされ、良好な状態で後世に伝えられていくことが期待される。

文化財

14

楼閣人物図螺鈿印籠・盆保存修復事業

公益財団法人徳川黎明会徳川美術館

館長 徳川 義崇

印籠は、朱肉や印章を収める二・三段重ねの中国製の蓋物容器で、足利將軍家以来、武家の御殿飾りにおいて書院飾りの要所を占める道具として尊重されてきた。大名文化を伝えるべく御殿飾りを恒常的に再現展示している徳川美術館において、本品は展示頻度が高いものの、現在の状態には大きな懸念があり、移動や取り扱い自体に支障が生じている。本品は元時代以来の細緻な螺鈿法を継承しているため、経年による木地の歪みや漆塗膜の劣化により多くの貝片剥落が危惧される状態にあり、亀裂や漆層の浮きへの対処が急がれる。本修理によって、伝来品と大名文化を永く伝えられるとともに、徳川美術館における御殿飾りの再現展示の継続が可能となる。

文化財

15

大正天皇御物 『武蔵野図詩絵文台・黒漆氷割文 料紙箱・黒漆桜花文硯箱』

二荒山神社

宮司 中麿 輝美

日光には明治以降皇室関連施設が置かれ、特に明治32年（1899）田母沢御用邸竣工後大正天皇は毎夏日光に滞在され、度々中禪寺湖畔の二荒山神社中宮祠に行啓し境内の「北岳南湖閣」を御座所とされた。このようなことから今回の大正天皇、並びに貞明皇后の御物が当社に下賜されることとなり、その経緯も宮内公文書館所蔵資料により明らかとなっている。

本作は黒漆塗で一見地味ではあるが、「夜桜塗」という高度な漆芸技術をもって文様が描かれており、光線の加減で武蔵野図が浮かび上がるという卓越な表現がなされている。しかしながら、制作以来百年近くを経て、木地や塗膜の損傷が著しい。早急に修復を必要とする案件と考えられる。

文化財

16

天理参考館所蔵 乾漆造伎楽面酣胡従修復事業

学校法人天理大学

理事長 西浦 忠一

本作は、乾漆造であることから奈良時代の作であることが確実視され、寛政4年（1792）の『南都東大寺 伎楽之面写』および同12年頃の『集古十種』に記載されていたものである。明治以降、何らかの理由で東大寺から流出した可能性が高い。伎楽面のなかでも乾漆造のものは脆弱なため遺品は少ない。また製作技法の確かさなどから実際に大仏開眼供養に用いられた可能性もある。したがって、その歴史的・学術的価値は高い。

破損著しい状態にあることから、公開は控えざるを得なかったが、修復により館外から展示などの要望に応じることができるとは、同資料の歴史的・文化的重要性を鑑みれば学術および社会教育の面で大いに意義がある。

文化財

17

奈良県指定文化財広橋家文書 (渡辺惣官家文書) 公開修復事業

廣橋 延博

「広橋家文書（渡辺惣官家文書）」は、摂津の土豪・渡辺家に関する古文書群であり、昭和52年に奈良県指定文化財に指定されている。渡辺家が、南北朝時代から室町時代にかけて摂津国の渡辺・難波（現在の大阪市難波・北浜付近）を支配していたことから、後醍醐天皇綸旨をはじめとする中世難波地域に関する古文書を中心に構成されており、中世大阪地域の歴史を語る貴重な資料である。

しかしながら、現在、虫損や糊剥がれが著しく、公開が難しい状態にあり、今回、2ヶ年計画で保存修理を実施する。保存修理の実施をととして美観を回復し、広く本品の内容と価値を周知する機会を持てるよう、今後の活用を期したい。

文化財

18

木造阿弥陀如来立像 保存修理事業

宗教法人持光寺

代表役員 松岡 昭禮

尾道水道沿いの市街地は、平安時代後期から港町として栄え、商家の財力を背景に数多くの寺院が建立されてきた。持光寺もその内の一つで、創建年代は不明であるが、国宝「絹本著色普賢延命像」（仁平2年・1153）や平安時代後期の造像である本像が当寺に伝存することから港町尾道の歩みとともに歴史を刻んできたことが窺われる。

本像の現状は、昨年の令和6年に自然倒壊して著しく破損した。これは経年の劣化と過去の火災により劣悪な状態であったことが倒壊の原因であった。本像は尾道市内において希少な平安時代後期の優品として位置づけられており早急の保存修理が望まれている。

文化財

19

旦棕神社木造大將軍神像 保存修理事業

宗教法人旦棕神社

代表役員 水田 清文

本像は、旦棕神社の本殿の中から平成に入って発見されたもので、武装形（神将形）7軀、束帯形11軀、童子形1軀の計19軀からなる。いずれも、木心を外したヒノキの一材から彫出される。その作風は一樣ではないものの、平安時代後期の制作と考えられる。来歴は不明であるが、武装形（神将形）、束帯形、童子形がまとまって伝来する大將軍神像は、京都市の大將軍八神社の神像群のほかに類例がなく、大將軍神の信仰を今に伝える群像として価値が高い。

現状は、虫蝕や木質朽損が著しく表面の剥落も進行している。修理により、良好な状態で後世に伝えられ、安全な展示公開が可能となり、その価値がより広く認識されることが期待できる。

文化財

20

大阪府指定文化財葛井寺参詣 曼荼羅修理事業

宗教法人葛井寺

住職 森 快隆

参詣曼荼羅は、由緒や霊驗等を表して宗教的威信を示したものであるのに対して、本図はそれらの要素を含みながらも葛井寺本尊の千手観音像や参詣者を描き込んだ、言わば参詣案内図としての機能を持った図であり、他の参詣曼荼羅とはやや異なった古式の垂迹曼荼羅を継承している。葛井寺は1510年に地震被害を蒙っているが翌年に三条西実隆が書いた勸進帳が現存しており、この復興勸進の一環として本図が制作されたと目される。制作時期の不明なものが多い参詣曼荼羅にあって貴重な存在でもあり、大阪府指定文化財となっている。今回の修復が本尊の千手観音とともに広く周知され、また観音信仰の研究など学術面での研究にも広く貢献したい。

文化財保存修復事業助成概要

文化財

21

木造虚空蔵菩薩坐像及び 二天立像修繕事業

洞香山泰享院長福寺

住職 矢内 大丘

本像は、南北朝時代の康永3年に造立され、室町時代の永享12年の長福寺開創にあたり、信州松本（現在の長野県）から長福寺を守護してくれる仏像として勧進奉祀されたものである。地区住民の心の拠り所として祀られ、その歴史的及び高い文化的価値が認められ、昭和28年10月1日には福島県指定重要文化財として指定されている。

しかし現状は、670余年の時間経過により両手首が欠失し、矧目の緩みと欠損、間隔の広がり、台座を含め全域にわたる虫食い被害、そして像中央に大きい干割れが見られる。そこで、今年度より修復作業が行われており、像本来の姿が損なわれないよう現状維持を原則に作業が進められている。

文化財

22

工部大学校卒業制作図面 保存修復事業

東京大学大学院工学系研究科建築学専攻

専攻長 伊山 潤

東京大学大学院工学系研究科建築学専攻は、近代日本最初の高等工学教育機関である工部大学校以来の建築教育資料を所蔵している。本事業では明治12～19年に制作された卒業制作図面を保存・修復する。対象は辰野金吾や片山東熊ら、後に日本近代建築を代表する建築家を含む21名の作品で、制作から130年以上を経ており汚れ、カビ、欠損、洋紙の酸性化など劣化が著しい。これらの図面は当時の設計思想や教育内容を示す一次資料であり、日本近代建築史の根幹をなす学術的価値を持つ。彩色も施され美術品としての価値も高い。さらに明治期建築教育は東アジア近代化研究の基軸とされ、国際的研究交流にも資するため修復・公開が望まれている。

三菱財団社会福祉特別助成〈三菱財団 × 中央共同募金会 共同助成〉
「外国にルーツがある人々への支援活動応援助成（第6回）」
助成先一覧

① 生活等支援プログラム

番号	所在地	名 称	使 途	金 額
1	福島県	特定非営利活動法人 福島就労支援センター 理事長 小野 康平	東北の働く外国人と事業主のための労働相談窓口運営事業	2,500,000円
2	東京都	VILLA EDUCATION CENTER 東京女子大学教授 松尾 慎	困難な状況が継続している在日ミャンマー人の人生をサポートするための日本語学習支援・教科学習支援・生活サポート相談事業	3,000,000円
3	香川県	特定非営利活動法人 子どもたちの未来を応援するオアシス丸亀 理事長 梶 正治	香川県中讃地区に暮らす外国にルーツがある子どもたちのため、学習支援活動を通して様々な課題を解決して、日本社会への適応と子どもたちの能力を活かして、将来の自立につながることを目指すための事業	1,910,000円
4	大阪府	特定非営利活動法人 国際交流の会とよなか 理事長 葛西 芙紗	外国にルーツを持つ人たちの健康な暮らしを守るための 多言語による同行通訳者派遣事業	1,030,000円
5	兵庫県	Masayang Tahanan マサヤン・タハナン 代表 野田 メアリー・ジーン	フィリピン移住者のエンパワーメントに資する事業	1,280,000円
6	愛知県	特定非営利活動法人 日本ウクライナ文化協会 理事長 川口 プリスリュドミラ	愛知県在日、又は東海地方の避難民への包括的支援事業（生活・健康・平和事業支援）	2,120,000円
7	富山県	特定非営利活動法人 アレッセ高岡 理事長 青木 由香	エスニックコミュニティ連携によるCLD青少年のための包括的なことばの力を育む学習支援事業	2,870,000円
8	兵庫県	特定非営利活動法人 アジア女性自立プロジェクト 代表理事 奈良 雅美	地域に暮らす外国にルーツがある住民のための持続可能な総合的支援体制の構築	2,260,000円
9	東京都	特定非営利活動法人 MAIKEN 理事長 三浦 左千夫	ラテンアメリカにルーツがある外国籍住民のための「身体とこころの不安に関する無料の医療相談会」を通じて心身共に生活の質を高め、地域で健康で安心して暮らせることを目的とする事業	1,830,000円
10	東京都	特定非営利活動法人 日本在住ベトナム人協会 代表理事 竹内 勇	ベトナム人労働者のためのAI活用型相談支援事業	3,000,000円
11	山口県	青年海外協力隊山口県OB会 会長 山尾 和宏	散在地域に住む外国ルーツの子どもたちの日本語支援の空白をうめる支援体制事業	1,900,000円
12	愛知県	特定非営利活動法人 トルシーダ 理事長 伊東 浄江	外国人高齢者住民の就業機会創出と地域参加のためのサポート事業	2,980,000円

番号	所在地	名 称	使 途	金 額
13	神奈川県	特定非営利活動法人 カラバオの会 代表理事 八重樫 宣仁	横浜市伊勢佐木町を中心としたタイ人コミュニティの生活支援事業	780,000円
14	大阪府	特定非営利活動法人 スボイの会 理事長 吉井 順子	外国人介護士、特定技能実習生らが安心して安定した生活を築くことにより、地域社会に貢献してもらうための生活等支援事業	2,000,000円
15	兵庫県	公益財団法人 PHD協会 理事長 水野 雄二	シェアハウス「みんなのいえ」を拠点とした外国ルーツの人々の自立と健康のための包括的支援事業	1,880,000円
16	大阪府	特定非営利活動法人 Deep People 理事長 牧 文彦	外国にルーツのある子どもたちのためのオンラインや対面での居場所作り支援、及び学習支援事業	2,400,000円
17	東京都	一般社団法人 レガートおおた 代表理事 石井 さわ子	地域で孤立する外国ルーツの子ども・家族のための オンラインでつなぐ「子どもまるごと」伴走型支援事業	3,000,000円
18	愛知県	特定非営利活動法人 外国人ヘルプライン東海 代表理事 後藤 美樹	外国人住民の包括的支援体制のモデル事業	2,980,000円
19	愛知県	特定非営利活動法人 レスキューストックヤード 代表理事 栗田 暢之	ウクライナ避難民の孤立と孤独を防ぐため、避難者居住エリアで見守りの目を広げる体制作りを整える支援事業（個別対応又は交流会等の開催等）	3,000,000円
20	東京都	特定非営利活動法人 豊島子どもWAKUWAKUネットワーク 理事長 栗林 知絵子	WAKUWAKU×ルーツ：外国にルーツを持つ子ども・若者のための居場所事業	710,000円
21	愛知県	特定非営利活動法人 ABT豊橋ブラジル協会 代表理事 鈴木 秀子	二交代勤務の外国人のための日本語教室	3,000,000円
22	京都府	特定非営利活動法人 東九条地域活性化センター 代表理事 木之本 マリル	コミュニティカフェほっこり	1,250,000円
23	東京都	在日韓国人福祉会 会長 金 榮子	多文化共生社会の構築に向けた「外国人・地域包括システム」の拠点づくり事業～「日本に住んでよかった」と言える外国人高齢者支援体制を目指して～	3,000,000円
24	茨城県	認定特定非営利活動法人 茨城YMCA 代表理事 稲本 修一	モンゴルこどものオルドン	1,250,000円
25	愛知県	一般社団法人 JUNTOS 代表理事 吉村 迅翔	「JUNTOS JAM」外国にルーツをもつ子どもたちのための居場所づくり事業	2,460,000円
プログラム① 小計 25件				54,390,000円

② 共生促進プログラム

番号	所在地	名 称	使 途	金 額
26	兵庫県	特定非営利活動法人 エフエムわいわい 代表理事 西嶋(金) 千秋	多文化共生社会構築のための外国人と地域住民の出会い創生事業	1,000,000円
27	秋田県	Pour Bebe 代表 作左部 紀子	妊娠中や乳幼児を子育て中の家族のための、やさしい日本語と外国語による子育て支援事業	220,000円
28	千葉県	鴨川市国際交流協会 会長 鈴木 健史	災害時における外国人支援事業	430,000円
29	三重県	特定非営利活動法人 愛伝舎 理事長 坂本 久海子	三重県北勢地区住民ための多文化共生交流促進事業	1,000,000円
30	群馬県	特定非営利活動法人 アスワード 代表理事 山本 祥一	境地区の地域住民と一緒に創る多文化共生への第一歩 境まちなか歴史探索クリーニング作戦事業	400,000円
31	東京都	特定非営利活動法人 CWS Japan 事務局長 小美野 剛	多国籍コミュニティにおける多文化共生防災事業	1,000,000円
32	新潟県	巻地区コミュニティ協議会 会長 五十嵐 光一	新潟市西蒲区多文化共生促進と災害時共助のための地域交流事業	470,000円
プログラム② 小計 7件				4,520,000円

③ 中間支援・ネットワーク支援

番号	所在地	名 称	使 途	金 額
33	千葉県	社会福祉法人 柏市社会福祉協議会 会長 中川 博	社会福祉法人等との連携による外国人介護人材の定着と、地域組織や関係機関と連携した多文化共生理解に向けた取り組みの土台を作る事業	2,000,000円
34	京都府	京都外国人高齢者・障がい者生活支援ネットワーク・モア（京都モアネット） 共同代表 加藤 博史	外国ルーツを持つ高齢者・障がい者への支援力と協働を強化する 担い手・ネットワークづくり事業（支援ネットワーク強化事業）	2,000,000円
35	愛知県	特定非営利活動法人 シェイクハンズ 代表理事 松本 里美	地域と地元密着・ダブルネットワークで目指す外国人のための子育て支援事業	1,930,000円
プログラム③ 小計 3件				5,930,000円

④ 調査研究プログラム

番号	所在地	名 称	使 途	金 額
36	京都府	社会福祉法人 全国手話研修センター 理事長 石野 富志三郎	在日外国人ろう者の意思疎通に 起因する課題の発見と支援の 在り方に関する調査研究事業	2,000,000円
37	京都府	特定非営利活動法人 京都丹波・丹後ネットワーク 理事長 牧 紀男	外国人労働者と企業・行政の共 創型多文化共生社会の構築の ための実態調査事業	1,730,000円
プログラム④ 小計 2件				3,730,000円
総 合 計 37件				68,570,000円

(所属先・職名については2025年11月5日現在)

注) 上記特別助成については、一件ごとの概要説明を省略致します。

助成総額の内訳は、当財団拠出分25百万円、中央共同募金会拠出分43,570千円です。

三菱財団のあらまし



設立趣意書

三菱事業の発生は、1870年（明治3年）10月に遡る。この時、創立者岩崎弥太郎が、彼の郷里土佐において海運業の経営に着手した。三菱企業は、近代日本の曙と共に生まれ、爾来日本経済と運命を共にして、幾多の苦難を経ながらも今日に至った。

即ち、今やわが国は、全世界を瞠目させる高度成長を遂げ、本格的国際化時代を迎えて、さらに大きく雄飛せんとしているが、三菱グループもまた、今日の姿を土台として、さらに国民経済の発展のために前進しようとしている。

しかしながら、周知のごとく、このような急速な経済発展の陰において、避け難いひずみとも見られる社会資本の不足があり、また国民生活の向上が、必ずしも国民福祉の向上と共存、均衡していないという問題がある。

更には、精神文化の退潮、自然科学特に基礎科学部門における頭脳流出現象、次代を託すべき青少年教育、発展にとり残された社会階層の存在等々今後克服さるべき問題は少なくない。

これらの不均衡の是正こそ国の政策と相まって、社会的責任ある代表的企業にとっての重大なる責務であり、関心事であるといわねばならない。

三菱グループは、創業以来公益に奉ずることを以て経営の基本理念として来た。たまたま明年秋、創業百周年の記念日を迎えるにあたり、伝統の精神を生かした最も有意義な事業を以ていささか社会に報い、一層の国民経済発展に資するため、関係各社相集い、財団法人三菱財団を設立せんとするものである。

当財団は、わが国社会の学術、教育、文化ならびに福祉の向上に資することを目的として、さしあたっては学術研究の助成、社会福祉に関する事業の助成を主たる事業とし、当初250百万円を以て発足するが、将来はさらに時代に適合した事業をも加え、今後10年間にわたり相当額の寄附を重ねて事業規模ならびに財団基礎を拡大強化せんとするものである。

（設立 昭和44年9月11日）

The Mitsubishi Foundation

Purpose of the Establishment of the Foundation

The formation of the Mitsubishi Group of Enterprises goes back to October, 1870 (the 3rd year of Meiji), when their founder Yatarō Iwasaki started marine transportation business at his native province, Tosa. In other words, the Mitsubishi Group was born at the daybreak of the modern age in Japan. Since then it has shared its fate with Japanese economy overcoming various kinds of trials.

Our country, Japan, has recently made such an astonishingly rapid growth, as has been looked upon by other nations in open-eyed astonishment, and going to take another flying jump in a coming age of more highly internationalized society. The Mitsubishi Group wishes to participate in such future development of national economy, marching forward from the bases so far attained.

As is commonly known, however, only insufficient amount of money has been spent for the welfare of the society—a fact which may appear to be a dark spot hidden behind such a rapid development in economy. We should therefore raise the question of whether the enhancement of standard of living has been followed by the corresponding development in the welfare of the people.

We wish to point out further that there are quite a few problems to be solved, such as decline in moral civilization, so-called “brain effluence” in the field of natural sciences, especially of basic sciences, unsatisfactory conditions in the education of the youth to whom the coming age is to be entrusted, and existence of a large portion of the society left behind the progress of the society.

We believe that to help to correct this imbalance, hand in hand with the measures to be taken by our government, should be a pressing duty and a matter of grave concern of leading enterprises on which rests high social responsibility.

It has been the basic policy for the Mitsubishi Group to serve the public benefit since its foundation. In line with this tradition, the companies forming the Mitsubishi Group jointly decided to establish a foundation to commemorate the 100th anniversary of the birth of the Mitsubishi business in the fall of next year (i.e., 1970), in the hope of making greater contribution to society and to the further development of our national economy.

The said Foundation is aimed at giving assistance to the enhancement of scholarship, education, culture and welfare in our society. The Foundation will start with the initial fund of 250 million yen to be used mainly for giving assistance to academic research, and activities concerned with social welfare. It is expected that the companies belonging to the Mitsubishi Group will make further contribution toward the Foundation in a substantial amount in the ten years to come, and that the Foundation will thereby be able to expand its scope of activities.

(The Mitsubishi Foundation was established on September 11, 1969.)

助成実績推移

(単位：円)

事業年度		自然科学研究助成		人文科学研究助成		社会福祉事業研究助成		文化財保存修復事業助成		その他の諸事業助成		合 計	
		件数	金 額	件数	金 額	件数	金 額	件数	金 額	件数	金 額	件数	金 額
昭和45年度	1970	14	99,156,000			8	45,300,000			7	8,547,000	29	153,003,000
46	1971	16	99,103,400			7	48,036,000			21	12,811,028	44	159,950,428
47	1972	14	100,140,000	4	23,100,000	6	50,165,600			24	11,493,100	48	184,898,700
48	1973	14	109,700,000	5	19,950,000	7	50,000,000			26	12,772,675	52	192,422,675
49	1974	21	200,000,000	5	30,000,000	13	100,000,000			26	15,000,000	65	345,000,000
50	1975	14	110,000,000	4	25,000,000	9	50,000,000			28	15,000,000	55	200,000,000
51	1976	12	110,000,000	6	25,000,000	7	50,000,000			26	15,000,000	51	200,000,000
52	1977	15	110,000,000	8	25,000,000	10	50,000,000			22	13,460,000	55	198,460,000
53	1978	14	110,000,000	6	25,000,000	6	50,000,000			12	10,327,900	38	195,327,900
54	1979	21	200,000,000	7	35,000,000	14	100,000,000			10	8,300,000	52	343,300,000
55	1980	13	110,000,000	7	25,000,000	7	50,000,000			13	14,475,000	40	199,475,000
56	1981	16	150,000,000	11	35,000,000	11	70,000,000			6	5,500,000	44	260,500,000
57	1982	17	150,000,000	11	35,000,000	9	70,000,000			7	6,620,000	44	261,620,000
58	1983	17	150,000,000	12	35,000,000	10	70,000,000			9	9,330,000	48	264,330,000
59	1984	19	150,000,000	14	35,000,000	10	70,000,000			16	14,770,000	59	269,770,000
60	1985	16	150,000,000	13	35,000,000	11	70,000,000			11	12,785,000	51	267,785,000
61	1986	20	150,000,000	15	34,604,000	10	70,000,000			7	7,700,000	52	262,304,000
62	1987	23	170,000,000	15	34,990,000	10	70,000,000			5	2,500,000	53	277,490,000
63	1988	23	170,000,000	16	40,000,000	8	70,000,000			5	4,300,000	52	284,300,000
平成元年度	1989	30	220,000,000	23	45,000,000	12	80,000,000			4	3,000,000	69	348,000,000
2	1990	29	250,000,000	30	50,000,000	11	80,000,000			2	3,000,000	72	383,000,000
3	1991	31	271,000,000	25	55,000,000	11	85,000,000			4	5,000,000	71	416,000,000
4	1992	34	300,000,000	28	55,000,000	12	85,000,000			5	5,200,000	79	445,200,000
5	1993	35	300,000,000	16	55,000,000	11	85,000,000			5	3,500,000	67	443,500,000
6	1994	37	300,000,000	12	55,000,000	12	85,000,000			0	0	61	440,000,000
7	1995	37	300,000,000	11	55,000,000	11	85,000,000			4	3,400,000	63	443,400,000
8	1996	35	300,000,000	12	55,000,000	12	85,000,000			1	1,000,000	60	441,000,000
9	1997	35	300,000,000	9	55,000,000	13	85,000,000			0	0	57	440,000,000
10	1998	36	300,000,000	13	60,000,000	12	80,000,000			3	2,700,000	64	442,700,000
11	1999	40	300,000,000	17	60,000,000	21	90,000,000			1	1,000,000	79	451,000,000
12	2000	44	320,000,000	17	75,000,000	31	110,000,000			13	13,500,000	105	518,500,000
13	2001	40	300,000,000	20	60,000,000	27	90,000,000			7	9,600,000	94	459,600,000
14	2002	43	320,000,000	24	60,000,000	32	90,000,000			5	7,000,000	104	477,000,000
15	2003	43	300,000,000	26	60,000,000	42	90,000,000			3	4,700,000	114	454,700,000
16	2004	44	300,000,000	35	60,000,000	41	90,000,000			7	8,900,000	127	458,900,000
17	2005	47	300,000,000	36	60,000,000	42	90,000,000			5	5,000,000	130	455,000,000
18	2006	49	300,000,000	39	60,000,000	46	90,000,000			8	12,000,000	142	462,000,000
19	2007	49	300,000,000	40	60,000,000	47	90,000,000			7	10,900,000	143	460,900,000
20	2008	51	300,000,000	32	60,000,000	47	90,000,000			3	3,000,000	133	453,000,000
21	2009	51	300,000,000	36	58,500,000	41	90,000,000			3	5,000,000	131	453,500,000
22	2010	52	300,000,000	34	57,900,000	42	90,000,000			3	2,500,000	131	450,400,000
23	2011	46	250,000,000	30	50,000,000	35	70,000,000			0	0	111	370,000,000
24	2012	43	250,000,000	33	47,500,000	35	70,000,000			0	0	111	367,500,000
25	2013	45	250,000,000	34	50,000,000	35	70,000,000			2	1,500,000	116	371,500,000
26	2014	47	250,000,000	34	50,000,000	35	70,000,000			0	0	116	370,000,000
27	2015	50	259,000,000	36	52,000,000	38	74,000,000			2	1,500,000	126	386,500,000
28	2016	50	280,000,000	34	58,000,000	39	82,000,000			3	3,000,000	126	423,000,000
29	2017	50	300,000,000	32	60,000,000	38	90,000,000			2	1,300,000	122	451,300,000
30	2018	50	300,000,000	32	60,000,000	37	90,000,000			1	3,000,000	120	453,000,000
令和元年度	2019	67	352,000,000	47	100,000,000	41	100,000,000			4	8,000,000	159	560,000,000
2	2020	91	810,000,000	44	100,000,000	94	200,000,000			1	3,000,000	230	1,113,000,000
3	2021	61	340,000,000	28	58,700,000	80	130,000,000	11	25,000,000	0	0	180	553,700,000
4	2022	67	365,000,000	31	70,000,000	75	140,000,000	12	30,000,000	3	3,000,000	188	608,000,000
5	2023	66	365,000,000	29	68,900,000	75	140,000,000	11	30,000,000	2	2,000,000	183	605,900,000
6	2024	74	420,000,000	33	85,000,000	78	150,000,000	14	34,870,000	3	3,000,000	202	692,870,000
7	2025	84	492,000,000	37	95,000,000	80	145,000,000	22	48,000,000	2	2,000,000	225	782,000,000
合計		2,102	14,362,099,400	1,208	2,794,144,000	1,564	4,759,501,600	70	167,870,000	399	341,891,703	5,343	22,425,506,703

注) 人文科学研究助成の実績には、50周年記念特別助成として実施した文化財修復事業助成（令和元年度：9件・20百万円、2年度：8件・20百万円）が含まれています。

役員及び評議員名簿

(2026年6月18日現在、50音順)

役 職	氏 名	常勤・非常勤の別	現 職
理 事 長	三 毛 兼 承	非常勤	(株)三菱UFJ銀行特別顧問
常務理事	七 條 博 明	常勤	
理 事	泉 澤 清 次	非常勤	三菱重工業(株)取締役会長
理 事	上 野 谷 加 代 子	非常勤	日本医療大学教授 同志社大学名誉教授
理 事	岡 田 清 孝	非常勤	京都大学名誉教授 基礎生物学研究所名誉教授
理 事	垣 内 威 彦	非常勤	三菱商事(株)取締役会長
理 事	岸 本 美 緒	非常勤	お茶の水女子大学名誉教授
理 事	黒 田 玲 子	非常勤	東京大学名誉教授
理 事	佐 藤 勝 彦	非常勤	日本学術振興会学術システム研究センター顧問 東京大学名誉教授
理 事	白 井 克 彦	非常勤	早稲田大学名誉顧問
理 事	永 井 良 三	非常勤	自治医科大学学長
理 事	早 瀬 昇	非常勤	(福)大阪ボランティア協会理事長
理 事	坂 東 眞 理 子	非常勤	昭和女子大学総長
理 事	細 野 秀 雄	非常勤	東京科学大学 元素戦略MDX研究センター 特命教授、栄誉教授
理 事	室 伏 き み 子	非常勤	お茶の水女子大学名誉教授・前学長
監 事	池 谷 幹 男	非常勤	三菱UFJ信託銀行(株)特別顧問
監 事	高 岡 英 則	非常勤	三菱金曜会事務局長
監 事	西 川 洋 一	非常勤	東京大学名誉教授
監 事	松 尾 憲 治	非常勤	明治安田生命保険(相) 名誉顧問
評 議 員	安 西 祐 一 郎	非常勤	慶應義塾学事顧問・同大学名誉教授 独立行政法人日本学術振興会名誉フェロー
評 議 員	飯 野 正 子	非常勤	津田塾大学名誉教授
評 議 員	磯 崎 功 典	非常勤	キリンホールディングス(株)代表取締役会長CEO
評 議 員	越 智 仁	非常勤	三菱ケミカルグループ(株)シニアエグゼクティブコンサルタント
評 議 員	樺 山 紘 一	非常勤	東京大学名誉教授
評 議 員	岸 輝 雄	非常勤	東京大学名誉教授 東京大学先端科学技術研究センターフェロー
評 議 員	北 沢 利 文	非常勤	東京海上日動火災保険(株)相談役
評 議 員	小 林 健	非常勤	三菱商事(株)相談役
評 議 員	佐 々 木 丞 平	非常勤	京都大学名誉教授 京都国立博物館名誉館長
評 議 員	杉 山 博 孝	非常勤	三菱地所(株)特別顧問
評 議 員	竹 内 章	非常勤	三菱マテリアル(株)特別顧問
評 議 員	内 藤 忠 顕	非常勤	日本郵船(株)特別顧問
評 議 員	野 依 良 治	非常勤	日本学士院院長 名古屋大学特別教授
評 議 員	板 東 久 美 子	非常勤	日本赤十字社常任理事 元 消費者庁長官
評 議 員	平 野 信 行	非常勤	(株)三菱UFJ銀行特別顧問
評 議 員	堀 田 凱 樹	非常勤	東京大学名誉教授
評 議 員	水 田 邦 雄	非常勤	(福)恩賜財団母子愛育会理事長
評 議 員	宮 永 俊 一	非常勤	三菱重工業(株)名誉顧問

選考委員

(2026年4月1日現在)

自然科学関係 11名		
委員長	十倉好紀	理化学研究所領域統括 東京大学卓越教授、特別荣誉教授
委員	澤本和延	名古屋市立大学大学院医学研究科教授 脳神経科学研究所長
委員	須藤 靖	高知工科大学総合研究所特任教授
委員	東山哲也	東京大学大学院理学系研究科教授
委員	藤尾圭志	東京大学大学院医学系研究科内科学専攻アレルギー・リウマチ学教授
委員	村上修一	東京大学大学院工学系研究科物理工学専攻教授
委員	本橋ほづみ	東北大学大学院医学研究科医化学分野教授
委員	佐藤俊朗	慶應義塾大学医学部医化学教室教授
委員	染谷隆夫	東京大学大学院工学系研究科教授
委員	瀧宮和男	東北大学大学院理学系研究科教授 理化学研究所創発物性科学研究センター副センター長
委員	富田泰輔	東京大学大学院薬学系研究科教授

人文科学関係 5名		
委員長	岩波敦子	慶應義塾大学理工学部教授
委員	粕谷 誠	東京大学大学院経済学研究科教授
委員	高嶋 航	早稲田大学スポーツ科学学術院教授
委員	納富信留	東京大学大学院人文社会系研究科教授
委員	宮路淳子	奈良女子大学研究院人文科学系教授

社会福祉関係 6名		
委員長	鈴木俊彦	日本赤十字社副社長
委員	泉 陽子	東北大学東北メディカル・メガバンク機構教授
委員	空閑浩人	同志社大学大学院社会学研究科教授
委員	緒方 徹	東京大学大学院医学系研究科外科学専攻 感覚・運動機能医学講座リハビリテーション医学分野教授
委員	野尻紀恵	日本福祉大学学長補佐／社会福祉学部教授
委員	石山麗子	国際医療福祉大学大学院医療福祉学研究科教授

文化財保存修復関係 3名		
委員長	小松大秀	公益財団法人永青文庫館長 秋田市立千秋美術館館長
委員	浅見龍介	東京国立博物館副館長
委員	板倉聖哲	東京大学東洋文化研究所教授

(敬称略、就任順)

2025年度 決算報告書

貸借対照表

2026年3月31日現在

(単位：円)

科 目	当年度	前年度	増 減
I 資産の部			
1. 流動資産	537,319,859	432,627,907	104,691,952
2. 固定資産	39,233,632,160	35,489,567,752	3,744,064,408
(1) 基本財産	30,240,639,713	29,554,650,563	685,989,150
(2) 特定資産	8,981,450,001	5,923,574,591	3,057,875,410
(3) その他固定資産	11,542,446	11,342,598	199,848
資産合計	39,770,952,019	35,922,195,659	3,848,756,360
II 負債の部			
1. 流動負債	291,457,126	221,911,663	69,545,463
2. 固定負債	22,042,000	16,912,000	5,130,000
負債合計	313,499,126	238,823,663	74,675,463
III 正味財産の部			
1. 指定正味財産	8,999,809,000	9,473,041,000	△ 473,232,000
2. 一般正味財産	30,457,643,893	26,210,330,996	4,247,312,897
正味財産合計	39,457,452,893	35,683,371,996	3,774,080,897
負債及び正味財産合計	39,770,952,019	35,922,195,659	3,848,756,360

正味財産増減計算書

2025年4月1日から2026年3月31日まで

(単位：円)

科 目	当年度	前年度	増 減
I 一般正味財産増減の部			
1. 経常増減の部			
(1) 経常収益			
①基本財産運用益	761,002,094	696,191,648	64,810,446
②特定資産運用益	167,448,505	142,611,881	24,836,624
③運用財産運用益	989,655	251,739	737,916
④雑収益	4,863,493	1,058,774	3,804,719
経常収益計	934,303,747	840,114,042	94,189,705
(2) 経常費用			
①事業費	876,747,283	791,217,359	85,529,924
②管理費	35,179,127	38,313,875	△ 3,134,748
経常費用計	911,926,410	829,531,234	82,395,176
評価損益等調整前 当期経常増減額	22,377,337	10,582,808	11,794,529
評価損益等計	4,224,935,560	310,146,232	3,914,789,328
当期経常増減額	4,247,312,897	320,729,040	3,926,583,857
2. 経常外増減の部			
(1) 経常外収益	0	0	0
(2) 経常外費用	0	6	△ 6
当期経常外増減額	0	△ 6	6
当期一般正味財産増減額	4,247,312,897	320,729,034	3,926,583,863
一般正味財産期首残高	26,210,330,996	25,889,601,962	320,729,034
一般正味財産期末残高	30,457,643,893	26,210,330,996	4,247,312,897
II 指定正味財産増減の部			
当期指定正味財産増減額	△ 473,232,000	△ 359,684,000	△ 113,548,000
指定正味財産期首残高	9,473,041,000	9,832,725,000	△ 359,684,000
指定正味財産期末残高	8,999,809,000	9,473,041,000	△ 473,232,000
III 正味財産期末残高	39,457,452,893	35,683,371,996	3,774,080,897

キャッシュ・フロー計算書

2025年4月1日から2026年3月31日まで

(単位：円)

科 目	当年度	前年度	増 減
I 事業活動によるキャッシュ・フロー			
1. 事業活動収入			
① 基本財産運用収入	761,002,094	696,191,648	64,810,446
基本財産利息収入	558,805,844	552,291,748	6,514,096
基本財産配当金収入	202,196,250	143,899,900	58,296,350
② 特定資産運用収入	167,448,505	142,611,881	24,836,624
③ 運用財産運用収入	989,655	251,739	737,916
④ その他の事業活動収入	353,493	733,177	△ 379,684
事業活動収入計	929,793,747	839,788,445	90,005,302
2. 事業活動支出			
① 事業費支出	795,872,181	785,817,873	10,054,308
② 管理費支出	33,350,577	36,707,748	△ 3,357,171
③ その他の事業活動支出	93,537	438,384	△ 344,847
事業活動支出計	829,316,295	822,964,005	6,352,290
事業活動によるキャッシュ・フロー	100,477,452	16,824,440	83,653,012
II 投資活動によるキャッシュ・フロー			
1. 投資活動収入	3,368,533,229	3,573,493,949	△ 204,960,720
2. 投資活動支出	3,364,318,729	3,564,202,102	△ 199,883,373
投資活動によるキャッシュ・フロー	4,214,500	9,291,847	△ 5,077,347
III 財務活動によるキャッシュ・フロー	0	0	0
IV 現金及び現金同等物の増減額	104,691,952	26,116,287	78,575,665
V 現金及び現金同等物の期首残高	431,102,207	404,985,920	26,116,287
VI 現金及び現金同等物の期末残高	535,794,159	431,102,207	104,691,952

主要年度日誌

年 月 日		摘 要
2025年	9.11	2025年度自然科学研究、人文科学研究、社会福祉事業・研究、文化財保存修復事業助成金贈呈式開催
	10.20	2026年度自然科学第1回選考委員会 審査方針、応募要領等の決定
	10.30	2026年度人文科学第1回選考委員会 審査方針、応募要領等の決定
	11.4	2026年度文化財保存修復第1回選考委員会 審査方針、応募要領等の決定
	11.5	第75回臨時理事会(決議の省略) 「社会福祉特別助成」助成先決定の件ほか
	11.6	2026年度社会福祉第1回選考委員会 審査方針、応募要領等の決定
	12.1	2026年度人文科学研究助成、社会福祉事業・研究助成、文化財保存修復事業助成公募受付開始
2026年	1.5	2026年度自然科学研究助成公募受付開始
	1.9	2026年度人文科学研究助成公募を締め切る 応募件数 348件、金額 1,106百万円
	1.16	2026年度社会福祉事業・研究助成公募を締め切る 応募件数 230件、金額 754百万円
	1.23	2026年度文化財保存修復事業助成公募を締め切る 応募件数 61件、金額 176百万円
	1.30	第76回理事会(決議の省略) 第35回評議員会開催の件
	2.2	2026年度自然科学研究助成公募を締め切る 応募件数 1,549件、金額 11,384百万円
	2.19	第77回理事会 「2026年度(2027年3月期)事業計画・収支予算」、「資金調達と設備投資の見込み」、「当該事業年度開始の日において行う公益目的事業の種類又は内容」の件ほか
	2.19	第35回評議員会 「2026年度(2027年3月期)事業計画・収支予算」、「資金調達と設備投資の見込み」、「当該事業年度開始の日において行う公益目的事業の種類又は内容」の件ほか
	3.18	2026年度人文科学第2回選考委員会 助成有力候補選出、一部につき面接を決定
	3.25	2026年度自然科学第2回選考委員会 具体的選考手順、審査分担の決定
	3.26	2026年度文化財保存修復第2回選考委員会 助成金贈呈先21件推薦を決定
	3.27	2026年度社会福祉第2回選考委員会 助成有力候補選出、候補先面接等の分担・日程を決定
	3.31	2025年度(2026年3月期)期末決算
	4.6	2026年度人文科学第3回選考委員会 一部有力候補者の面接選考、助成金贈呈先44件推薦を決定
	4.14～22	社会福祉助成有力候補者の面接選考
	5.8～10	2026年度自然科学第3回選考委員会 助成候補の審議検討、助成有力候補を選出
	5.26	第78回理事会(決議の省略) 2025年度(2026年3月期)事業報告・決算報告承認ほか
	5.26	2026年度自然科学第4回選考委員会 助成有力候補者の面接選考、助成金贈呈先94件推薦を決定
	5.29	2026年度社会福祉第3回選考委員会 面接等に基づき、助成金贈呈先46件推薦を決定
	6.17	第79回理事会 ○2026年度助成先決定 ・第57回(2026年度)自然科学研究助成金贈呈先94件の承認 ・第55回(2026年度)人文科学研究助成金贈呈先44件の承認 ・第57回(2026年度)社会福祉事業・研究助成金贈呈先46件の承認 ・第8回(2026年度)文化財保存修復事業助成金贈呈先21件の承認 ○2027年度選考委員選出(自然科学11名、人文科学5名、社会福祉6名、文化財保存修復3名) ○諸事業費助成実行
	6.17	第36回評議員会 ○2025年度(2026年3月期)事業報告・決算報告承認 ○評議員選任(新任3名・重任14名)

三菱財団基金拠出会社

三菱重工業株式会社	MAアルミニウム株式会社
株式会社三菱UFJ銀行	郵船ロジスティクス株式会社
三菱商事株式会社	三菱電線工業株式会社
三菱UFJ信託銀行株式会社	株式会社島津製作所
明治安田生命保険相互会社	株式会社GSユアサ
東京海上日動火災保険株式会社	旭ファイバーグラス株式会社
三菱電機株式会社	大日本塗料株式会社
ENEOSホールディングス株式会社	三菱UFJニコス株式会社
麒麟ホールディングス株式会社	三菱HCキャピタル株式会社
三菱地所株式会社	アストモスエネルギー株式会社
三菱自動車工業株式会社	株式会社ロジスネクスト
AGC株式会社	日本タタ・コンサルタンシー・サービシズ株式会社
三菱マテリアル株式会社	NYKバルクシップパートナーズ株式会社
三菱UFJ証券ホールディングス株式会社	三菱総研DCS株式会社
三菱ふそうトラック・バス株式会社	三菱ケミカル株式会社
日本郵船株式会社	ピーエス・コンストラクション株式会社
三菱ガス化学株式会社	
株式会社ニコン	
三菱倉庫株式会社	
三菱ケミカルグループ株式会社	
三菱製鋼株式会社	
三菱製紙株式会社	
三菱化工機株式会社	
株式会社三菱総合研究所	

以上40社
(2026年7月現在)

公益財団法人 三菱財団

〒100-0005

東京都千代田区丸の内2丁目3番1号

三菱商事ビルディング21階

電 話 (03) 3214-5754

F A X (03) 3215-7168

E-mail info@mitsubishi-zaidan.jp

三菱財団 ホームページ

<https://www.mitsubishi-zaidan.jp>

公益財団法人 三菱財団
THE MITSUBISHI FOUNDATION

